

と
こ
は
と
の
は

第 39 号
2 0 2 6

常葉大学外国語学部言語文化研究会

表紙の題字は木宮健二理事長

目 次

I 巻頭言

言葉を学ぶ皆さんへ—話していい、書いていい、間違えていい
.....増井 実子..... 1

II 外国語学部共通

1. エッセイ

Keoko という名の謎を追って.....天野 剛至..... 5
越境する教師として—学びの場「みらいろどり」が育むもの
.....中島 義和..... 9
ホセ・ムヒカ氏の妻、ルシア・トポランスキー氏に学ぶ、
大学時代にもつ信念.....宮腰 宏美.....14
英語と向き合い続けた私が出たもの.....植田 愛実.....19
Inscrutable Literary Murderers Embodying the Nietzschean Übermensch
..... MACHIDA Koki.....23
二つの学びの場で築いた第二言語教育.....安田 翔.....29

2. コロキウム

2025 年度 外国語学部コロキウム32
2025 年度 英米語学科コロキウム山田 昌史.....36

3. 外国語学部言語文化研究会講演会

2025 年度 外国語学部言語文化研究会講演会
「現代に生きる小泉八雲、そして怪談」報告と随感
.....那須野 絢子.....37

4. 外国語学部研修会

2025 年度 外国語学部研修会40

5. 特別研究の題目

2025 年度 グローバルコミュニケーション学科特別研究
共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧.....42

6. 日本語教員養成課程の活動報告

常葉大学外国語学部 日本語教員養成課程が文部科学省により
『登録実践研修機関及び登録日本語教員養成機関』として登録
.....坂本 勝信・谷 誠司.....46

7. 学内外での教職員や学生の取り組み

空の仕事の舞台裏へー『航空ビジネス』における

授業実習『JAL 研修』の実施	新妻 明子	47
2025 年度 中島ゼミ 活動報告	金 桃圭・中島 義和	50
「みらいろどり」の活動を通して得てきたもの		
.....	森永 太陽・中島 義和	54
中島ゼミを通してのゼミ生の変化	林 遥樹	57
合同ゼミナール	植田 晴名	59

Ⅲ 英米語学科

1. 高等学校英語対話弁論大会

第 41 回静岡県高等学校英語対話弁論大会報告		67
-------------------------	--	----

2. English Speech Contest

The 2025 Tokoha University English Speech Contest		69
---------------------------------------------------	--	----

3. 教員採用試験合格者

教員採用試験合格体験記	川上 拓真	71
-------------	-------	----

4. クレイトン大学プログラム

2025 年度 クレイトン大学との交流プログラム		73
--------------------------	--	----

Welcome Party for Creighton University Students

.....	Peter HOURDEQUIN	77
-------	------------------	----

Regarding the Recruitment of Host Families for the 2025 Creighton

University Exchange Program

.....	MIYAKOSHI Hiromi and Robert MCLAUGHLIN	78
-------	----------------------------------------	----

5. 語学研修

2024 年度カナダ語学研修報告		85
------------------	--	----

6. 実習科目

国際交流実習	宮腰 宏美・那須野 絢子・町田 幸希	86
--------	--------------------	----

IV グローバルコミュニケーション学科

1. 多言語レシテーション大会

第 12 回多言語レシテーション大会	91
--------------------------	----

2. 社会人基礎力養成

DX が学生たちの時代に及ぼす影響に関する一考察	谷口 茂謙.....94
--------------------------------	--------------

3. 臨地実習

2025 年度 臨地実習 A 活動報告	増井 実子.....98
---------------------------	--------------

受講者レポート

コミュニケーションを通じた交流の重要性.....	福田 りお..... 102
--------------------------	----------------

楽しさがつないだ多文化共生のかたち.....	岡本 美月..... 103
------------------------	----------------

臨地実習 C (中国コース) 実施報告.....	戸田 裕司..... 105
--------------------------	----------------

臨地実習 C (韓国コース) 実施報告—共通課題を現地で学ぶ—	崔 慶原..... 107
------------------------------------------	---------------

受講者レポート

韓国における外国人労働者の受け入れと課題.....	青木 真子..... 109
---------------------------	----------------

V 各言語圏での活動

1. 英語圏

Through My Study Abroad Experience	KOBAYASHI Saki..... 113
------------------------------------------	-------------------------

カナダビクトリア語学研修～異文化に触れて見えた自分の成長～	西村 優杜..... 114
----------------------------------------	----------------

2. スペイン語圏

語学研修を通して見えたスペインの暮らし.....	後藤 祐輔..... 116
--------------------------	----------------

スペインでの学び.....	小柳 幸輝..... 117
---------------	----------------

言葉の壁を越えて学んだこと

—スペイン・アリカンテ語学研修を通して—	永井 彩仁佳..... 119
----------------------	-----------------

スペイン留学での経験.....	中村 祐大..... 120
-----------------	----------------

語学研修を通じた自己成長.....	西澤 獅道..... 122
-------------------	----------------

異文化経験とコミュニケーション.....	宮崎 亮瑛..... 123
----------------------	----------------

アリカンテ語学研修で得たもの.....	吉添 結衣..... 124
---------------------	----------------

スペイン語学研修を通して得られたもの.....	依田 彩花..... 126
-------------------------	----------------

2025 年度スペイン・ラテンアメリカ特別研究サブレポート抄録	128
------------------------------------------	-----

3. ポルトガル語圏

日本語とポルトガル語の親密性

—日本からポルトガルにもたらされた単語—……植田 晴名……	132
全日本ポルトガル語弁論大会への挑戦……植田 晴名……	136
全日本ポルトガル語弁論大会に参加して……永井 晴花……	137

4. 中国語圏

中国研修における学生交流と相互理解の経験

—2025年3月〈臨地実習C〉で感じたこと— ……米津 小智……	139
----------------------------------	-----

VI 退職者

良知 恵美子先生……	145
天野 剛至先生……	146
市川 真矢先生……	147

VII 外国語学部言語文化研究会

常葉大学外国語学部言語文化研究会講演会……	151
『とこはことのは』39号 ……	151

I 卷頭言

言葉を学ぶ皆さんへ

—話していい、書いていい、間違えていい—

外国語学部長 増井 実子

英語の *infant*、スペイン語の *infante* という言葉は、「乳児」や「幼い子ども」を意味します。この語はラテン語の *infans* に由来し、「話さない者」「言葉を持たない存在」という意味を持っていました。*in-* (否定) と *fari* (話す) から成るこの語は、単に声を出せない存在を指すのではなく、社会の中で理性的な言葉として自分を十分に表現できない状態を意味していました。欧米社会では長く、言語は理性や判断力、さらには人としての主体性の証と考えられてきたのです。

しかし、「話せないこと」と「話してはいけないこと」は、まったく別です。歴史を振り返ると、多くの人々が確かに語り、また書いていたにもかかわらず、その言葉が「正しくない」「公にするに値しない」とされ、聞き取られず、記録されない経験をしてきました。たとえば、私の専門領域である近世スペイン史には、モリスコと呼ばれる人々がいます。彼らはレコンキスタ後のキリスト教社会に残留した、イスラムからの改宗者でした。日常ではアラビア語やアラビア語由来の話し言葉を使い、ときにはスペイン語をアラビア文字で書くなど、多様な形で言葉を用いていました。

ところが、彼らの日常的な言葉は *algarabia* (アルガラビア) — すなわち「意味のわからない話し言葉」「雑音のような言語」と呼ばれました。彼らは沈黙していたわけではありません。確かに語り、書いていたのです。ただ、その言葉が「正統なスペインの言語ではない」とされ、公的な場から排除された結果、語っていないものとして扱われたただけでした。問題だったのは、表現が拙いことではなく、語ること、書くことそのものが認められなかったことでした。

現在の日本では、語ることや書くことを外から抑圧される状況は、通常ありません。しかしその一方で、今は外からの抑圧ではなく、自分自身の内側にあるブレーキによって、言葉を発することをためらってしまう場面が多いように感じています。外国語を学ぶ皆さんも、授業や留学、多文化交流の場で、「間違えたら

どうしよう」「こんな表現でいいのだろうか」と不安になることがあるでしょう。発言をためらったり、レポートやエッセイを書き始められなかったりする経験は、誰にでもあるものです。

けれども、外国語学部は、完璧な言葉を使える人のための場所ではありません。ここは、未完成な言葉を使いながら、少しずつ世界との距離を縮めていく場所です。留学先の授業で拙い言葉でも意見を述べた経験、海外の友人に短い文章を書いて思いが通じた経験、学内の国際交流で、片言の会話や簡単なメッセージから関係が始まった経験——そうした一つ一つが、皆さんの言語を確かなものにしていきます。

言葉は、完成してから使うものではありません。使いながら、間違えながら、育てていくものです。本学外国語学部が、皆さんにとって安心して表現を試せる場であることを、学部長として願っています。

話していい。

書いていい。

そして、間違えていい。

その一步一步が、世界とつながる確かな力になるのです。

II 外国語学部共通

1. エッセイ

Keoko という名の謎を追って

天野 剛至

リンダ・スー・パーク (Linda Sue Park) による *When My Name Was Keoko* (2002) (邦題『木槿 (むくげ) の咲く庭 — スンヒィとテヨルの物語』柳田由紀子訳、新潮社、2006 年) は、日本統治下の朝鮮半島を舞台に、朝鮮人の兄妹キム・テヨル (Kim Tae-yul) とスンヒィ (Sun-hee) の視点から、植民地社会における抑圧と抵抗の日々を描いた児童向け歴史小説である。著者パークは、1960 年生まれのアメリカ・イリノイ州出身のコリア系アメリカ人二世作家であり、1999 年のデビュー以来、朝鮮半島の歴史を背景にした児童文学を継続的に発表してきた。近年では、世界的な人気を誇る体感型冒険児童小説『サーティーナイン・クルーズ』(*The 39 Clues*) シリーズの共同執筆の一人としても知られ、日本でも KADOKAWA から翻訳出版されていることから、その名に触れた読者も少なくないだろう。

本作は、パークにとって四作目となる児童向け歴史小説である。タイトルが示すとおり、物語の舞台である 1940 年前後は、朝鮮半島で創氏改名政策が本格化した時期にあたる。原題 *When My Name Was Keoko* も、まさにこの政策を強く意識したものだ。物語冒頭では、キム家が自分たちに日本名をつける場面が描かれる。これに真っ先に反発するのが、同居する叔父ヨンチュン (Young-chun) である。

「俺は嫌だ! (中略) そんなことをさせてたまるか。俺たちの名前を奪うなんて! 私は、キム・ヨンチュン。他の誰でもない!」 [*WMNWK* 10-11; 『木槿』10]

怒りのあまり壁を何度も拳で殴りつける叔父に対し、登録を怠れば逮捕されかねないと案ずるアボジ (韓国語で「父」を意味し、叔父ヨンチュンにとっては兄) は現実的な対応を求める。しかし叔父はこう言い放つ。

「だったら、そうしてもらおうじゃないですか！ 喜んで逮捕されましよう。日本人には、私のからだを捕らえることはできても、魂までは奪えない。私の名前は、私の魂だ！」〔WMNWK 11;『木槿』 11〕

この言葉には、民族的アイデンティティへの強い執着と、植民地権力に対する揺るぎない抵抗の意志が凝縮されている。名を奪われ、支配者によって新たな名前を強制されるという経験は、個人の尊厳を根底から揺さぶるものであり、名前とアイデンティティの不可分な関係を際立たせる。

一方で、家長であるアボジは、より現実的な判断を下す。キム一族がかつて山岳地帯の領主であったという家の由来に因み、「金山（カネヤマ）」という名字を選ぶ。それに続いてテヨルとスンヒィの兄妹も、それぞれ自分自身に日本名をつけることになる。こうして、兄のテヨルは「伸男（ノブオ）」に、妹のスンヒィは「ケオコ（Keoko）」となる……。

「ん？ ケオコだって？」——日本人の読者であれば、この名前の響きに少なからず違和感を覚えるのではないだろうか。私自身もまさにその一人だ。存在しない名前とは言い切れないまでも、この名にどのような漢字を当てるのかは容易には想像できない。そこで私は、この *Keoko* という名の謎を追ってみることにした。

小説のあとがきによれば、この名は戦時中の著者の母親の名前であったという（著者パークはアメリカ生まれの二世であるため、母親は成長後にアメリカへ移住したことになる）。わずか一世代前の出来事であることを踏まえれば、単なる記憶違いである可能性は低いだろう。むしろ、ハングルあるいはローマ字表記に転記される過程で生じた誤表記が、そのまま著者に伝えられたと考えるほうが自然である。

私は、*Keoko* の原形となった可能性のある名前として、①「きよこ」、②「きょうこ」、③「けいこ」の三つを想定した。まず①「きよこ」について見ると、邦訳版では「清子（きよこ）」という漢字と読みが充てられている。翻訳者である柳田由紀子は、おそらく原著者パークに対して、この名前の「正しい」読みを問い合わせたものと思われる。しかし、その問いに対して、パーク自身が明確に答

II. 1. エッセイ

えられたとは考えにくい。また、私が「きよこ」という読みをそのまま受け入れたい理由は次の点にある。邦訳版には「清子の『清』には、『濁りなく澄んでいるという意味がある。『心が澄んでいて美しい』女の子。わたしの本当の名前と同じ意味だ」という一節が見られる（『木槿』27）。しかし、実はこの記述は原書には存在しない。意味づけの整合性を保つために、翻訳者が創作的に補った可能性があるとは私は考えている。

一方、私が当初から有力と考えていたのは、②「きょうこ」である。韓国語において“eo”音は、母音「ヨ(ヨ)」を用いられる際に現れる。例えば、「겨자」(gyeoja; 辛子・芥子)という単語は[kjɑdʒa]と発音され、その語頭音節は日本語の「キョ」に近い音価をもつことが確認できる。加えて、「京子」という名前は、日本において1936(昭和11)年以降、女子の生年別人気名の上位に位置づけられており(明治安田「生まれ年別名前ベスト10」)、創氏改名政策が進められた1940年代前後には、朝鮮半島においても一般的な名前であった可能性が高い。実際、当時の朝鮮半島に生まれた女子の名にはハングル読みの「경자(キョンジャ)」が多く見られる。

ただし、注意すべき点として、「경자」という表記には、別の漢字も対応し得る。その一つが「敬子(けいこ)」だ。したがって、③「けいこ」である可能性も完全には否定できない。しかし、原著には別に「恵子(けいこ)」という日本名を持つ女子が登場しており、こちらはKeikoと正しいローマ字表記で登場する[WMNWK 42; 『木槿』64]。この点から、「けいこ」である可能性は排除される。

以上を踏まえると、私の見立ては次の通りである。「きょうこ」は、「きょ」という拗音を含むことから、ハングル、あるいはローマ字へと書き換えられる過程で表示上のずれが生じた可能性が高い。「京子(きょうこ)」がハングルに転写される際、「경(Kyōng / Gyeong)」に相当する部分のみが変化し、それがさらにローマ字化される過程で“Keo”と表記され、「ko」と結合することでKeokoという形が生じたのではないか、という仮説である。リンダ・スー・パークがこの仮説にどれだけ関心を示すかはわからないが、近くこの考察を記した手紙を彼女に宛てて送るつもりである。

参考文献

明治安田 (n.d.) 「生まれ年別名前ベスト 10」 https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/year_men/ (アクセス 2025 年 8 月 30 日) .

Park, Linda Sue. *When My Name Was Keoko*. Clarion Books, 2002. (リンダ・スー・パーク著、柳田由紀子訳『木槿の咲く庭——スンヒィとテヨルの物語』新潮社、2006 年)

越境する教師として

一学びの場「みらいろどり」が育むもの

中島 義和

東京から福岡へと拠点を移して以降、広島や愛媛県の今治、静岡とフィールドを移しつつ、それらを行き交う日々が続いている。授業や研究、研修会など、季節ごとに越境のかたちは変わる。訪れる土地が変われば、出会う人も風景も異なり、その違いが次の授業を生み出すきっかけになる。いまの私にとって、「移動すること」はすでにまさに“学びの一部”になっている。

越境という学びのかたち

教育の理論では、異なる場を行き来しながら学びを深めることを「越境的学習 (boundary crossing)」と呼ぶ。この理論は、フィンランドの研究者 Y. Engeström による「拡張的学習 (expansive learning)」を背景に、Akkerman & Bakker らが発展させた。異なる実践共同体を横断し、既存の枠組みを越えて新しい意味や実践を生み出す。私自身の越境もその延長にある。大学と学校、研究と授業、教育と生活——それぞれの境界を往還しながら、私は自分の教師像を更新してきた。

私の越境は、いくつかの層で形づくられている。第一は空間的越境。各地を行き来し、土地の光や匂い、人の声に触れることが新たな視点をもたらす。第二は専門的越境。英語教育、教員養成、教科等横断的な授業デザイン——異なる領域を結びつける試みが、理論と実践のあわいに新しい知を生む。第三は人的越境。学生や現職教員、地域の教育者が学び合うことで互いの経験が響き合う。そして第四が内省的越境。旅の途中で立ち止まり、自分の経験を言葉に置き換える時間。それらが重なり合い、私の中で「学びの地図」が描かれていく。

教育の地層をめぐる旅

福岡では、未知だった小学校の教育に携わった。勤務したのはキリスト教主義の学校で、毎朝の礼拝から一日が始まる。私自身も職員朝礼で祈りを捧げ、宗教的理念が学校文化のすみずみに息づいていることを感じた。道徳や行事、給食の

時間にまで、祈りや感謝のことばが自然に溶け込んでいた。

担当は外国語と情報の専科で、初めて一年生から六年生まで全学年を受け持った。発達段階によって使うことばや表現が大きく異なり、中高の教員であった私にとって、まずは子どもたちの「ことば」を学び直すことが課題だった。特に手こずったのは一年生へのことばがけ。言葉を尽くしても届かないこと、逆に一言で空気が変わること——その一つひとつに、教育の原点を改めて見出していった。

初任者として月ごとの新任研修を受け、配属学年を変えながら国語・算数・社会の授業を担当した。英語以外の教科に向き合うことは、自分の専門を越えて学び直す刺激に満ちていた。担任の先生が不在の際には、臨時で十二クラスすべてに入る機会を得た。学級ごとに文化があり、教師の数だけ教育のかたちがあることを実感した。その違いに触れるたび、学級という小さな社会の力を感じた。大学院時代、私は小学校の一年級をフィールドにして談話を分析し、学級文化を探っていた。そのとき学んだ「ことばが関係をつくる」という視点が、現場の子どもたちとのやりとりの中で息を吹き返したように思う。

広島での生活は、ちょうどコロナ禍の只中と重なっていた。新しい学校で中学一年生の担任を任せられ——それは、私にとって二校目となる大学附属中学校での勤務でもあった——迎えた入学式の日。隣のクラスの担任が発熱で出勤できず、私は八十人分の呼名を行った。マスク越しに名前を呼ぶたび、子どもたちの目が一瞬輝くのが見えた。そんな緊張と不安の入り混じった幕開けから、試行錯誤の日々が始まった。

英語という教科の特性上、コミュニケーションが欠かせない。しかし感染防止のために対話も活動も制限される。その中でどうやって「学ぶ楽しさ」を取り戻すかが課題だった。私は、わずかな余白の中に小さな喜びを生み出そうとした。朝礼では誕生日の生徒をみんなで祝い、終礼では即席のクイズ大会やお楽しみ会を開いた。学級通信には、生徒と毎日やりとりする生活記録ノートに紡がれた、ハッシュタグを付したキーワードや短編小説を掲載し、誌上での話題交流の場としてつないだりもした。そうした工夫の積み重ねから、少しずつ「このクラスらしさ」と呼べる文化が形づくられていった。

年度の途中、木曜日の放課後に中学校を離れ、翌日の金曜日には大学に着任した。朝一番の授業を終えたその足で辞令を受け取るという、前代未聞の転職劇だっ

II. 1. エッセイ

た。あのときの緊張と高揚はいまも鮮明だ。その後も広島との縁は形を変えて続き、かつて勤務した附属中学校には共同研究者・指導助言者として関わり、前任の大学では週に一度授業を担当している。研究と教育を往還するこの経験こそ、私にとって越境の象徴である。

今治では、新しい高校の立ち上げに携わった。小学校から大学まで多様な現場を歩んできた私にとって、「いつか自分の手で学校を創りたい」という夢があった。その機会が訪れたのは、開校前年度の秋。オンラインで会議を重ね、翌年四月の開校に向けて準備を進めた。やがて八人の仲間が集まり、三十四名の一期生とともに真の学校づくりが始まった。

私は教務部長と学年主任を兼務することになった。学年の中心は高校教職経験のない若い先生たち。私自身もおよそ十五年ぶりの高校現場である。そこでは「一斉授業をしない」「個別最適な学びを軸に据える」「授業の半分を探究的な学びに充てる」という新しい教育方針が掲げられていた。個別最適な学びの授業づくりや教務システムの設計など課題は尽きなかったが、仲間と共に形にしていく時間は、課題の困難を上回る充実感に満ちていた。現在はアドバイザーコーチとして、教育課程や教務運営の支援に関わっている。今年度は新入生が今年の約三倍に増え、学校の新しい可能性が少しずつ広がっている。

静岡に拠点を移して半年が過ぎた。授業をはじめ、コロキウムでの報告や学内FD・SD研修会でのユニバーサルデザイン授業の報告、夢ナビ講義への出演など、新しい学びの場をいただいている。新しい環境で、これまでに得た経験や越境の学びを少しずつ形にしていく時間は刺激的だ。広島時代に立ち上げた自主的な学びの組織「みらいろどり」を、静岡でも始動することができた。学生たちが自分の学びを語り合い、将来の教育をともに構想していく姿に可能性を感じている。静岡の地で英語教育に貢献し、未来の教師たちの学びを支えていきたい。

共創する学びの色—みらいろどり

こうした越境の経験を学生と共有したいという思いから、数年前、広島に在職中、「みらいろどり—Color Our Future!」を立ち上げた。教員志望学生や若手教員が集まり、学びと教育実践を支え合う場である。目的は、時代の変化に応じた英語教育のあり方を探究しながら、未来の教師として共に育つことにある。

活動は週一回の学びの時間を中心に展開している。英語教育や授業づくり、英語や教師力の育成・向上など、テーマは多岐にわたる。今後は現職教員との交流など、現場と大学をつなぐ試みも構想している。授業を構想するという行為そのものが、未来をデザインすることに等しい。

学生たちはそれぞれの得意や関心を「色」として持ち寄り、互いの違いを尊重しながら学び合う。かつての学びの会である学生が言った。「授業って、正解を教えることじゃないんですね。自分の言葉で考えていいんだって気づきました」。その一言が、教えることと学ぶことの距離をぐっと近づけた。また別の日、ある若手教員が語った。「教員同士が支え合う文化をつくりたい。そういう場所があるだけで安心できるんです」。その言葉に、みらいろどりの存在意義を改めて感じた。

学生も現職教員も、肩書や年齢を越えて同じ輪の中で語り合う。そこでは「教える側」と「学ぶ側」の境界がゆるやかに溶け、互いに学び合う関係が生まれる。私の越境は、こうして「私たちの越境」へと広がっていった。

ことばの越境と未来へのまなざし

振り返れば、越境とは境を越えることではなく、境界をつなぎ直す営みなのだと思う。大学と学校、学生と教師、理論と実践。分け隔てる線を引くのではなく、そのあいだに立ち続けること。そこに教育の生命力が宿っている。越境とは、対立を調停することでも、単に融合することでもない。異なるものが響き合い、たがいの意味を拡張していくプロセスである。

そして、その“あわい”をつなぐのが「ことば」だ。授業で交わされることば、研究で紡がれることば、仲間との対話の中で生まれることば。それらは行き来し、混ざり合い、やがて新しい地図を描く。ことばが生まれる瞬間には、いつも人と人との出会いがある。私はその瞬間を信じて、今日も教室に立つ。

みらいろどりの仲間たちと、それぞれの色を持ち寄りながら、未来を彩る学びをこれからも描いていきたい。越境の旅は終わらない。それは常に、次の誰かへと手渡されていく。教育という旅の途上に咲く小さな希望の花を、ことばの力でそっと育てていく。

Ⅱ. 1. エッセイ

この文章を閉じる今も、私の越境は続いている。旅の途中で出会う一人ひとりが、次の風景を照らす光になる。その光の向こうに広がる未来を信じながら、私は今日も新しい「ことのは」を探している。

ホセ・ムヒカ氏の妻、ルシア・トポランスキー氏に 学ぶ、大学時代にもつ信念

宮腰 宏美

2025年5月、国際協力の授業でも紹介したホセ・ムヒカ氏が、享年89歳で逝去した。ウルグアイ国内では、多くの市民がその死を悼み、深い哀悼の意を表して喪に服した。彼は、国連における演説で「世界で最も貧しい大統領」として知られた元ウルグアイ大統領であり、退任後も国民から慕われ続けていた。

彼の妻は、ルシア・トポランスキー氏である。彼女は、大統領の妻であると同時に、2017年から2020年にかけてウルグアイ初の女性副大統領を務めた人物でもある¹。その肩書は、元副大統領、元大統領夫人にとどまらず、元ゲリラ活動家、元上院議員としても知られ、常にこの国の政治変革の中心にあった²。

そんな彼女は、大学時代に様々な委員会に所属し、精力的にボランティア活動に取り組んでいた。大学時代の学びや経験は、その後の人生に大きな影響を与えるものだが、彼女も例外ではなく、大学時代を契機に波乱万丈の人生を歩むこととなった。

トポランスキー氏は、ウルグアイのモンテビデオで1944年に生まれ、やがて国内の不平等や権威主義の高まりと闘う民族解放運動「トゥパマロス」と呼ばれるゲリラ活動に参加する³。ムヒカ氏や多くの活動家たちとともに、圧制に対抗する闘いに加わったが、1972年から13年間にわたり投獄された⁴。釈放されたのは1985年、軍事政権崩壊後の恩赦によるものであり、トポランスキー氏が40歳、ムヒカ氏が48歳の時であった(有川, 2016)⁵。

釈放後、トポランスキー氏はウルグアイ民主主義再建に尽力し、2000年に下

¹ MercoPress. (2022). Former VP Lucia Topolansky resigns seat on Uruguayan Senate after 22 years. <https://en.mercopress.com/2022/03/02/former-vp-lucia-topolansky-resigns-seat-on-uruguayan-senate-after-22-years>

² Brasil 247. (2025). Lucia Topolansky: companheira, mas nunca coadjuvante (Paola Jochimsen). <https://www.brasil247.com/blog/lucia-topolansky-a-mulher-ao-lado-de-pepe-mujica>

³ 前掲2)

⁴ 前掲2)

⁵ 幻冬舎 plus (2016) 「生きる意味を見つけなさい」～ムヒカ前大統領夫人ルシアさんの言葉～有川真由美」 <https://www.gentosha.jp/article/6086/>

II. 1. エッセイ

院議員に選出された後、上院議員に就任するなど、2010年にムヒカ氏が大統領に就任してからも、彼女は上院議員としての活動を続けた⁶。

このように、彼女の人生は波乱に満ちている。裕福な家に生まれ、良い学校や大学に進み建築家を目指していたが、中学生の頃から国内の貧富の差に疑問を抱き、貧困地域で個人規模のボランティアを行っていた⁷。大学時代にはキューバ革命を支持する委員会に参加し、貧困地域で地元の人と共に学校や施設の建設などの大規模なボランティア活動に取り組んだが、その根底にあったものは、中学生の時に感じた「なぜ国内にこのような格差があるのか」という疑問と、大学での活動を通じて培った「国の問題をどう解決するか」という意欲であった。1960年代以降、ウルグアイが経済危機と所得格差の拡大に直面する中、トポランスキー氏は、アメリカ資本の流入を目の当たりにし、1962年にチェ・ゲバラの思想に影響を受けた極左武装勢力「トゥパマロス民族解放運動」に加わる。

当時彼女は大学生で、大学を辞めずにゲリラ活動を続けていたというが、皆さんの中で社会に疑問や不満をもち、それを解決するために実際に行動を起こしたり、活動する人はどれほどいるだろうか。

ゲリラ活動に参加した理由を彼女はこう語る。

「小中学校とカトリックの学校に通っていましたから、私は小さいときからそういう教育を受けていたんです。人を尊重し、人の思いを大事にすることを教えられて、いつしかみんなの幸福を願うようになっていた。だけど、あのときのウルグアイは、貧富の差が広がるばかりのひどい状態。アメリカから植民地扱いをされているという現実もありました。こんな世の中を変えたい。その思いが原動力になったんでしょうね (p. 55)⁸。」

ウルグアイの貧富の差の解消を目指していたトポランスキー氏は、大学で社会の仕組みを学び、知識を深めるほどに、世の中の流れを変えたいという思いが強

⁶ 前掲2)

⁷ 佐藤, 美由紀. (2017). 信念の女、ルシア・トポランスキー—ホセ・ムヒカ夫人 激動の人生. 双葉社.

⁸ 前掲7)

くなっていったのではないだろうか。

日本における格差はどうだろうか。日本労働組合総連合会⁹によると、2021 年の子どもの相対的貧困率は 11.5% であり、9 人に 1 人が貧困状態にあり、特にひとり親世帯は 44.5% が貧困に該当するとしている。三菱 UFJ & コンサルティング¹⁰ は、相対的貧困率を「貧困線を下回る可処分所得しか得られていない人の割合」と定義している。貧困線とは、一人当たり可処分所得（手取）の中央値の半分で表され、2021 年の場合、一人当たり可処分所得の中央値は 254 万円であるため、貧困線はその半分の 127 万円となり、可処分所得が 127 万円に満たない子どもが相対的貧困に該当するが、3 人家族では世帯の可処分所得が 220 万円未満、4 人家族で 254 万円未満の世帯の子どもが該当するとしている¹¹。

これほどの所得格差が広がっているのであれば、高額所得者の税の負担を増やすべきだと考えるのが一般的である。しかし実際には、所得税の最高限界税率は段階的に引き下げられており、日本では 1980 年の 75% から現在の 45% へと減少している¹²。

近年、生活必需品の価格が高騰し、人々の暮らしは一層困難に直面している。トポランスキー氏は、ウルグアイにおける貧富の格差解消を目指していたが、日本において、トポランスキー氏やムヒカ氏のように私利私欲を排して、本気で格差解消に取り組む政治家は存在するのか疑問である。

さて、1972 年、ムヒカ氏は、バーで計画を練っていた時に銃弾を浴びた状態で逮捕された。同時期にトポランスキー氏も政治犯として再逮捕され、1985 年に 40 歳を過ぎて釈放されるまでの 13 年間、獄中生活を送った¹³。皆さんは、自

⁹ RENGU ONLINE. (2024). 子どもの 9 人に 1 人が貧困に陥る日本 親子に必要な支援のあり方は . https://www.jtuc-rengo.or.jp/rengo_online/2024/08/20/3932/

¹⁰ 三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング. (2023). 「子どもの貧困率」はなぜ下がっているのか? —統計的要因分析—. https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2023/08/seiken_230814_02_01.pdf

¹¹ 前掲 12)

¹² 立命館大学経済学部. (2025). Why#05 所得格差が広がっているのに、高額所得者の税負担が軽減される傾向にあるのはなぜでしょうか? . 立命館大学経済学部 WHY ECONOMICS?. <https://www.ritsumeiji.ac.jp/ec/why/why05.html/>

¹³ 有川, 真由美. (2017). 質素であることは、自由であること—世界でいちばん質素な前大統領夫人が教えてくれたこと—. 幻冬舎.

II. 1. エッセイ

分と同じ大学生の頃にゲリラ活動を始め、20代半ばで収監され、その後40歳を超えるまで拘束されることを想像できるだろうか。

トポランスキー氏は、収監されながらも読書家であり、博識であった。一説によれば、彼女とムヒカ氏は、別々の刑務所に収監されていたため、手紙のやり取りを試みていたが、受刑者への懲罰の一つとして「家族や友人からの手紙を受け取れない」という措置があり、13年間の間に手紙が届けられたのは一度だけであった。ムヒカ氏からの手紙は、検閲を逃れるため、ギリシャ古典文学のホメロスの叙事詩「イーリアス」を引用しながら書かれており、それを理解したトポランスキー氏も高い教養を有していたとある¹⁴。

知識を広げることは、思考の枠を広げ、自分の人生を豊かにし、結果として身を助けることになる。外国語学部は語学を学ぶだけの学部ではない。是非、大学時代の学びを通して、幅広い知識と教養を身に付けてほしい。

1995年の秋にムヒカ氏と副大統領が同時に不在になった際、トポランスキー氏が臨時大統領を務めることとなった。女性がウルグアイで大統領職を担うのはこれが初めてであったが、彼女にとって肩書は重要ではなく、「社会の格差を是正する」という、大学時代に志した目標を揺るがずに抱き続けていた¹⁵。

「大学時代」という貴重な時間に対する意識化の重要性を、ここで改めて強調したい。社会に出るまでの4年間という限られた期間をいかに過ごすか、何を志し、どのような大志を抱くかが、その後の人生を大きく左右するのである。外国語学部におけるこの4年間で、読者一人ひとりがどのように生き、また生きたいと望むのか、今一度自らに問い直してほしい。

La tronca (頑固女) というニックネームで呼ばれていた彼女は、社会格差の是正という信念を堅持した。政治家となった後も、彼女は自身を社会活動家であると称している。実際に、庶民や労働者との対話を非常に重視し、自分を必要とする場には積極的に足を運ぶが、富裕層の企業や組織が開催する、必要性を感じな

¹⁴ 前掲 7)

¹⁵ 前掲 7)

いようなパーティーには決して出席しなかったという¹⁶。

ルシアの秘書を務めるカレーロ氏は、次のように語っている。

「ルシアは、頑固女などと言われていますが、もしこれが男性だったらどうでしょう？『頑固＝筋が通っている、一貫性がある』などと、プラスの評価をされるのではないのでしょうか。もしかしたら、ルシア（トポランスキー氏）が女性だからこそ、『この頑固女！』という目で見られるのではないかと思うのです」と、語る (p. 160)¹⁷。

高い信念と知性、そして非常に強い精神力をもつトポランスキー氏は女性である。人類の長い歴史の中で、女性がようやく権利を獲得し始めたのは、つい先日のことである。日本においても依然として性別による不平等が存在する現代に、彼女が当時の時代背景の中で多くの成果を残すことができたのは、ひとえに彼女のゆるぎない信念と行動力によるものであろう。

人生を左右する価値観を育むことのできる大学時代において、外国語学部の皆さんには、幅広い学びを通して自分の価値観を築いてほしい。大学での学びは、それまでの教科の枠にとらわれず、興味・関心を広げ、視野を大きく広げることが可能である。そのためにも、語学力だけでなく、多様な視点に触れられる授業の選択や、充実した学内外の活動の参加を心がけてほしい。

¹⁶ 前掲 7)

¹⁷ 前掲 7)

英語と向き合い続けた私が得たもの

英米語学科 3年 植田 愛実

この一年は、私にとって英語と向き合い続けた一年だった。ただ単に英語力を伸ばすために勉強していた時間だけでなく、英語を通して人と関わり、自分自身と向き合う時間が確実に増えた一年でもあった。これまでの私は、英語をできるかできないかという尺度で捉えがちだったが、多くの経験を重ねる中で、英語はそれ以上に誰かとつながるための手段であり、自分を表現するための道具なのだと考えるようになった。同時に、英語と向き合うことは、自分の将来や価値観と向き合うことでもあり、成長を感じる場面がある一方で、不安や葛藤を抱えることも少なくなかった。そうした揺れ動く気持ちも含めて、この一年を振り返りたい。

今年の二月、私はカナダへの留学に挑戦した。海外で生活するという決断は、私にとって簡単なものではなかった。新しい環境に飛び込むことへの不安、言葉が通じなかったらどうしようという恐れ、失敗したらどうなるのかという心配が頭をよぎった。それでも、ここで挑戦しなければ何も変わらないと思い、一步を踏み出した。実際に現地に着くと、出発前に感じていた不安は不思議と薄れ、目の前に広がる新しい景色や人々との出会いに心が躍った。未知の世界に身を置くことの怖さと同時に、わくわくする気持ちを初めて強く感じた瞬間だった。しかし、留学生活は楽しいことばかりではなかった。現地の人たちが話す英語の速さについていけず、会話の輪に入れないことも多かった。言いたいことは頭の中にあるのに、それを英語にして外に出すことができない。そのもどかしさは想像以上で、自分の英語力の低さを突きつけられているように感じた。悔しさや情けなさから、落ち込む日もあった。それでも、伝えたいという気持ちだけは消えなかった。完璧な英語でなくてもいいから、まずは自分の思いを相手に届けようと決め、少しずつ自分から話しかけるようになった。通っていた学校では、同じように外国から来ている生徒に積極的に声をかけ、拙い英語でも会話を重ねていった。文法や発音が完璧でなくても、相手が耳を傾け、理解しようとしてくれるこ

とに気づいた時、英語は正しさだけで成り立っているのではないのだと実感した。自分の思いが英語で伝わった瞬間の喜びや、留学という大きな挑戦をやり遂げたという達成感は、これまで感じたことのない自信につながった。帰国後、友人から「変わったね」と言われることが増えた。以前の私は、新しいことに挑戦する前から失敗を恐れていたが、今は「やってみないとわからない」と思えるようになった。人前に立つ時も、完全に緊張しなくなったわけではないが、以前よりも落ち着いて自分らしく振る舞えていると感じている。清水銀座商店街で外国人観光客向けイベントのボランティアに参加した際にも、英語に対する考え方が大きく揺さぶられた。担当の方が、流暢とは言えない英語でも、ためらうことなく次々と外国人に話しかけている姿がとても印象的だった。「英語は完璧じゃなくてもいい。とにかく話しかけることが大事。」という言葉は、留学で感じたことと重なり、私の中に強く残った。伝えようとする姿勢そのものが、相手との距離を縮めるのだと改めて気づかされた経験だった。

英語科教育の授業では、英語を教える立場から捉える視点を学んだ。学習指導要領の読み込みや教科書分析、模擬授業を通して、英語教員として求められる力の多さを実感した。教員としての話し方や立ち居振る舞い、目線の配り方など、意識することは想像以上に多く、最初は戸惑いばかりだった。三十人近い生徒を前に、想定外の反応にも対応しなければならないと考えると、自分に務まるのだろうかという不安も大きかった。それでも、模擬授業を重ねる中で、少しずつ生徒に伝わる英語を意識できるようになった。ただ英語を話すのではなく、どんな目的でこの活動を行うのか、生徒にどんな力を身につけてほしいのかを考えながら授業を組み立てることの面白さを知った。最近では、授業を考える時間そのものが楽しいと感じられるようになっていく。ゼミでは第二言語習得について学び、その中でも特に「気づき」の重要性が心に残っている。学習者が言語に注意を向けることで理解が深まるという考え方は、これまでの自分の学習経験とも重なった。教師が理解可能な英語で働きかけ、生徒が自然な流れの中で誤りに気づくことができる授業は、生徒の負担を減らしながら学びを支えるものだと感じた。将来教員になった時には、生徒が「気づいたこと」に目を向けられるような授業を行いたいと思うようになった。また、教職を取っていないゼミの仲間との意見交換は、自分にはなかった視点を与えてくれた。不安だった人間関係も、活動を通

II. 1. エッセイ

して少しずつ信頼へと変わっていった。

私はこれまで、明確な将来像を持たないまま進路を選んできた。英語が好きという理由だけで教員志望を決め、人前で話すことが得意ではない自分に務まるのだろうかと悩み続けてきた。周囲と比べては自信を失い、自分には何ができるのだろうかと立ち止まることも多かった。特に、同じ教職課程を取っている仲間との存在は、私にとって刺激であると同時に、劣等感の原因でもあった。周りの仲間は、教員になりたいという強い思いを持ち、自分の考えをすぐに言葉にして伝えることができるように見えた。授業や話し合いの場面で、自分にはないものを仲間が次々と発言していく姿に、思わずしり込みしてしまうこともあった。私は、彼らと比べて熱意が足りていないのではないか、教員を目指す資格があるのだろうか、自分を否定的に捉えてしまうこともあった。しかし、同じ教職課程を共に歩む中で、仲間たちもまた、それぞれに不安や迷いを抱えていることを知った。自信があるように見えていた仲間も、実は悩みを抱えていたり、将来に不安を感じていたりすることが分かり、迷っているのは自分だけではないと思えるようになった。その気づきは、私の気持ちを軽くしてくれた。互いの弱さや不安を共有しながら、一緒に乗り越えようとする中で、仲間は比較の対象ではなく、切磋琢磨し合える存在へと変わっていった。教職課程という同じ道を選んだからこそ得られたこのつながりは、私にとって大きな支えである。また、先生方の存在も、私が教員を目指し続ける上で欠かせないものだった。先生方は、私が抱える不安や迷いを否定することなく、私の性格や歩みのペースを理解した上で声をかけてくださった。自信が持てずにいる私に対して、できていない部分ではなく、できている部分や伸びつつある部分に目を向けてくださったことが、少しずつ私の心を支えてくれた。そのまま大丈夫だと言ってもらえたような気がして、教員を目指すことへの不安が和らいでいった。家族の存在もまた、私の挑戦を陰で支えてくれていた。特に、留学という大きな決断を受け入れ、背中を押してくれたことには感謝の気持ちでいっぱいである。最初は、私が教員になれるのかと不安を抱いていた様子もあったが、それでも私の選択を尊重し、日々努力する姿を静かに見守ってくれた。言葉にして応援されることばかりではなかったが、その分、信頼されていることを感じる場面も多かった。家族がいてくれたからこそ、私は安心して挑戦し、迷いながらも前に進むことができたのだと思う。

この一年、留学やボランティア、英語科教育の授業、ゼミでの学びなど、さまざまな経験を重ねる中で、私の中には少しずつ「どんな教員になりたいのか」という像が形づくられてきたように思う。まだはっきりと言葉にできるほど確固としたものではないが、それでも以前のように漠然とした不安の中にいるわけではなく、自分なりの軸のようなものが見えてきた。私になりたいのは、英語をツールとして、生徒の世界を広げることのできる教員である。英語を通して、多くの人と関わり、多様な考え方や価値観に出会ってほしいと思う。異なる文化や背景を持つ人と関わる中で、驚いたり、戸惑ったり、ときには自分の考えが揺さぶられることもあるだろう。しかし、そうした経験こそが、生徒の視野を広げ、ものの見方を豊かにしてくれるのではないかと感じている。同時に、私は生徒に、他者を理解することと同じくらい、自分自身を受け入れていくことの大切さを伝えていきたい。留学中の私は、英語がうまく話せない自分に落ち込み、周囲と比べて自信を失うこともあった。それでも、完璧ではない自分のまま一歩を踏み出し、思いを伝えようとした経験が、少しずつ私の自信につながっていった。だからこそ、生徒にも、できない自分や不安を抱える自分を否定するのではなく、そうした自分も含めて受け止めてほしいと思う。その積み重ねが、自分を信じる力につながっていくと私は信じている。英語の授業は、間違えたり、悩んだり、考えたりする場面が多く存在する。だからこそ、教員である私自身が、生徒の挑戦や葛藤に寄り添い、「やってみよう」と思える雰囲気をつくる存在でありたい。生徒が英語を通して多くの経験をし、多くの人と出会い、その中で自分なりの考えを育てて行ってほしい。これから先、迷いや不安が完全になくなることはないと思う。それでも、この一年で得た経験や気づきは、私の中に確かな土台を築いてくれた。英語を通して、生徒一人一人が自分の世界を広げ、自分自身を肯定できるよう支えられる教員になることが、今の私の目標である。英語と向き合い続けてきたからこそ見えてきた、自分なりの教師像を大切にしながら、これからも学び続けていきたい。

Inscrutable Literary Murderers Embodying the Nietzschean *Übermensch*

MACHIDA Koki

(Sophomore, Department of English)

Analyzing the psychology of a protagonist of a novel sometimes reveals relevance to philosophical ideas. This year I had the opportunity to read two very famous novels, and I found similarities between the two protagonists. I also noticed that those similarities could be explained with philosophical ideas. Both Rodion Romanovich Raskolnikov from *Crime and Punishment* and Meursault from *L'etranger* have committed murder for no obvious reason. They regard the act of killing as nonsense, hence no feeling of guilt about their crime. They are both arrested and sent to prison. However, it is curious that for some reason they find happiness and hope in prison. Raskolnikov, who is constantly tormented by self-denial, and Meursault a nihilist, who believes that nothing has meaning, metamorphose into completely different beings through the murder, the act of which they consider nonsense. I found that Friedrich Nietzsche's idea of *Übermensch* can explain these bizarre metamorphoses. In this essay I will first summarize the two stories, then compare the two characters, find similarities, and finally explain their immoral behaviors by way of nihilism.

First of all, I will summarize the two stories. *Crime and Punishment* was published in 1865-66 by the Russian writer Fyodor Dostoyevsky, and the story is as follows. The protagonist Raskolnikov, an ex-university student in St. Petersburg who lives in extreme poverty, commits a killing of two women—one is a rich, albeit stingy pawnbroker, and the other is her sister-in-law. His superficial motive for the killing is to rob them of their money, but the real reason, according to him, is to achieve something special and become a superior species like Napoleon, who has an enormous power over “inferior” citizens. We can also learn that Raskolnikov sees the murder as nonsense and that he commits the killing to “pick up all that absurd nonsense.” Here are quotations from the book regarding his confession to the killing.

Napoleon fascinated him [Raskolnikov] dreadfully, or rather what really fascinated him was that a great many men of genius have turned a blind eye to isolated acts of wrongdoing in order to stride onwards and across, without reflecting. It appears that he, too, thought he was a man of genius—or at least was convinced of it for a certain period of time. (Dostoyevsky 586)

. . . power is given only to those who dare to lower themselves and pick it up. Only one thing matters, one thing: to be able to dare! It was then that I conceived a certain idea, for the first time in my life, an idea that has never occurred to anyone before me! Not anyone! I suddenly saw, as clearly as the sun, that in the past no one has ever dared, and still does not dare, quite simply to pick up all that absurd nonsense by the tail in passing and toss it to the devil! I . . . I wanted to *make the dare*, and so I killed someone. . . . (Dostoyevsky 499)

After the killing, he becomes agitated and leaves the murder site without fulfilling his initial purpose—to take money. Ever since the murder, he has been constantly tormented by fear and moral conflict. However, it is important to note that he does not feel any regret for the killing. His never-ending torment and agitation are caused by his self-denial that he was, after all, unable to become Napoleon. Here is the passage.

He suffered greatly, and is still suffering, from the notion that while he was able to construct a theory, he wasn't able to do the stepping across without reflection, and so consequently is not a man of genius. (Dostoyevsky 586)

Raskolnikov meets a young girl, Sonya, whose late father he helped before. Raskolnikov reveals his crime to Sonya, and she persuades him with the teachings of the Bible to make a confession to the police, atone for the crime, and resurrect his soul. At first, he hates to be preached to by Sonya, but as he spends time with her and finds solace in her, he changes his mind and decides to confess to his crime. In the end, Raskolnikov is put into

II. 1. エッセイ

prison for seven years, but Sonya, whom he has fallen in love with, comes to see him often, and he finds hope in the future.

Raskolnikov has an abnormal way of thinking, but Meursault from *L'etranger* is as strange as Raskolnikov. *L'etranger* was published in 1942 by the French writer Albert Camus. He won the Nobel Prize in Literature in 1957. It is said that *L'etranger* contributed to the nomination for the prize. The story is as follows. Meursault, a French Algerian man who is nonchalant about social norms, attends the funeral of his mother. However, he does not shed tears, nor does he know his mother's age. The day after the funeral, he meets his girlfriend, goes to a movie, and sleeps with her at his home. It seems that he does not feel anything about his mother's death. A while after this incident, when he goes to a beach with his friends, he kills a man without any reason. When asked why he murdered the man, he replies that it was because of the sun.

J'ai dit rapidement, en mêlant un peu les mots et en me rendant compte de mon ridicule, que c'était à cause du soleil. (I quickly said, mixing up my words a bit and realizing how ridiculous I sounded, that it was because of the sun.)¹ (Camus 84)

After the arrest, when he is brought to a trial, a prosecutor criticizes Meursault's immorality, picking up his indifference to his mother's death. He has no regret for the murder, and surprisingly, he has no interest in his own trial, either—whether he is sentenced to death or not, he does not care. In the novel, he says there is nothing important: nothing matters to him.

The protagonists of both stories commit murder, but they have no regret whatsoever. Obviously, they both have different ways of thinking than normal people, and I have found some similarities in their mindsets. In the following paragraphs, I will discuss analogies between them.

First, as I mentioned, both Raskolnikov and Meursault feel no guilt or remorse for the murder. Raskolnikov's stubborn claim of innocence is as follows.

“Crime? What crime?” he exclaimed in a sudden fit of fury. “My killing a loathsome,

harmful louse, a filthy old moneylender woman who brought no good to anyone, to murder whom would pardon forty sins, who sucked the lifeblood of the poor, and you call that a crime? I don't think about it and I have no plans to wipe it out. (Dostoyevsky 617)

Meursault, too, says « Je ne regrettais pas beaucoup mon acte. » (“I don't regret my act very much.”) (Camus 81) The reason why they have no regret could be that they regard what they have done as just nonsense. In other words, the act of murdering people has no meaning in itself for them.

Next, both protagonists have no faith in God. Raskolnikov has the Bible at home, which is covered with dust, and he does not attend a church service. In addition, he despises Sonya, who is an ardent Christian, as a “holy fool.” In *L'étranger*, a priest comes to Meursault's cell in prison to say a prayer before his execution. However, he refuses the priest's visit. The conversation is as follows.

« Pourquoi, m'a-t-il dit, refusez-vous mes visites? » J'ai répondu que je ne croyais pas en Dieu. Il a voulu savoir si j'en étais bien sûr et j'ai dit que je n'avais pas à me le demander: cela me paraissait une question sans importance. (He said, “Why do you refuse my visit?” I responded that I don't believe in God. He wanted to know if I was sure about it, and I said that I don't need to think twice: that is not an important question.) (Camus 94)

Finally, both protagonists grab happiness at the end of the story. Raskolnikov engages in penal servitude for seven years, during which Sonya comes to visit him, and he finds happiness in talking with her about their future. Raskolnikov is finally released from the torment and anguish. The story ends with the following passage. This final paragraph indicates that he has become a different being.

But at this point a new story begins, the story of a man's gradual renewal, his gradual rebirth, his gradual transition from one world to another, of his growing acquaintance

II. 1. エッセイ

with a new, hitherto completely unknown reality. This might constitute the theme of a new narrative—our present narrative is, however, at an end. (Dostoyevsky 656)

In *L'etranger*, Meursault finally finds happiness in his life, too, despite the fact that he will be executed at any moment now. The following passage shows that he has become a different being, too.

Et moi aussi, je me suis senti prêt à tout revivre. Comme si cette grande colère m'avait purgé du mal, vidé d'espoir, devant cette nuit chargée de signes et d'étoiles, je m'ouvrais pour la première fois à la tendre indifférence du monde. De l'éprouver si pareil à moi, si fraternel enfin, j'ai senti que j'avais été heureux, et que je l'étais encore. (And me, too, I felt ready to live a life again. As if that great anger soothed me and dispelled hopes, I opened myself, in front of this night filled with stars, to the gentle indifference of the world for the first time. I found that the world was fraternal and like me. I felt that I was happy and that I had been happy.) (Camus 100)

Now that I have looked at the similarities between the two characters, I will explain their abnormal psychology using the idea of nihilism. I am convinced that both Raskolnikov and Meursault have successfully become an *Übermensch* (overman) by strictly practicing nihilism. Before delving into analyses, I will briefly introduce what nihilism is. Nihilism is a philosophical position that argues that the world we live in, particularly human existence in the past and present, has no meaning, purpose, comprehensible truth, or intrinsic value. The idea was suggested by the German philosopher Friedrich Nietzsche. Nihilism is considered a broad cultural phenomenon in the 19th century in the Western world. There are other negative ideas towards life, such as pessimism. However, one unique characteristic of nihilism is that its goal is to accept nothingness and to create new values. Its goal, *Übermensch*, is a person who overcomes themselves, not bound by others or existing moral systems, and creates new values through their own will. Another of Nietzsche's theories is that of eternal return. It is an idea that time repeats itself, and the same event, whether happiness or unhappiness,

occurs over and over again. Therefore, finding happiness and wishing that it occurs over and over again for eternity is the ideal attitude towards life. An *Übermensch* accepts everything positively, even destiny and anguish, overcomes it, and strives for ultimate self-actualization. In short, an *Übermensch* finds hope out of nothingness and creates new values.

As we have seen, the two protagonists have no faith in God. This can be taken as a sign of a nihilist. Also, they commit murders for no clear reason. The act of killing someone is simply a means to overcome nothingness for them. After the killing, Raskolnikov suffers self-denial. However, with the help of Sonya, he is finally able to accept his failure (in becoming Napoleon) and finds hope in their future. He accepts everything and overcomes it. Raskolnikov has become an *Übermensch*. In *L'etranger*, Meursault finds interest in nothing at all, even in his own trial. He strictly practices nihilism. However, in prison he finds that he is happy and has been happy. Meursault is now ready to live a life again. He accepts nothingness and overcomes it. He has become an *Übermensch*, too.

Crime and Punishment and *L'etranger* share the same plot that a protagonist commits murder for no reason whatsoever in order to overcome nonsense. He suffers very much or finds no meaning in anything. He accepts his anguish or nothingness. Finally, he finds happiness and hope. I believe that the two stories embody the concept of Nietzsche's nihilism and *Übermensch*.

Note

1 The quotations from Camus are translated into English by the current author.

References

- Camus, A. (2020). *L'etranger* (Kindle edition). Amazon Services International.
Dostoyevsky, F. (2003). *Crime and Punishment*. Translated by David McDuff, Penguin Books.

二つの学びの場で築いた第二言語教育

英米語学科 3年 安田 翔

私にとってこの一年間は、第二言語教育について学ぶ機会に恵まれた期間となりました。振り返ってみると、その有意義な時間が私の中の何かを駆り立てたことを実感しています。この学びは、大きく二つの場で展開されました。大学のゼミや講義では理論や研究に触れ、第二言語教育の基盤となる知識を培うことができました。一方、留学を通じて CLIL を用いた英語教育の実践的な学びを得て、教室という現場で学習者と向き合う経験を積むことができました。理論と実践、この二つの視点から第二言語教育を捉えられたことが、私にとって大きな意味を持っています。

大学でのゼミや講義では、第二言語習得理論について体系的に学びました。言語習得のプロセスを段階的に捉え、学習者がどのように新しい言語を内在化していくのか、そのメカニズムを理解することで、効果的な教育とは何かを考える視点を培うことができました。具体的には、クラッシュェンのインプット仮説やスウェインのアウトプット仮説など、様々な論理的思考に触れました。これらの理論は一見正反対のように見えながらも、それぞれが言語学習の異なる側面に焦点を当てており、総合的に理解することで言語習得の輪郭を捉えることができることを学びました。

特に印象に残っていることは、教師は学習者のインプットを保証できる存在であるべきということです。教師が提供する言語インプットは、そのまま学習者の学びに直結します。だからこそ、教師はその責任の重さを自覚する必要があるということを知りました。質の高いインプットとは何か、どのように提示すればより効果的か、こうした問いに自身が向き合うことで、教育者としての使命感と責任感が芽生えました。

ゼミでの議論は、私にとって刺激的な学びの場でした。話し合いの中で、同じテーマでも様々な解釈やアプローチが存在することを知り、第二言語教育の奥深さを実感しました。同じ研究論文を読んでも、それぞれが異なる視点から解釈し、

議論を深めていく過程で、第二言語教育には唯一の答えが存在しないこと、そして学習者の背景や目的、学習環境に応じて最適なアプローチは変わることを実感しました。理論を学ぶだけでなく、それを批判的に検討し、実際に自分たちが受けてきた教育がどうであったか、これからの教育場面はどうあるべきかを仲間と共に考える時間は、私の思考を深める貴重な機会となりました。これらの学びが実現したのは、第二言語教育に真摯に向き合ったゼミの仲間たちの存在があったからだと確信しています。

一方、留学先では、英語教育の実践に携わる機会を得ました。私は八月に「2025年度夏季ダルハウジー大学海外語学研修プログラム」に参加しました。そこでは、第二言語を用いて教科の学習をする内容言語統合型学習 (CLIL) の教授法を学びました。CLIL とは、内容理解に重点を置き、学習者の四つの C (Content, Communication, Cognition, Culture) を育む教授法です。

実際に、私はこの考えに則り授業を一から設計する経験を得ました。授業を作るにあたって、対象となる生徒の母語や学習レベル、そして学習環境への配慮など、考慮すべき要素が数多くありました。理論として学んだことを実際の授業という形にしていく作業は、想像以上に難しいものでした。授業案を検討していく中で、理論と実践の間には大きなギャップがあることを痛感しました。しかし、その難しさこそが教育のやりがいなのだ気づかされました。

特に印象に残っているのは学習環境の整備です。第二言語学習では、学習者がいかにその言語に触れ、馴染むかが重要です。そのため、授業内外で生徒が学習言語を意識できるような教室作りが求められます。例えば、ポスターなどの掲示物を活用することで、日常的に既習内容が生徒の視界に入り、意識せずとも定着を促すことができます。

また、授業を進行する中で、生徒の意見を引き出す場面が発生します。しかし、必ずしも彼らが教師の求める反応を示してくれるとは限りません。その要因としては、思考が学習内容に追いついていない場合と、回答を躊躇している場合が考えられます。特に第二言語での発表には抵抗を感じる生徒も少なくありません。そこで有効な手立ての一つが、バズ学習のように小さなコミュニティから自分の意見を伝える場を設けることです。このような段階的なアプローチによって、生徒は徐々に発言への心理的なハードルを下げることができます。このように、第

Ⅱ. 1. エッセイ

二言語教育において学習環境を整備することの重要性を、実践を通じて深く理解することができました。教師は、試行錯誤を繰り返す中で、常に学習者と向き合い、その反応から学び続ける存在であるべきだと実感しました。

この二つの学びの場を通じて、私の中で目指すべき英語教師像が明確になってきました。大学で学んだ「教師はインプットを保証できる存在であるべき」という理念と、留学先で実感した「学習環境の整備の重要性」は、私の中で一つの軸として結びつきました。教師が提供するインプットは学習者の学びに直結します。しかし、そのインプットが真に効果を発揮するためには、学習者一人ひとりの状態を理解し、それぞれに適した形で提供する必要があることを実感しました。同じ教室にいても、生徒たちはそれぞれ異なる感情を抱えています。私は「生徒たち」という集団ではなく、一人ひとりの「生徒」として向き合いたいです。森全体を眺めるのではなく、一本一本の木に目を向けるように。

この1年間の学びが私の中で駆り立てたもの、それは生徒一人ひとりと向き合いたいという確かな思いでした。集団ではなく個人として、一人ひとりの声に耳を傾け、それぞれの成長を支えられる教師になりたい。この思いを大切にしながら、これからも第二言語教育の学びを深め、実践を重ねていきたいと考えています。

2. コロキウム

2025 年度外国語学部コロキウム

第 1 回

日 時：2025 年 5 月 28 日（水）15:00～16:30

会 場：草薙キャンパス A 棟 3 階 A306 教室

講 師：中島 義和（英米語学科・准教授）

演 題：英語科の教員養成と授業づくり

—これまでの教育・研究実践の報告—

要 旨：

英語教育の実践や教員養成、研究の往還をどのように結びつけていけるか。今回のコロキウムでは、その歩みを〈過去→現在→未来〉の流れで振り返りながら、授業づくりの理念と実践を報告した。

教育実践では「問い」を出発点に、学び手の実態とニーズに寄り添う設計、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還、教科等横断的なアプローチ、そしてオーセンティック（真正）な学びを重視してきたことを共有した。目的・場面・状況を明確化し、三つの柱として、①基礎・基本の徹底（教科書等の活用）、②習得－活用－探究のスパイラル、③思考と表現の育成を据えていることを示した。

その具体として、中学校・高校段階での「協働的課題解決」や「創作表現」の事例を紹介した。

たとえば、協働的課題解決の実践では、沖縄に関する読み物を題材として問題を見出し、解決策を発信するプロジェクトを展開した。ここでは、未知の世界との出会いを英語で媒介し、ALT の真正な活用や地図帳等の教科を越えた活用、対話・ファシリテーションによる学びの駆動、ライブ評価とポスト評価（映像記録）等を行った。発信は英語で、原稿に頼らず自分の言葉で、グループとして発言の均衡化をめざすなど、対象と目的を意識した設計とした。

創作表現の実践では、美術科と連携した英語紙芝居制作、音楽科と連携した演劇（ミュージカル要素）創作など、教科等横断のプロジェクトを展開した。紙芝居制作では、制作会社発足・ロゴ制作、物語の英訳を英語の授業で行った。また、

II. 2. コロキウム

紙芝居のイラスト制作は美術科の授業で行い、表現の宛先を意識し、真正性を高める教科等横断型の授業を実践した。演劇創作では、映画視聴で発想・表現のモデルを学び、台本制作・演技・音楽を統合。英語のセリフを覚え、表情や声色まで工夫する過程を経て、AAR (Anticipation-Action-Reflection) に沿う学びの循環を促した。こうした連携は、〈student agency〉の育成と接続し、学び手が目的意識と責任ある行動を発揮する土壌を形成するものである。

「個別最適な学び」では、生徒が自ら学習方法や教材を選び、進度を自己決定し、必要な場面で仲間・教師と協働する設計を提示した。授業の基本展開を AAR で整理し、「見通し (計画や課題の共有) → 行動 (個別・協働の可変的学習) → 振り返り (リフレクションシート)」という学びの循環を繰り返す。多様な教材群、学びの可視化 (Can-do チェックリスト)、学習方法の紹介、1on1 面談、ポートフォリオ的な「学びの足跡」など、支援のレイヤーを重ねて設計した。個人集中・ペア対話・教師マンツーマン等、同時並行で多様な学びの形態が併存し、教室内の相互作用が「孤立した学び」を防ぐ緩衝材として機能することを示した。

教員養成では、育成を目指す教師像として「問い、考え続ける」「学び続ける」「実践的省察家 (reflective practitioner)」を掲げ、Schön の reflection-in/on-action の概念に基づいて、授業観察・模擬授業・振り返りを一体化したサイクルを強調した。学生の主体的経験を増やし、問いを多く投げかけ、一斉講義を最小限に抑える設計、エピソードや疑似・模擬体験の提供を通じて、授業づくり・教材開発・評価の眼と腕、そして英語教員としてのビリーフ形成を促す。リフレクションと相互フィードバックは、視点の広がり・深まり、課題改善、自己肯定感の向上に資する営みとして位置づけた。

研究実践の軸としては、M. Agar (1994) の「Rich Point (リッチ・ポイント)」や「ラングアカルチャー (languaculture)」の枠組みを紹介し、異なる文化接触における違和や距離の顕在化が新たな文化生成につながるという観点を提示した。さらに、佐藤 (1995) による「三つの対話的实践」(対象・他者・自己) を参照し、学びを三位一体の対話として再文脈化する視点を共有した。大学科目の事例では、DP やカリキュラム・マネジメントの視点を組み込んだ計画-実践-評価-改善の循環を設計し、保育体験記録やセルフリフレクション、「自分語り」交流会等を通して成長の可視化を試みた。

まとめとして、【教育実践（授業づくり）】×【教員養成】×【研究】という三者の高次の循環を通じ、理論と実践を架橋し、地域連携・社会貢献にも開かれた学びを創出すること、そして学習者の〈student agency〉と共同エージェンシー（co-agency）を育む設計を今後も磨いていくことを確認した。最後に、Rich Point 体験や教員ビリーフを対話的に共有する振り返りを行い、コロキウムの学びを参加者間で接続した。本報告が、学部内の教育・研究実践の共有と次の往還への一助となれば幸いである。

第 2 回

日 時：2025 年 11 月 26 日（水）15:00～16:30

会 場：草薙キャンパス B 棟 B306 教室

講 師：谷 誠司（グローバルコミュニケーション学科・教授）

演 題：場と関係をつくるボードゲームの活用－初年次教育での実践から－
要 旨：

本コロキウムでは、大学教育におけるボードゲーム活用の意義と実践例を紹介し、参加者が実際にゲームを体験しながら学びを検討することを目的とした。まず、アイスブレイク型ゲームを通して参加者同士が自然に交流できる環境をつくり、ゲームがコミュニケーションの媒介物として機能することを体験してもらった。続いて、先行研究をもとに、ゲームの有効性と、ゲームが日常とは異なる学習空間を形成する仕組みについて確認した。実践例としては、人間力セミナーにおけるボードゲーム導入の授業デザインを紹介し、短時間のゲーム活動が学生の自然な対話や自己開示を促し、関係構築に有効であることを示した。最後に、参加教員同士でボードゲームやトランプゲームのルール作成活動を体験し、学びの振り返りを行った。

第 3 回：良知 恵美子教授最終講義

日 時：2026 年 2 月 4 日（水）10:45～12:15

会 場：草薙キャンパス A 棟 2 階 C208 教室

講 師：良知 恵美子（英米語学科・教授）

演 題：豊かな学びと人生を支えることばの修得と学習

II. 2. コロキウム

要 旨：

良知恵美子教授の最終講義は、「言語習得論」「英語多読指導」「外国語学習の必要性」という、これまで同教授が深く関心を寄せ、教育・研究の中心的課題として取り組まれてきたトピックについてのご講義であり、常葉学園短期大学ご着任から35年にわたる教育者・研究者としての歩みの集大成となるものであった。「言語修得論」については、母語習得に要する学習時間の問題を端緒に、言語修得のメカニズムを仮説的推論形成と記号接地という最新の理論に基づいて論じられたうえで、第二言語習得・外国語学習のあるべき方法と課題を提起された。「英語多読指導」は、英語学習のレベルを飛躍的に高めるアプローチとして同教授が本学における教育と地域の社会貢献としてもっとも熱心に取り組んでこられた活動であり、その理念、方法、成果が詳しく披露された。さらにこれらの議論を前提に、AIの世紀における「外国語学習の必要性」を理論的、かつ情熱を込めて論じられ、多くの聴衆に知的刺激を与えるとともに、急速に変化する時代に外国語学部が果たす役割と可能性の示唆として、深い共感を呼んだ。

質疑応答では、これらのトピックをさらに深掘りする活発な議論が展開され、同教授の貢献に対する感謝の意が表された。



2025 年度 英米語学科コロキウム

山田 昌史

英米語学科では、学科の研究推進の一環として学科コロキウムを実施している。2025 年度は 2024 年度から開始された新カリキュラム¹で「専門セミナー」が見直され、(1) 学科教員のほぼ全員がゼミを担当すること、(2) 4 年次の「専門セミナー II」が必修となり、全学生が卒業研究を作成することとなった。そのため、ゼミの教授内容や運営、卒業研究までの流れなどが課題であるため、「専門セミナー」を実のあるものにするため、教員間で情報共有し、予測される課題を議論した。コロキウムの概要は以下である。

日 時：2025 年 8 月 5 日（火）15:00~16:30

会 場：A305 教室

テーマ：専門セミナーのこれまでとこれから－卒業研究必修化にむけて

概 要：

コロキウム（英米語学科と GC 学科の教員 15 名が参加）では、2024 年度までにゼミを担当している学科教員（良知先生、小池先生、小口先生、新妻先生、山田）からゼミの現況と課題、問題点を話して頂いた。また、2026 年度ゼミの編成が 2025 年度に実施されることから、ゼミ生の選抜や基本的な運営方法などについて学科教務委員から説明があった。その後、参加者全体で問題点等を情報共有し、議論した。

学修成果の可視化が求められている現在の大学教育において、学科の学びの総決算となる卒業研究の作成を充実させることが肝要である。専門セミナーが今後の学科の学びの大きな柱のひとつとなるため、ゼミ運営や学生の研究実施について教員間で情報共有をはかり、英米語学科の卒業研究のあり方について今後も定期的に議論していく必要があると思われる。

¹ 英米語学科のカリキュラム改訂の方向性については本誌 38 号 (pp. 10-14) の一言哲也先生の論考、英米語学科のセミナー改訂については同号 (pp. 15-16) の戸田勉先生の論考が詳しい。

3. 外国語学部言語文化研究会講演会

2025 年度外国語学部言語文化研究会講演会 「現代に生きる小泉八雲、そして怪談」報告と随感

那須野 絢子

NHK 朝の連続テレビ小説「ばけばけ」が 2025 年 9 月末から放映となり、明治時代に来日し、日本を西洋へ紹介した作家・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、1850-1904）が注目を集めている。このような中、小泉八雲の曾孫で研究者でもある小泉凡先生を常葉大学にお招きして、令和 7 年度の外国語学部言語文化講演会を開催した。

小泉先生は、島根県立大学短期大学部の名誉教授であり、ドラマの舞台となっている島根県松江市にある小泉八雲記念館の館長他、晩年の避暑地として八雲とゆかりが深い焼津市にある焼津小泉八雲記念館の名誉館長を勤められている。また、19 世紀という世界が激動した時代において、西洋至上主義、人間至上主義には陥らない、愛ある眼差しで他者を捉えた八雲の「オープン・マインド」をテーマに掲げ、小泉八雲の現代的意義を広く訴える活動を精力的に行なってきた。今回の講演会では、小泉先生が、松江をはじめ、八雲ゆかりのギリシア、アイルランド、アメリカなど、世界各国で行なってきたプロジェクトの体験から見てきた、現代社会と呼応する小泉八雲の世界について語っていただいた。以下はこの講演会を聴いての随感である。

八雲は、イングランドにルーツを持ち、大英帝国のアップーミドル層に近い感覚をもつアイルランドの父の実家で幼少期を過ごした。このような環境にいた彼が、後に、社会的弱者、中心ではなく周縁に位置するマイノリティに常に心を寄せるようになる背景には、西洋で体験したカタストロフィ（惨事）が強く影響していると小泉先生は言う。その惨事たるや凄まじく、母との生き別れ、両親の離婚、左目の失明、そして、養育者であった親戚の破産という悲劇を経験し、半ばヨーロッパを追い出されるようにして、天涯孤独の身となって渡米を果たすのである。アメリカでは新聞記者の職に就けたものの、混血女性との結婚とその破綻をつうじて社会の理不尽に直面した。ギリシア人の母を捨てた父、慣れ親しんだケルトの妖精物語を否定されたイギリスでのカトリック教育、愛した女性との結

婚を許さなかったアメリカ社会など、19世紀の西洋文明は、不幸を生み出す大きな力として若き日の八雲の前に立ちはだかつてきたのではないだろうか。結果、彼の経験したカタストロフィは、急速な近代化のもとで消えかけている領域に共感の眼差しを向けるという、「オープン・マインド」な思考の醸成へと繋がっていったのであろう。

講演では、シンシナティ時代、八雲が混血女性と州法で認められない結婚式を挙げて新聞社を解雇されたこと、また、仏領西インド諸島マルティニークに滞在し、西洋化によって消えかけていたクレオール民俗文化を取材したキャリアなどが引き合いに出され、これらの八雲の軌跡が現代において、多様性を重んじる風潮や、「ブラック・ライブズ・マター」の観点から西洋圏で評価されるに至っていることが紹介された。このことは大変興味深く、八雲が見せた周縁的存在への共感の眼差しが、単なる異国趣味ではなく、近代西洋中心主義を相対化する思想として再評価されていることを示している。

来日後は、西洋化が急速に進む明治という時代において、八雲は、マルティニークでの取材と同様に、失われつつあった古い日本の伝統や風習を熱心に作品に書き留めた。それらはアメリカで出版された12種類の著作によって結実した。日本時代の八雲文学は、アメリカ時代のものと比較すると総じて高い評価を得ているが、この研究上の定説を説明するとするならば、やはり、日本で記した怪談作品が寄与しているといえる。八雲の怪談執筆はアメリカ時代にまで遡るが、心血を注いで怪談と向き合い、怪談を紡いだのは日本時代だったと思われる。日本で記された八雲の著作の一つに、*In Ghostly Japan* (1899、『霊の日本』) というものがあるが、この言葉が表すとおり、八雲は日本の土壌に、「霊的な存在が人間の世界に遍在する」「死者が生者と共にある」、そんな風土を感じ取ったのではないだろうか。人為と怪異が隣り合わせに存在して語られる日本の怪談は、八雲が魅せられた霊の日本が体現化された世界だったと思われる。そして、それらの怪談が、最愛の妻、小泉セツの声をつうじて八雲の鋭敏な聴覚に触れたとき、彼の文学者としての想像力は最大限に発揮され、物語は独自の再話怪談として転生を遂げたのだ。八雲の「オープン・マインド」は、近代的な合理主義が幅をきかせた時代において、非合理的なものと退けられる傾向にあった霊の世界（19世紀後半には霊の世界までも合理的に説明しようとする動きが起こったが）にまで光を

II. 3. 外国語学部言語文化研究会講演会

当てたのである。

なお、今回の講演会は、本学地域貢献センターの協力のもと、学内のみではなく、一般にも開いた公開講演会とした。当日は、教員、学生、一般来場者合わせ、約130人の来場者が熱心に小泉先生の講話に耳を傾け、盛況の内に終えることができた。多忙中、遠路静岡までお越し下さった小泉凡先生はじめ、関係者各位に改めて感謝の意を述べたい。



常葉大学外国語学部言語文化研究会講演会

現代に生きる小泉八雲とセツ、そして怪談

なぜ、いま小泉八雲とセツ、そして怪談に光があたるのか？

「オープン・マインド」「五感力」「SDGs」「戦後80年」「『怪談』翻訳の広がり」と新しい芸術現「アニモズム」「セツとくぼげげ」……。そんなキーワードから現代社会と対応する新しい小泉八雲の世界を探訪します。



写真 小泉八雲(徳津小泉八雲記念館提供) スケッチ 小泉八雲(徳津小泉八雲記念館提供)

講師 小泉凡氏

1961年東京生まれ。成城大学・同大学院で民俗学を専攻後、1987年に同院へ転任。妖怪、怪談を切り口とし、文化研究を推進。異文化・文化異語に生かす実践活動中。小泉八雲の「オープン・マインド」を社会に活かすプロジェクトを世界のあちこちの地で展開する。2022年度全国日本学士会アカデミア賞を受賞。徳津小泉八雲記念館名誉館長、島根県立大学短期大学部名誉教授・小泉八雲記念館館長。

著書に『民俗学者・小泉八雲』（朝文社）、『怪談四代記—八雲のいたずら』（講談社）、『小泉八雲と妖怪』（玉川大学出版）、『セツと八雲』（朝日新聞）ほか。

小泉八雲（ラファディオ・ハーン）曾孫、日本ベンクラブ会員。

日時 2025年11月28日(金) 16:45～18:15
会場 常葉大学草薙キャンパス A棟201号室
※入場無料、どなたでもご来場いただけます。
※直接会場へお越し下さい。(公共交通機関でのご来場をお願いします。)
お問い合わせ 常葉大学 那須野研究室 (054-297-6166) /ayuko.nasuno@sz.tokoha-u.ac.jp



4. 外国語学部研修会

2025 年度外国語学部研修会

第 1 回研修会

日 時：2025 年 6 月 18 日 (水) 15:10 ～ 16:30

会 場：静岡草薙キャンパス A306 教室

講 師：北川 和彦先生 (アマゾン ウェブサービス ジャパン合同会社マーケティング統括本部統括本部長、英米語学科一期生 1988 年卒業、GC 学科専攻科目「マーケティング」担当)

題 目：「グローバル企業から見た、今外国語学部に求められる教育とは」

概 要：

卒業生および現在グローバル企業で働くものとしての立場より外国語学部教育への思いを共有をさせていただくとともに、非常勤講師として本学部の学生に教えているという立場から実践的な提言をさせていただいた。さらに、現役グローバル企業でリーダーを務める立場より、現在企業で必要とする人材及びその育成の視点も踏まえ、語学力・異文化理解・論理的思考力などに関する課題と改善点を共有した。就職後の転職でキャリアを伸ばすのが当たり前になっている現状を踏まえ、当学部教員の皆様の学生の教育において自分ブランドの確立に力をいれる必要性も強調した。さらに、AI の導入浸透が進む中でどう働き方が変わってきているかも、その実例をもって説明をして、教員、学生、学部を問わず最新のテクノロジーに常に敏感になる重要性について、その考えを共有した。

第 2 回研修会

日 時：2025 年 11 月 19 日 (水) 15:10 ～ 16:30

会 場：静岡草薙キャンパス A306 教室

講 師：木村 拓也先生 (「バリリンガル」代表、グローバルコミュニケーション学科 2020 年卒業)

題 目：「教育は“挑戦を許す空気”から生まれる」

Ⅱ. 4. 外国語学部研修会

概 要：

卒業生である講師の立場から外国語学部教育へのフィードバックを提供するとともに、バリ島における語学学校経営代表の観点から、現代的・実践的な教育提言をおこなった。「バリリンガル」の設立・運営に至るまでの講師自身の体験、さらに、学校経営や語学教育デザイン・マネジメントの経験から、語学力・異文化理解などに関する課題と改善点を共有した。

5. 特別研究の題目

2025 年度グローバルコミュニケーション学科特別研究
共同翻訳文献およびサブ・レポート題目一覧

中国特別研究

担当 戸田 裕司

《共同翻訳文献》

原題：何池編著《漳州民俗文化趣谈》海峡文艺出版社，2022 年

《サブ・レポート題目一覧》

22122010 大澤 奈歩「訪日中国人観光客の行動心理を読み解く」

22122040 田村 瑠香「中国社会における女性観の転換—唐宋から明清までの変化をたどる」

日本語教育特別研究

担当 谷 誠司

22122014 落合 優音「e スポーツ実況解説の会話分析」

22122026 佐藤 巴南「キャラクターの言葉遣いにおける人物像の分析」

韓国特別研究

担当 崔 慶原

《共同翻訳文献》

原題：전우용, 최지은『K 민주주의 - 내란의 끝』책이라는 신화, 2025

《サブ・レポート題目一覧》

22122008 大石 愛海「韓国若者の支持政党の分岐—男女の差に着目して」

22122033 杉山 実乃梨「北朝鮮問題をめぐる日韓の安全保障関係—第二次北朝鮮核危機における対北政策の相違を中心に—

22122036 鈴木 もえ「日韓 GSOMIA 締結の成否を分けた要因—2012 年の失敗と 2016 年の成功の比較分析—」

II. 5. 特別研究の題目

- 22122044 戸崎 さくら「K-POP ダンスにおける身体表現はカミングアウトの手段となりうるか—性的マイノリティの自己表現とその受容に着目して—」
- 22122054 稗田 ありさ「日韓の政府間合意が社会に受け入れられない要因—「正義連」の活動を中心に—」
- 22122056 星野 伽蓮 「日韓の外国人労働者支援の比較—地方自治体の対応を中心に—」

ブラジル / ポルトガル特別研究

担当 江口 佳子

《共同翻訳文献》

原題：Gilberto Dimenstein, *Quebra-cabeça Brasil, Ática, São Paulo, 2019*

《サブ・レポート題目一覧》

- 22122006 岩本 直也 「映画『ファミリア』に描かれた日系ブラジル人の若者が抱える問題」
- 22122012 萩 圭一郎 「主体性とは何か—ヨーロッパ思想から学ぶ考え方」
- 22122023 佐口 健心 「ブラジル日系社会における野球—スポーツ社会学の観点から」
- 22122032 杉山 春樹 「災害と在日ブラジル人」
- 22122060 村松 万未子 「修道院とポルトガル菓子の歴史」

スペイン・ラテンアメリカ特別研究

担当 増井 実子

《共同翻訳文献》

「スペイン社会の諸相を読み解く」をテーマに、スペイン日刊紙エル・pais (*El País*) インターネット版の記事を翻訳し、解説を試みる。

《サブ・レポート題目一覧》

- 22122009 大木 萌々華「なぜフラメンコは世界中の人々を魅了するのか—人の移動や現代音楽から紐解く—」
- 22122017 木村 菜々美「スペイン警察の分権化とカタルーニャ自治州警察と国家警察との関係—2017年カタルーニャ独立住民投票から読み解く—」
- 22122018 久保山 愛菜「サンティアゴ巡礼における宗教的聖遺物と歴史を明確にする科学の対立」
- 22122030 清水 梨里「スペイン、グイマールのピラミッド論争から見る考古学の難しさ」
- 22122049 中村 真実「スペイン王室—統合の象徴か、多様なアイデンティティの対立点か—」
- 22122061 望月 来瞳「スペインの観光被害とその後の対策—今日本が学ぶべき観光客への向き合い方—」

GC学科 特別研究 成果報告会 2025

日時

2026年2月3日 (火)
午後**1時15分**～

場所

C408：スペイン**6名**+
中国**2名**+日本語**2名**
C409：韓国**6名**
+ブラジル・ポルトガル**5名**

4年生の特別研究履修者が執筆したサブレポートの概要を報告します。全学年聴講できません。

プログラム

発表時間：**1名につき20分**（報告**15分**+質疑応答と移動の時間**5分**）

報告者名とタイトルについては後日お伝えします。

主催

外国語学部グローバルコミュニケーション学科

6. 日本語教員養成課程の活動報告

常葉大学外国語学部 日本語教員養成課程が文部科学省により『登録実践研修機関及び登録日本語教員養成機関』として登録

坂本 勝信・谷 誠司

本学の外国語学部 日本語教員養成課程は、令和7年5月30日に『登録実践研修機関及び登録日本語教員養成機関』として文部科学省に登録されました。静岡県内の大学・短大では初の登録となります。

令和5年5月26日に国会で国家資格『登録日本語教員』に関する項目が盛り込まれた法案『日本語教育機関認定法』が成立し、令和6年4月から日本語教師は国家資格『登録日本語教員』となりました。同資格は、認定日本語教育機関に勤務するのに必須となります。『登録日本語教員養成機関』は、登録日本語教員が身につけておくべき基礎的な知識や理論を学ぶための機関であり、『登録実践研修機関』は、身につけた知識や理論を活用して日本語を教える実践力を養うために教壇実習を中心に行う機関です。なお、今回文科省に登録されたことによって、本課程を修了すると、『登録日本語教員』の資格取得に必要な日本語教員試験において、基礎試験及び実践研修が免除となります。

令和7年6月から国に認められた機関としての教育がスタートしています。3年次後期からの実践研修では、静岡県内の複数の外部機関において教壇実習を行います。実習先は日本語学校（留学生対象）、外国人学校（年少者対象）、地域日本語教室（生活者対象）と教育対象が広がっています。そこで、1・2年次に複数の科目で「目標・対象別の教育」について、また、3年次前期の「日本語教授法」の模擬授業において多様な教壇実習先を意識した授業実践へと繋げ、段階的に学びを深化させることができるようになっていきます。

在留外国人が年々増加する中、今後より一層『日本人住民と外国人住民がともに社会を創っていく』といった意識が大切になります。全国で8番目に在留外国人が多い静岡県にあって高い多文化共生意識を持ち、日本語教育の知識と技術を有した人材を輩出すべく教育に取り組んでいきたいと考えております。

7. 学内外での教職員や学生の取り組み

空の仕事の舞台裏へ — 『航空ビジネス』における授業実習『JAL 研修』の実施—

新妻 明子

外国語学部の共通科目『航空ビジネス』では、机上の学習にとどまらない実践的な学びを提供している。その一環として、2025年8月25日(月)に24名の学生が日本航空(JAL)羽田オペレーションセンター、スカイミュージアム、そして機体整備工場での研修に参加した。

研修では、表1の日程表に従って、パイロットや客室乗務員が出発前に行う準備業務や、運行管理を担うディスペッチャーの仕事など、航空機が安全に運航するまでの舞台裏を間近で見学した。

表1 JAL 研修日程表

10:15	羽田空港第1ターミナルに集合
10:45	JAL 羽田オペレーションセンター2階受付ロビー到着
11:00～11:10 (10分)	事前説明
11:10～12:10 (60分)	見学(4グループに分かれて実施)
12:30～14:00	各自昼食/自由時間(羽田空港第1ターミナル)
14:00～14:45	MIビルへ移動(東京モノレール) 羽田空港第1ターミナル14:10/14:20→新整備場 14:18/14:28→MIビル14:35)
14:45～16:35 (110分)	JAL スカイミュージアム&工場見学
16:35～18:00 (85分)	講義:「航空業界のホスピタリティ」 講師: JAL 航空みらいラボ産学共創部 井上あさ子様 内容: JAL のホスピタリティ/テクノロジーとホスピタリティ/サービスの構成要素とホスピタリティ/ホスピタリティの実践(身だしなみ、表情・視線、挨拶、立居振舞い、コミュニケーション)

特に、現役で活躍されている客室乗務員の方による講義は、学生たちの航空業界への関心をさらに高める貴重な機会となった。参加した学生からは「胸がいっぱいで言葉が出てこない」「非常に有意義な研修だった」との声が多数聞かれ、学びと感動に満ちた一日となった。

以下は、研修後のアンケート調査の結果の抜粋である。研修全体の満足度については、「とても満足した」と回答した学生が全体の 88%、残り 12%も「満足した」との回答であり、講座に対する受講者の総合的な満足度は非常に高い水準であった。

【コメント抜粋】

1. 体験・見学による業界理解

- ・「今まで見たことの無い裏側の仕事を見ることができて新鮮だった」
- ・「実際に現場を見れたことで忙しさや詳しい内容も分かった」
- ・「客室乗務員の仕事や、便を送るまでの業務を直接見ることができて非常に勉強になった」
- ・「一つの飛行機を飛ばすのに多くの人が関わっていて、見えないところで多くの人が支えていることで、航空業界が成り立っていることを知ることができた」

2. ホスピタリティの学びと共感

- ・「JAL のフィロソフィを初めて知り、より良いサービス提供の姿勢に感銘を受けた」
- ・「ホスピタリティについて丁寧で分かりやすく教えていただいた」
- ・「命を預ける仕事だという責任をもって仕事をしていてカッコいい」
- ・「JAL の社員が同じ価値観を共有していることに驚いた」

3. キャリア・就職活動への有用性

- ・「就職活動に役立つような情報まで学ぶことが出来た」
- ・「自己管理の重要性を改めて認識することができた」
- ・「ホスピタリティなど知らなかったことを知れるきっかけになった」

また、座学での授業を経て現地での実習を体験することによる航空業界への印

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

象度の変化も見られた。

【コメント抜粋】

1. 現場体験による理解と感動

- ・「実際に働いている人を見てとても楽しそうに仕事をしていた」
- ・「多くの人が関わって一つの飛行機が飛んでいることに気付いた」
- ・「見学中に整備士や地上スタッフの方々が連携して作業する様子を間近で見て、チームワークの重要性と現場の活気を強く感じた」

2. ホスピタリティ・プロ意識の実感

- ・「いままでの良いイメージを超えるほどのホスピタリティを感じた」
- ・「プロ意識が高く JAL という会社に誇りを持って働かれていることが分かった」
- ・「お客様への声掛けや所作の一つひとつに心配りがあり、プロとしての意識の高さと温かさを同時に感じた」

3. 企業文化・価値観への共感

- ・「命を預ける仕事に責任をもっていてカッコいい」
- ・「安全を徹底する姿勢に深い感銘を受けた」
- ・「安全を最優先にしながらも、社員全員が同じ価値観を共有して働いている姿に、企業としての一体感と信頼感を覚えた」

本研修を通じて、学生たちは航空業界を「憧れの職業」として捉えるだけでなく、安全運航を支える多様な専門職の連携や、現場で実践されるホスピタリティの本質を具体的に理解することができた。教室での学びが実社会と結びつき、将来の進路や自身の学修への動機付けが一層深まった点に、本実習の大きな教育的意義があると言える。今後も本科目では、こうした実践的な学びの機会を積極的に取り入れ、学生が社会と主体的につながりながら学びを深化させていく教育を継続していきたい。

2025 年度 中島ゼミ 活動報告

英米語学科 3 年 金 桃圭

ゼミ担当 中島 義和

2025 年度より、常葉大学外国語学部英米語学科で中島ゼミが始まった。中島ゼミでは、主に第二言語習得について学び、深めていく活動が行われた。ここでは、2025 年度に行われた、前後期全 30 回のゼミ活動について報告する。

前期は、『英語教師のための第二言語習得論入門』（2023、白井）を読み進めながら、3つのプロジェクト課題を行った。最初は、教科書の内容を理解し、わかりやすくレジュメにまとめるというプロジェクトを行った。内容としては、第二言語習得における母語の影響や、動機づけ、バイリンガル、外国語学習適性が扱われた。4つのグループに分かれて活動は行われ、すべてのグループが同じ範囲でレジュメを作成した。ゼミ生の多くは、今までの学生生活でレジュメを作成したことがなく、どのようにまとめるべきか、どのように作成するとわかりやすいのかわからず、苦戦する者も多かった。発表では、各グループで議論課題を用意し、発表後に議論も行われた。このゼミの特徴の一つとして、教職課程を履修している学生と、履修していない学生が共に学んでいるため、様々な視点からの意見が出てくるとい点が挙げられる。そのような利点も発見することができた最初のプロジェクトであった。

2つ目のプロジェクトは、ポスターセッションをであった。ポスターセッションとは、各グループ1枚のポスターを作成し、そのポスターの前で、少人数のオーディエンスを前に発表するものである。レジュメ作成時とは違い、それぞれのグループが異なる範囲の内容を取り扱って発表を行なった。

図1に示したように、1人1枚程度の資料を作成し、グループで1つのポスターとして完成させた。別々の人が作成したものを、短い時間の中で工夫して伝えることはとても難しかった。視覚的に情報があると理解しやすいこと、1枚あたりの情報量が多すぎるとわかりにくいことなど、難しく感じるが多かったが、発表後、全員がそれぞれに良かった点、改善点などを伝え合うことで、自分の語りがどのように伝わっているのかを知ることができた。

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

3つ目のプロジェクトでは、日本における英語教育の問題点を様々な視点から見出し、問題に対しての課題や解決策を考え、プレゼンテーションを行った。まず初めに、どのような問題があるかをグループでブレインストーミングを行った。その後、どのような視点でプレゼンテーションを作成するかを話し合った。グループによって視点は様々で、教員養成、大学受験、高校受験、授業などが挙げられた。また、このゼミの特徴として挙げたように、教職課程を履修している学生と、していない学生で同じ視点でも全く異なる意見や考えをもっており、話し合いはより活発になった。3つ目のプロジェクトになると、ゼミ生同士の仲が深まり、より深く、興味深い議論ができるようになったと感じた。最初の2つのプロジェクトでは、教科書の内容を基に、資料を作成し、発表していたが、3つめプロジェクトでは、教科書を読み、それを参考にして自分たちの意見を基に、資料を作り、プレゼンテーションを行うという形が取られていた。自分たちで資料を作成する経験はしてきたものの、深く考え、その考えを発展させ、自分の言葉で発表するという経験は、あまりなかったため、自分の考えを言葉にする難しさを知った。

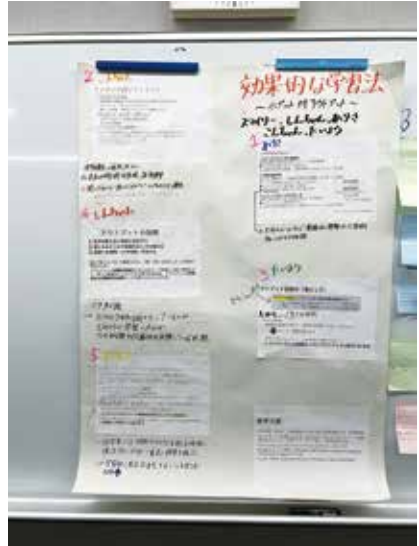


図1 ポスターセッション

前期最後となる4つめのプロジェクトは、前期の学びをパンフレットという形で表現するというものであった。これは、来年度のゼミ選択をする2年生に向けて作るという目的の下に行われたものであった。このゼミがどのような雰囲気で、どのような内容を学んでいるのかをわかりやすく紹介するため、各グループで全く違ったパンフレットが完成した。自分たちが学んできた道を振り返り、そして、その学びをより深く色濃くする学習になったと感じた。

前期では、以上の4つの大きなプロジェクトを通して、第二言語習得のプロセスや、日本における英語教育の現状、問題、どのように変えていくべきかを学ん

だ。そして、これらの学びから、後期に行うミニ研究でどのような視点から研究をしたいのかを考えた。前期の初めは、このゼミがどのように進められていくのか、どのような学びが得られるのか全く想像ができなかったが、前期の終わりには、ゼミ生が皆、自分の深めたい分野を持つことができ、とても充実した活動になったと思う。

後期は、一冊の本を順番に読み進めていく輪読の活動と、ユニットごとに自分たちのミニ研究を進めていくという活動を行った。輪読では、『言語はどのように学ばれるか』(Lightbown & Spada/白井ら訳, 2014)の担当割り振りに従って、それぞれがレジメを作成し、発表を行った。その後、担当者が考えた議論テーマを基に、議論が行われた。この本には、世界中で行われた実験をもとに、第二言語がどのように学ばれているかが著されており、その上でどのように教えられるべきかについても深く知ることができた。各回2人ずつの発表が行われ、議論も行われたが、回を重ねるごとに、議論の内容が深くなっていくのを感じた。英語の教育方法について、自分たちが受けてきた英語教育について、言語教育において重要なことなどが話し合われた。

後期の大きな活動のもう一つに、ミニ研究がある。これは、自分がより詳しく知りたい、もっと調べたいトピックに関して、先行研究レビューやミニ調査、ミニ研究論文を執筆するというものである。研究内容は様々で、自分の興味・関心と英語教育・英語学習を掛け合わせたり組み合わせたりしたものや、多読、ライティング、個別最適な学びなどがあった。学生は論文を書いた経験がなかったため、先生が毎回の授業で、どのように書き進めていくかを丁寧に説明してくださった。それに合わせて、研究動機を書いたり、どのように研究をするかを考えたり、それぞれ個人での活動が進められた。研究は個人で行うものだが、本ゼミの特色の一つであるユニットというミニグループで毎週の進捗状況や文章の校閲など、一人では不安な部分を支え合いながら進めていった。そして、このミニ研究が、私たちゼミ生の卒業論文に対する考え方を大きく変えることになった。このミニ研究の成果については、2026年1月中旬のゼミにてそれぞれが研究発表を行う。

私たちの学年は、卒業論文を執筆しなくても卒業可能である。前期に先生が尋ねた時には、卒業論文を執筆する予定の学生は5人にも満たなかった。しかし、回を重ねるごとに、少しずつ学生の向き合い方が変わり、11月に入った頃には、

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

ほとんどの学生が選択しようか迷っているというほどに意識が変わっていた。それは、先生が卒業論文に関してとても丁寧に説明し、自分たちにもできると思えるような話をしてくださったこと、そして前期から後期にかけての活動で、自分たち自身、学びが深まり、より学びたいという気持ちが大きくなったからだと考えている。実際、2025年12月最後の授業で1年の振り返りをした際、多くの学生が卒業論文を通して、より成長したい、学びを深めたい、この仲間たちと頑張りたいと話していた。ゼミの活動を通して、それぞれの学習意欲が大きく変わったことが分かる。

中島ゼミは今年から始まった。このゼミでは、英語教育や第二言語習得について学ぶことができるが、最初は教育に興味がなくとも、回を重ねるごとに興味を持つことができたり、自分の英語教育について振り返ったりすることができるゼミである。これらの内容以外にも、発表や議論、グループでの活動を通して、自分の人間性も大きく成長させることができる。この先、ゼミ選択をする学生で、英語教育について少しでも興味がある、人間が言語をどのように習得していくかを知ってみたい、日本の教育について考えてみたい学生はぜひ、中島ゼミで学びを深めてほしい。

〈ゼミ担当教員の中島より〉

金桃圭さんは、本ゼミの初代ゼミ長として、全体に目と心と気を配り、ゼミ運営に尽力してくれています。いまここに桃圭さんが紡いでくれた「ことのは」が本ゼミの活動を歩みを、解像度高く再現してくれています。英語教育・英語学習、その基盤となる第二言語習得の考え方に、多くの学生が興味を持ち、後に続いてくれることを願います。

「みらいろどり」の活動を通して得てきたもの

英米語学科 3 年 森永 太陽
担当教員 中島 義和

今年度 (2025 年度) 10 月から「みらいろどり」の活動が開始した。「みらいろどり」とは、中島先生を中心に英語教育をテーマとして、教師を目指す大学生や現役英語教員が集い、意見交換や学びの共有を行う活動の場である。英米語学科の教職履修者の中から有志が参加し、現在 5 名のメンバーが毎週金曜日の 1 限に研究室で活動を行っている。

私は将来、英語教師になることを目指しており、3 年生から本格的に始まった英語科教育の授業を通して、英語教育そのものに強く惹かれ「もっと深く学びたい」という思いを抱くようになった。そうした中で、中島先生が「みらいろどり」の活動を立ち上げられたことを知り、参加を決めた。

「みらいろどり」では、活動に参加するメンバーがそれぞれに意見や考えを持ち、それを共有しあう対話を中心として活動が進められている。テーマは英語教育を軸とし、英語学習、英語教師に求められる資質・能力、言語活動について、模擬授業の振り返り、さらには、研究授業の参観を通じた学びの共有など、多岐にわたる。また、活動の中では話題が脱線し、余談が多くなることもある。しかし、このような時間がこの「みらいろどり」ならではの特徴であると感じている。何気ない対話の中から新たな視点や気づき生まれ、それが次の学びへとつながっていく点は、非常に大きな魅力である。

本稿では、私が印象に残った「みらいろどり」での活動とそこで得た学びについて紹介する。

まず印象に残る活動は、第 1 回目に行った簡単なビブリオバトルである。夏休み中に読んだ英語教育に関する書籍を紹介し、それぞれが自身の考えを共有した。扱われたテーマは、タスクベースの英語指導、英語指導における英文法指導などであった。それぞれ、英語教育を考えるうえで重要な要素であり、メンバーそれぞれの関心のある分野が反映されていることが感じられた。

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

中でも印象に残ったテーマが、タスクベースの英語指導である。「タスク」とは、学習者にとって明確な目的があり、教師の意図や思いが仕組みられた活動ともいえることを学んだ。そして、活動を設定する際には、常に、動機づけ、意味づけ、価値づけの「3つのづけ」を意識して行う必要があることを理解した。さらに、「ひとひねり」を加えることで、生徒の学びはより深いものとなることを学んだ。例えば、中島先生が紹介してくださった中学1年生（進行形や can を学習した後）を対象とした「テレビ番組を作ろう」というタスクがある。天気予報、ドラマ、ニュース、通販番組などをグループごとに選び、演じる活動である。教師は例文のみを提示し、意図的に最低限の指導にとどめることで、生徒の自主性と独自性を尊重し、それが実際のコミュニケーションとしての英語につながるよう工夫されていた。一方で、このような活動を毎回の授業で行うことは難しく、年間指導計画の中で調整しながら実施する必要がある。そのため、日々の授業計画や教師間の連携の重要性についても話題に上がった。

このように、タスク活動というテーマでの話し合いを通して、タスクが生徒に大きな学びと成長の機会を与えるものであることを実感した。そして、私たちは、自分たちが創る英語の授業に意義を持ち、達成するために具体的な活動を構築していく必要がある。また、余談では、活動を行う上で教師が様々な引き出しを持つことも重要である点についても触れられた。英語の映画や音楽、絵本などの作品を授業で扱う際に、年代やジャンル、最近のトレンド等を意識すると同時に、名作とされる作品にも触れ、その魅力を理解しておくことが大切であるということ学んだ。大学生のうちに多様な作品に触れ、それらを学年や活動内容に応じて教材として整理していくことは、教師になった際の大きな強みになると感じた。

次に印象に残る活動として、静岡大学の附属中学校で行われた研究授業に参加した学生から、そこでの学びについて共有し、それを基に話し合う機会が挙げられる。実際に行われている英語の授業に参加させてもらう貴重な経験であり、今まで学んできた内容としての知識が、より具体的な授業と結びつくことで理解が深まった。

研究授業では、附属学校という特性もあり、教科書の内容にとどまらず、教師が明確な意図をもって構成した授業を見ることができた点が特に印象的であっ

た。中でも、レオ・レオニの作品を題材とした授業では、教科等横断的な学びが展開され、生徒が様々な視点から思考を深めながら、授業に取り組んでいる様子が見られた。

そこから、「みらいろどり」では、「視点」や「観」というキーワードが中心となって話し合いが行われた。英語教師として、そして一人の教師として、どのような視点で授業を創るのか、また生徒にどのような学びを届けたいのか、そのためにどのような準備や工夫が必要になるのかを考える時間となった。授業とは、生徒、教材、教師の関わり方など、様々な要素が複雑に組み合わさって成り立つものであり、教師の努力次第で、生徒の成長や学び、そして「視点」や「観」までも大きく影響する。教師が何を大切に、どのような思いをもって授業に向き合うかが、学びの質を大きく変えることについて、この時間の話し合いの中で考えるきっかけとなった。

このように、「みらいろどり」は、英語教育に関する知識や理念を学ぶ場であるだけでなく、対話を通して考えを深め合うことや、新しい学びに出会うことができる場である。活動を重ねる中で、私自身の英語教育に対する考えや見方が大きく変わり、自身の目指す教師像や指導観が大きく変わったことを実感している。一方で、実際の教育現場を十分に知らないことへの不安を感じることもある。教師としてどのように生徒と向き合い、どのような授業を創っていくべきかについて、独りで悩む機会も少なくない。しかし、そのような悩みも常に仲間と共有し、考え、深め学び続けることで、自分なりの信念を持てるようになりたいと考えている。「みらいろどり」は、そんな私にとっての大切な学びの場である。今後も活動を通して得た気づきや学びを大切にしながら、将来の教師になった際に生かしていきたい。

〈「みらいろどり」担当 中島より〉

森永太陽さんが「みらいろどり」とはどのような学びの空間なのかを丁寧にまとめてくださいました。第1期の5名のメンバーはそれぞれに熱い思いを持ち、教員をめざして学びを深めていってくれています。この小さな活動が静岡県の実来英語教育に彩りを与えられるよう、充実した活動を展開していきたいと考え

ています。興味・関心がある方はぜひ一緒に学びませんか。

中島ゼミを通してのゼミ生の変化

英米語学科3年 林 遥樹

大学三年生になり、専門セミナーの授業でゼミ活動がスタートした。私は今年度から赴任された中島義和先生のゼミに入ることを決めた。中島先生のゼミを選んだ理由は、将来英語の教師になることを志望しており英語教育に関わる研究をしたいと考えているからだ。中島先生の専門セミナーの授業では教職を志望している人、全く教職に興味がない人など様々な人と共に学ぶことができた。そのなかで私は、中島ゼミでの一年間を通して、ゼミ生の変化を感じることができた。ここでは、彼らの変化について書きたいと思う。

まず、教職を志望している人の変化について書きたいと思う。一番の変化は自分なりの英語教師像を考えることができたことだと思う。中島ゼミでは一学期に第二言語習得に関する文献である『英語教師のための第二言語習得論入門』を読み、その内容についてレジュメを制作したり、ポスターを使って発表したりして様々な方法で表現してきた。第二言語習得論を学んだことで、自分たちがやってきた英語学習のよかった点、改善点を明確にすることができた。特に自分たちの言語適性を考える機会は自分たちの英語の中での得意な部分を理解することができ、人によって適性が異なるため、多様な人に適する授業を創る必要があるということを理解できた。中島ゼミでの授業によって、教師になることがゴールではなく、教師になった後に何をしたいかを考えることができたことで将来に繋がる貴重な学びを得ることができた。

次に教職に興味がないが、中島ゼミに所属している人の変化についてである。ゼミが始まった当初、私の目から見て彼らは劣等感を抱いているようであった。私たちが所属している外国語学部英米語学科は全員が教職をとるのではなく、志望した人が単位などの一定の基準を超えてとるものになっている。そのため、教職を取っていない人にとって教職を取っている人はやる気のある人という見方をされているのではないかと思う。中島ゼミは英語教育が中心のゼミであるため、

教職を取っている人が多く入ってきた。よって、教職をとっていないが、中島ゼミに入ってきた人たちは自分よりもやる気がたくさんいるなど最初は思っていたと感じる。彼らと最初話していた時には「自分は教職取ってないで…」と言われたことがたくさんあったため、何かしらの劣等感を抱いていたのではないだろうか。しかし、中島ゼミでの一年間を通して、そのような劣等感が無くなり、自信を持ち始めていることを強く感じた。その変化の要因についてまとめたいと思う。

要因の一つ目は英語に対するモチベーションが上がっていることだ。前期の活動では、第二言語習得論を学んでチームで学んだことや考えたことを様々な方法で表現することで、自分自身の英語学習を振り返ることができた。それによって、自分が英語の中で秀でているものや授業で教わってこなかったことを明確にすることができ、英語学習において、自分をもっと知りたいと思うことを見つけることができたのではないかと思う。また、チームの中で自分が思ったこと、感じたことを伝える機会がたくさんあったため、物事を深く考えることができるようになったと考える。私は彼らの意見をきいて、そんな考えがあったかと思うことが何度もあり、彼らにしかない視点のおかげで話し合いがよりよいものになったと思う。よって、英語についてたくさん考える、表現する機会を通して彼らが「自分って意外に英語好きなのかもしれない」と思うことに繋がったのではないだろうか。

要因の二つ目は、一人で考えて作り出す活動があった点であると思う。後期の活動では、『言語はどのように学ばれるか—外国語学習・教育に生かす第二言語習得論—』という著書をゼミ生一人一人が各ページの担当を決め、担当の部分をゼミの中で発表するという輪読の活動があった。前期の活動と違い、チームではなく個人で行わなければならなかったため自分自身で担当の部分についてしっかりと理解し、他のゼミ生に分かりやすく伝える方法を考えなければいけなかった。しかし、教職をとっていない人の輪読の発表はとても分かりやすく、考えられたものであった。決められた時間内で担当の部分のなかの重要点をしっかりと伝えられていた。この活動によって、多人数の前で発表をすることへの自信がついたのではないかと思う。後期では先輩の卒業研究の発表を聞く機会があったが、その発表の後に彼らが「あのような発表なら自分でもできるかもしれない」と私に言ってきたのである。これは人前で発表することに自信がついていることへの表

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

れなのではないかと思いとでも嬉しく感じた。また、後期ではミニ研究といわれる論文を簡略化したものを行った。一人一人が研究テーマを決めて、文献を読み、インタビューなどの調査を行い、考察を書くものであり大掛かりな活動であった。全員が順調に進めることができるように3人5ユニットのユニットを組んで、それぞれの進捗を報告し合うようになっていた。この活動によって、ゼミ生は自分の学びたいと思っていたことをより深めることができ、四年次に行う卒業論文へ繋げることができた。教職を取っていない人たちは四月当初は研究をすることなど考えていなく、卒業論文を書こうとも思っていなかったが、ミニ研究の活動によって卒業論文を行うことを決めたのである。私はユニット活動での彼らの考えを聞いていると本当に熱心に自分の研究に取り組んでいることを感じた。こんなに深く熱心に考えることができるようになっていくことにとても驚き、私も負けていけないと思った。

以上がゼミ活動を通してのゼミ生の変化である。英語教育が中心のゼミであるが、教職をとっている、とっていない関係なく、全員が熱意を持って活動してきた結果であると言える。特に教職を取っていない人たちが自信を持つようになり、彼らにしかない視点を持って研究に取り組むようになっていくことに本当に驚いた。また、自分が教師になったときも生徒が物事に熱意を持って行うことができるように考えていきたい。

合同ゼミナール

グローバルコミュニケーション学科3年 植田 晴名

2025年6月28日(土)と29日(日)の2日間にわたり、立命館大学衣笠セミナーハウス(京都府京都市北区衣笠氷室)にて、2025年度3大学合同ゼミナールを実施した。本学からは外国語学部グローバルコミュニケーション学科の学生1名の参加があった。

表1 参加大学・教員・学生について

大学	引率教員	学生
南山大学 外国語学部	宮原 佳昭	3年生 13名

常葉大学 外国語学部	若松 大祐	3 年生 1 名
立命館大学 文学部	宮内 肇	3 年生 10 名

一、主旨とスケジュール

このゼミナールの主旨は、東アジアについて関心のある学生が集まり、意見を交流できる場となっており、自分の興味関心について、新たな視点を得ることを目的とする。そのために、参加者が持つ問いを追及するため、グループワークに取り組んだ。事前学習として、今年度は、中澤穰『中国共産党 vs フェミニズム』（ちくま新書、2024 年）に即して発表を行った。

表 2 [一日目] 6 月 28 日 (土) の日程

11:30	立命館大学正門東側ファミリーマート前集合、衣笠セミナーハウスへ移動
12:00	セミナーハウス集合、昼食
13:00	合同ゼミ開始・自己紹介・アイスブレイク
13:30 - 15:00	グループワーク I : 課題図書をどのように読んだのか
15:00 - 15:30	休憩
15:30 - 16:00	グループワーク II の趣旨説明
16:00 - 18:00	グループワーク II : グループで「研究計画書」の作成
18:30 - 20:00	夕食および談話室 (宿泊部屋) へのチェックイン
20:00 - 25:00	グループワーク II の継続

表 3 [二日目] 6 月 29 日 (日) の日程

09:00 - 10:30	朝食、チェックアウト、発表準備
11:00 - 14:00	グループ発表の表彰・まとめ・ふりかえり
14:30 - 17:00	グループで散策
17:00 - 19:00	懇親会 (JR 京都駅付近)

二、獲得したスキル

今回の合同ゼミは、南山大学、立命館大学、本学の 3 大学の学生が参加した。

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

私は、常葉大学の学生として、一人で今回の合同ゼミに参加した。課題図書を1か月以上かけて読み込み、自身のレジュメを作成するという経験は初めてだった。今までは、本の内容を単に理解するだけで満足していた。しかし、本の内容に疑問を持ちながら解読することによって、知識の獲得になるのだと実感した。合同ゼミに参加する前はとても緊張していたが、率先して他大学の学生に声をかけたり、グループの司会を務めたりなどして、参加した学生たちと交流を深めることができた。グループワークⅠにて、どのように課題図書を読んだのか発表をする際、全員の興味関心のある分野がかけ離れているという問題があった。グループワークⅡで、四苦八苦しながら全員が調べたいと思う問いを作り出せたときは、達成感があった。この経験は、社会人生活でも役に立つスキルだろう。

発表準備をしていく中で、私たちのグループは何度も「研究の意義」というものに悩ませられた。私たちは「台湾と中国を行き来する人々のアイデンティティはどうなっているのか ～メイデイから見る～」という問いを立てた。しかし、私たちは最後まで納得のいく意義を考えることはできず、とても悔しかった。振り返ってみると、私たちに足りなかったものが分かった。それは、アイデンティティの定義を定めていなかったことと、兩岸関係について知識が足りなかったことだ。これらの要素がなかったことで、研究の軸が途中でぶれてしまったように感じる。もう少し丁寧に問いの根拠を考えられたと、反省している。ただ、このように自身の発表を振り返られたのは、合同ゼミという貴重な経験をしたことによる成果だ。グループメンバーと熱い議論をしたり、自分たちの発表に何が足りなかったのか振り返りができたりしたことは、研究の手順を知る大切な機会だった。そして、必死に努力して一つのものを作り上げたという経験は、グループメンバーの強い団結力を生んだ。

懇親会では、これまで以上にきずなが深まり、話し合いの時間ではできなかったプライベートな会話を交わすことができた。そのおかげで、仲が一層親密になったと感じる。各大学の共通点や違い、先生方の興味深いエピソードなどで大いに盛り上がった。他大学の学生ともこのような関係を築けたことは、大変楽しく貴重な経験であった。

今回のゼミナールを通して、問いを何度も修正し、研究の意義を見出していくという研究の手順を学べただけでなく、協力して一つの研究を進めていく楽しさ

を知れた。

三、論点の紹介

合同ゼミのグループワーク I の事前課題の内容には、私にとってあまり興味関心のある分野はなかった。しかし、ポルトガルに関心を持っていたため、東アジアの中でマカオに興味を持った。『マカオの歴史 南蛮の光と影』¹を読み、ルイス・フロイス『日本史』の写本がマカオで作られたことを知った。『日本史』の原本は、マカオの聖パウロ学院協会で保管されており、なぜマカオで『日本史』の写本が作られたのか疑問に思い、より一層マカオに興味がわいた。そして、16世紀当時のアジアとヨーロッパにおいて、マカオは知識の伝播の拠点となっていたのだと分かった。

下記が、実際に合同ゼミの事前準備の際に作成したレジュメの内容の一部である。

(1) 課題図書のみとめ

中澤穰『中国共産党 vs フェミニズム』²の言いたかったのは、2020年前後の中国で、中国共産党がフェミニズムの考え方を弾圧することにより、中国女性の不満が続いていることだ。そして、中国の中で女性の権利をめぐる争いが起こっているということである。中国共産党の考える男女平等と、日本を含む西洋諸国で考えられる男女平等とは異なる。つまり、中国共産党はフェミニストを適切なものとみなしていない。ちなみに、フェミニズムは中国語で女権主義という。

(2) これからの自身の関心、研究テーマについて

なゼイエズス会士ジョセフ・モンターニャは、ルイス・フロイス著『日本史』の写本を、マカオの聖パウロ学院教会で作成したのか。そもそも南蛮貿易において、マカオは東アジアでどのような役割を果たしたのか。『マカオの歴史』によると、ルイス・フロイス『日本史』は、16世紀末の日本において西洋人の観点から、同時代の日本の風習を記録した著書である。『日本史』は、日本からマカオに運ばれ、聖パウロ学院教会で保管された (p. 148)。約 150 年後の 1742 年にジョ

¹ 東光博英 (1998) 『マカオの歴史 南蛮の光と影』大修館書店。

² 中澤穰 (1998) 『中国共産党 vs フェミニズム』ちくま新書。

II. 7. 学内外での教職員や学生の取り組み

セフ・モンターニャが、マカオの聖パウロ学院教会で保管されてきた文書の写本作成を始めた (p. 149)。なぜジョセフ・モンターニャは、『日本史』の原本をポルトガルへ運ばず、マカオで写本を作成したのか。おそらくマカオには聖パウロ学院教会があったからだろう。同教会は東アジア布教に従事する聖職者の養成機関であり (p. 133)、写本作成の制度が確立されていたからか。

『日本史』の写本は、複数存在している。複数の写本は世界を回り、当時の日本を知る手掛かりになった。つまり、マカオで写本を作成したことで、知識が世界に伝播している。マカオは、知識の伝播の拠点であったといえる。マカオというアジアとヨーロッパの中継地点は、単に物資の交易の場だけでなく、知識の(再)交流や(再)構築の場であったのだろう。

参考文献

- 東光博英 (1998) 『マカオの歴史 南蛮の光と影』大修館書店.
中澤稜 (1998) 『中国共産党 vs フェミニズム』ちくま新書.

Ⅲ 英米語学科

1. 高等学校英語対話弁論大会

第 41 回 静岡県高等学校英語対話弁論大会報告

『常葉大学主催・静岡県教育委員会後援 第 41 回静岡県高等学校英語対話弁論大会 (The 41st Shizuoka Prefectural Inter-Hight School English Dialogue Speech Contest)』が令和 7 (2025) 年 11 月 22 日 (土曜日)、静岡草薙キャンパスにて開催されました。

本大会は、二人一組のスキット形式で、社会問題や日常生活の話題をオリジナルで創作し 4 分以内で英語表現するユニークなコンテストです。また、本大会は常葉大学外国語学部創設以来、コロナ禍を除く毎年実施されており、今年で 41 回を迎えました。静岡県教育委員会の後援のもと、県内の高校生に英語で発表する機会を提供することで、英語教育を支援することを目的としています。40 回大会より本学入試における加点対象ともなっています。

今年度は、静岡県内 5 校から 8 組 16 名がエントリーし、うち 7 組 14 名が出場しました。出場者たちは、日々の練習で培った英語の表現力を存分に発揮し、熱意あふれるパフォーマンスを披露しました。

大会結果

優 勝	“The Unwanted” オグラ ケイラさん、オオイシ アユミさん [静岡県立浜松江之島高等学校]
準 優 勝	“Our hobbies” 杉田 大翔さん、小田 遥大さん [静岡県立静岡城北高等学校]
第 3 位	“What is Fashionista?” 小野 優月さん、中島 萌瑠さん [静岡県立掛川西高等学校]

出場高校 (五十音順)

静岡県立掛川西高等学校、静岡県立静岡商業高等学校 (2 組)、静岡県立静岡城北高等学校 (2 組)、静岡県立浜松江之島高等学校、常葉大学附属常葉高等学校

なお、本大会には、英米語学科の学生スタッフたちの献身的なサポートが欠かせません。今大会においても、MC の進行、学部長による開会の挨拶の通訳など、

学生たちは授業で身につけた英語運用能力を活かし、円滑な大会運営に貢献しました。

【学生スタッフ（英米語学科）】（敬称略）

MC：佐々木 隆斗、渡邊 心結（2年）

通訳：石川 美珂（1年）

タイムキーパー・MC 補助：高橋 舞鈴（1年）

受付・会場・ジャッジ集計：金 桃圭（3年）、高林 煌叶（2年）、
中込 杏果（1年）

撮影・記録：町田 幸希（2年）

【教員スタッフ（英米語学科）】（敬称略）

小池 理恵（大会責任者）、良知 恵美子、佐藤 由美、スティーブ・ユーリック、
天野 剛至、中島 義和

【審査員（英米語学科教員）】（敬称略）

ロバート・マグラクレン、ケビン・デミ、スティーブ・ユーリック

本年度は、特に評価ルーブリックの詳細な説明に加え、参加生徒、引率教員、保護者向けにアンケートを実施し、次回大会に向けての更なる向上の参考とします。



2. English Speech Contest

The 2025 Tokoha University English Speech Contest

The annual Tokoha University English Speech Contest was held at Tokoha's Kusanagi Campus on December 2nd, 2025, from 3:00-4:30. A total of nine speakers participated in this year's contest. The judges were Professor Robert McLaughlin, Professor Peter Hourdequin, Professor Steve Urick, and Professor Kevin Demme. Six student volunteers also assisted in this year's contest. Speakers had a choice of two topics, and this year's themes were:

1. Ten years from now, what kind of person would you like to be?
2. How has learning English changed your views or way of thinking?

Speakers were given a total score of 100 points by the judges: 40 points for the contents of their speeches, 40 points for their delivery, and 20 points for their English.

This year's winner was second-year student Julia Sato, who spoke passionately about wanting to be confident, good at communicating, and a good mother in the future. Second place went to fourth-year student Shoma Hikabe, who gave a moving tribute to his father and wanted to follow in his footsteps. Second-year student Ayumi Suzuki won third place and spoke eloquently about how her experience studying English has taught her to think for herself and has given her the courage to speak up and ask questions.

In addition, a special memorial prize was awarded to the student who demonstrated a high level of diligence and hard work in preparing for the contest. This prize honored the memories of six professors of the Foreign Studies Department who have passed away while working at Tokoha. They are: Professor Catherine Sasaki, Professor and Dean Yoichi Kuwahara, Professor Tomoko Inoue, Professor Tomoko Haraguchi, Professor Katsuyoshi Suzuki, and Professor Yoshie Ishikawa. The winner of this year's memorial prize was third-year student Enishi Onoda, who talked about how learning English has helped her to not worry about making mistakes and has been an important part of her own

journey of self-acceptance.

We'd like to congratulate and thank all of the speakers for their excellent performances, their hard work, and their courage in participating in this year's contest.



3. 教員採用試験合格者

教員採用試験合格体験記

英米語学科4年 川上 拓真

私が教職の道を志したきっかけは、大学において英語学を専攻し、授業や英検、TOEICなどの資格試験に向けた学習を継続する中で、英文法や英語表現、言語の仕組みについて調べ、理解を深める過程に強い関心を持つようになったことである。英語を「使えるようになること」に加え、「なぜそのような表現になるのか」「どのように説明すれば理解しやすいのか」を考えることに面白さを感じ、この知的関心を職業として活かせる進路として教職を意識するようになった。また、自身の英語学習において、未だ達成できていない目標があり、教員として生徒の学習指導に携わりながら、自らも学び続けたいと考えたことも、教職を志した理由の一つである。教員は知識を教える立場であると同時に、常に学び続ける姿勢が求められる職業であり、その姿勢を実践を通して生徒に示すことができる点に魅力を感じた。英語教育を通して、生徒の学習意欲の向上や主体的に学ぶ力の育成に貢献したいと考え、教員を目指すに至った。

教職を志すにあたり、私は当初から私立学校を志望しており、公立学校の実験は考えていなかった。その理由は主に三点ある。一点目は、志望校が母校であるという点である。学校の教育方針や校風を在学中の実体験をとおして理解しており、また、勤務されている教員の多くが面識のある方々であったことから、学校現場に円滑に適応できると考えた。新卒教員にとって、既に人間関係や学校文化を理解していることは大きな利点であり、採用においても評価される要素になると判断した。二点目は、転勤がないことである。公立学校教員の転勤制度は、勤務環境や人間関係が大きく変化する可能性がある点で、負担が大きいと感じていた。自身の性格を踏まえると、一つの学校に長期的に勤務し、経験を積み重ねながら専門性を高めていく方が適していると考え、私立学校を選択した。三点目は、教育環境である。教員が安定して力を発揮するためには、校舎設備や学校全体の雰囲気といった勤務環境も重要な要素である。特に、学習環境が整い、明るい校

舎であることは、生徒の学習意欲だけでなく、教員の教育活動にも良い影響を与え、私立学校に魅力を感じた。

私学の採用試験では、教職教養と小論文の二つで試験を行う。教職教養の学習は、午前中に約2時間、午後に約3時間の計5時間を基本とし、継続的に取り組んだ。小論文対策としては、市販の参考書を使用して練習を行い、キャリアサポートセンターに勤務されている先生方に添削のご指導を頂き、添削文をもう一度自分で再考することを繰り返すことで、様々な角度の問いに対応できるように準備を行った。二次試験の面接に対する準備としては、「学校や生徒が求めていること」と「それに対して自分がどのように貢献できるか」をA4一枚にまとめ、自分の思考を整理した。

本稿では、私が教員を志した理由に始まり、私立学校を選択した背景や合格までに行った活動について述べてきた。教員を目指す過程や採用に至るまでの道筋は人それぞれ異なり、画一的な方法が存在するわけではない。重要なのは、自身の価値観や適性を踏まえ、納得のいく進路選択を行うことであると考えている。教員という職業は、免許取得や採用試験など、就職に至るまでに多大な努力を要する一方で、社会的責任も大きい職業である。教育を取り巻く環境が厳しいとされる現代においても、なお教育に携わりたいという意志を持ち続けることは、教員として重要な資質の一つであると考えている。今後は、その責任を自覚し、生徒一人ひとりの成長に寄与できる教員となることを目標に、研鑽を積んでいきたい。

4. クレイトン大学交流プログラム

2025 年度 クレイトン大学との交流プログラム

6月23日（月曜日）、クレイトン大学（米国ネブラスカ州オマハ市）の10名の日本語研修生（ホセ・マクラナハン先生、海野恵美子先生引率）を本学静岡草薙キャンパスへ迎えました。昨年に引き続き3年目となるこの訪問は、7月20日（日曜日）まで4週間行われる『語学・文化研修プログラム』となります。

交流の中心となる外国語学習支援センター（FLSSC）では、本学学生がクレイトン大生と英語や日本語で会話をしたり、一緒に英語学習用ゲームで遊んだりする時間を通してクレイトン大学の留学生を迎え入れました。



クレイトン大学の学生は、6月25日（水曜日）に静岡草薙キャンパスのグラウンテーブルでウェルカムパーティーを行いました。

参加した本学の学生とクレイトン大学の学生は、英会話を通じたゲームで60分程交流し、お互いに良い時間を過ごすことができました。

6月30日（月曜日）には、安武伸朗学長を表敬訪問しました。安武学長は、1988年から続く本学とクレイトン大学との長い交流の歴史について触れながら歓迎の言葉を述べた後、クレイトン大学の学生との質疑に答えながら歓談をしました。10名の学生は、それぞれ日本語を交えて自己紹介を行った後、安武学長との歓談の中で、常葉大学と地域との関わりや将来性について鋭い視点から質問を投げかけ、学びを深めるとともに、有意義な交流の時間を楽しみました。



7月1日(火曜日)にはクレイトン大学学生の引率教員である Joseph (José) C. McClanahan 先生と海野恵美子先生が英米語学科1年生の教養セミナーにおいて、特別講義を行っていただきました。講義を通して学生は、日米の大学のそれぞれの学びの違いや日本以外の外の世界を見ること、また外から日本を見る視点の大切さなどを学びました。

講義の最後に、講義内で学んだことについてのクイズがあり、学生らが積極的に発言をする姿が見られました。



7月7日(月曜日)には静岡市大石貴生副市長を表敬訪問しました。10名の学生がそれぞれ日本語で自己紹介をしたのち、本学で2週間を過ごした感想等を語りました。

大石副市長は「今年はおマハ市との姉妹都市交流60周年で、このような交流が長きにわたって継続したことは市民の皆様のご尽力によるものであり、未来に期するものであります。ぜひまた来てほしい」と激励の言葉を贈られました。また、市議会議場を見学するなど、静岡市職員の協力により日本の自治体の様子を

Ⅲ. 4. クレイトン大学プログラム

感じることができました。



7月9日（水曜日）、学生10名は、附属橘高等学校を訪問しました。

当日は、最初に英語部の生徒と交流を行い、言語や文化について意見を交わす有意義な時間を過ごしました。その後、剣道場へ移動し、剣道部の練習を見学しました。見学後は、剣道部員から竹刀の正しい振り方を教わり、新聞紙を用いた実践的な体験にも挑戦しました。

さらに、体育館では太鼓部の練習を見学し、実際にバチを持って太鼓の叩き方を教えていただくなど、日本の伝統文化を肌で感じる貴重な機会となりました。

参加したクレイトン大学の学生たちは、高校生との交流を通じて多くの学びと体験ができたこと大変感激しており、思い出に残る一日となったようです。



7月10日（木曜日）に静岡市の駿府匠宿において、藍染や陶器作成をクレイトン大学の学生と常葉大学の学生が一緒に行いました。

公共交通機関を利用しての現地への道中、さまざまな会話を楽しみながら帰ってくることができました。



約1カ月の語学研修および日本文化研修の後、フェアウェル・パーティーを7月18日(金曜日)に行いました。ホームステイ先を提供してくださったホスト・ファミリーやスタディ・バディプログラムのフリークエント・サポーター約60名がフェアウェル・パーティーに参加し、1カ月の思い出を振り返りました。

会の最後に、クレイトン大学の学生から一言ずつ日本語でコメントと日本語で『今日の日さようなら』の歌の発表があり、心に残るフェアウェル・パーティーとなりました。



Welcome Party for Creighton University Students

by Peter HOURDEQUIN

On June 25th, 2025, Tokoha University welcomed students from Creighton University with a cheerful party at GranTable. After some brief introductions, approximately 40 participants from our two universities played a game called “da. re.da” that was made by Tokoha Game Lab.



Gameplay helped introduce Creighton University students to well-known historical, literary, and popular cultural figures (people and characters) related to Japan. To help Tokoha students get to know their new friends from Creighton, the game also included some additional (home-made) cards with profiles of the Creighton students themselves!

Overall, the event was a lot of fun, with convivial gameplay punctuated by bursts of applause and laughter as students from Tokoha and Creighton universities got to know each other for the first time.

Regarding the Recruitment of Host Families for the 2025 Creighton University Exchange Program

MIYAKOSHI Hiromi, Robert MCLAUGHLIN

The Creighton University Summer Study Exchange program began in 2018 and has reached its eighth year in 2025. Creighton University is located in Omaha, Nebraska, in the United States, a sister city of Shizuoka. Each year, from mid-June to mid-July, students from Creighton University, accompanied by two supervising faculty members, stay at Tokoha University to study Japanese language and culture.

Although face-to-face exchanges were suspended due to the COVID-19 pandemic beginning in 2020, the program resumed in 2023. The number of visiting students was 10 in the 2023 academic year, seven in 2024, and again 10 in 2025. These students generally stay with host families, primarily the families of students from Tokoha University. While many students volunteered to host in 2023 and 2024, only three host families had been secured for 2025. Since 10 Creighton students are expected to stay for two weeks each, a total of 20 host families is required. The remaining 17 families were arranged as follows: five from Tokoha University's affiliated Tachibana High School, ten from the Shizuoka City Association for International Relations' homestay members, and two from faculty professors at Tokoha University.

It is especially important to understand why many students from the Department of English, despite having an opportunity to engage with native English speakers from the United States, did not volunteer as host families. Investigating the reasons behind their reluctance is crucial for future program planning.

To that end, we conducted a survey via Microsoft FORMS to explore the reasons why students did not host Creighton students this year. A consent section was included in the form regarding the publication of results, and responses from those who declined consent were excluded from the analysis. The respondents consisted of 78 first-year and 28 third-year students from the Department of English. Excluding the four first-year

Ⅲ. 4. クレイトン大学プログラム

students who did not consent to publication, the final sample comprised 74 first-year and 28 third-year students, totaling 102 participants.

1. Awareness of the Call for Host Families for the Creighton University Program (n=102)

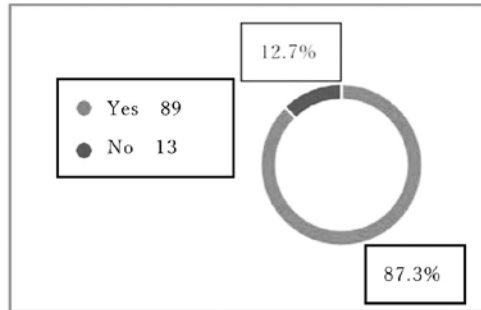


Figure 1: Awareness of the Host Family Recruitment for the Creighton University Program

2. Applied for a homestay program (n=102)

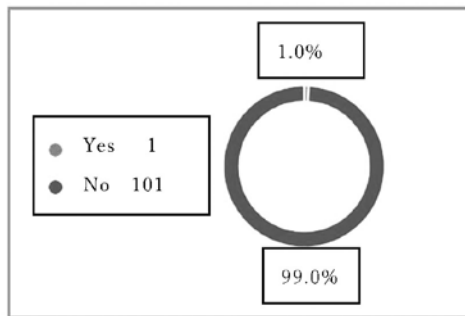


Figure 2: Number of Applicants for the Homestay Program

3. Breakdown of Reasons for Selecting 'No' (n=102)

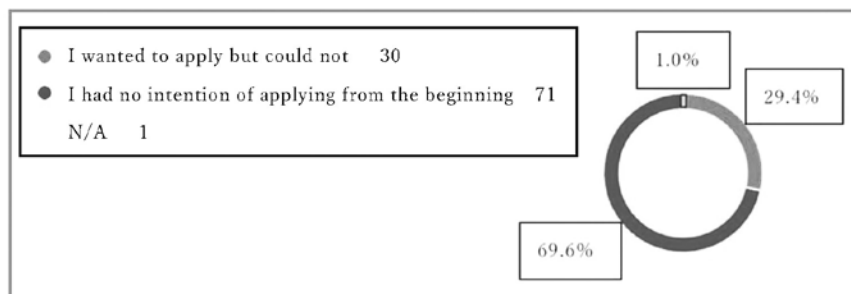


Figure 3: Breakdown of Reasons for Selecting 'No'

4. Reasons for Not Applying to Host (Multiple Selections Allowed) (Respondents numbers in parentheses)

- Unable to provide a private room for a Creighton student (59)
- The house is located too far from the university (45)
- Either the student or their parents are uncomfortable with having someone unfamiliar live in their home (32)
- Either the student or their parents lack confidence in communicating in English (29)
- Either the student or their parents are uncomfortable with having a foreign national live in their home (20)
- No personal interest in the program (17)
- The honorarium of 30,000 yen for two weeks is considered insufficient (15)
- Either the student or their parents are concerned about providing breakfast and dinner (15)
- Due to rising food prices, it is difficult for the family to cover the cost of meals (14)
- Negative impression of the United States due to political issues (4)

III. 4. クレイトン大学プログラム

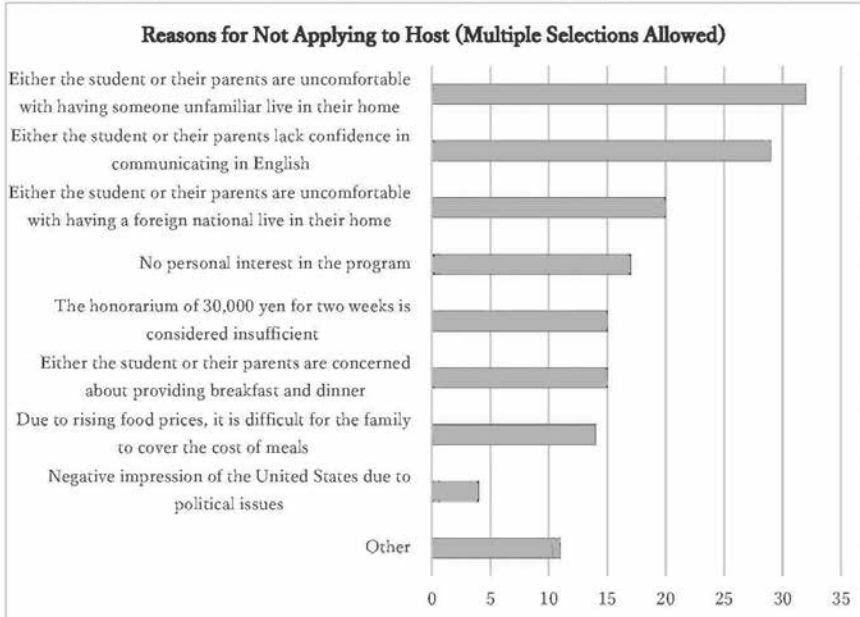


Figure 4: Reasons for Not Applying to Host Creighton University Students

5. Conditions That Would Make Hosting Acceptable (Multiple Selections Allowed) (Respondents numbers in parentheses)

- If shared-room arrangements were permitted, as a private room cannot be provided (35)
- If there were no restrictions on the distance from the university (31)
- If the honorarium were increased (25)
- Other (36)

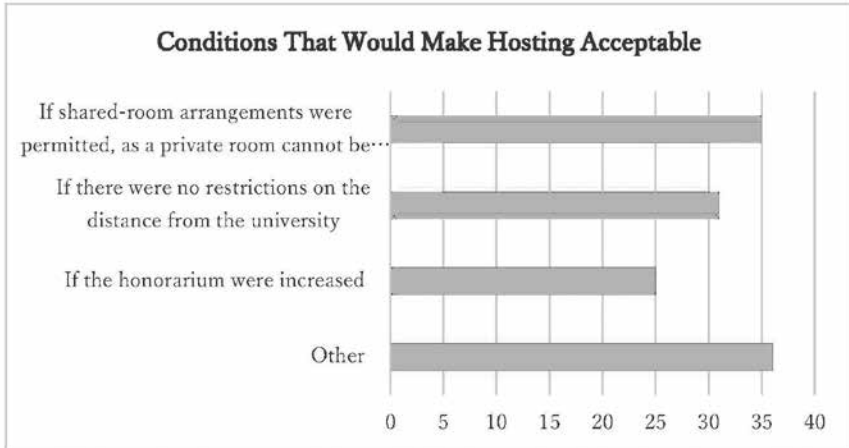


Figure 5: Acceptable Conditions for Hosting

6. Would You Apply if the Conditions in Question 5 Were Met?

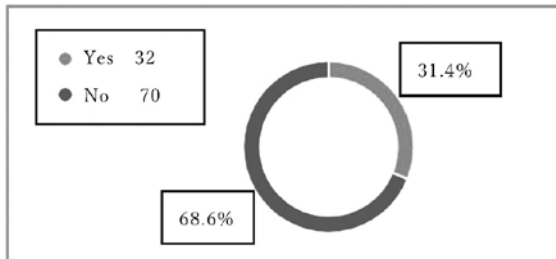


Figure 6: Willingness to Apply if Conditions in Question 5 Are Met

In Question 3, approximately 30% of students indicated that they had wanted to apply but were unable to do so. The most frequently cited reason was, “I cannot provide a separate room for a Creighton student.” Given that some institutions accept shared-room arrangements for host students, reconsidering the requirement for a private room may be a critical step toward increasing the number of available host families.

The second most common reason was, “My house is too far from the university.” Currently, host families are limited to those living within approximately 60 minutes from campus, but many students commute more than an hour to Tokoha University’s Kusanagi

Ⅲ. 4. クレイトン大学プログラム

Campus. Relaxing this criterion—such as extending the limit to 90 minutes—could significantly expand the pool of potential host families.

The third most common reason was, “My parents or I feel uncomfortable having someone unfamiliar live in our home.” Closely following was, “My parents or I lack confidence in communicating in English.” Considering that the majority of respondents were first-year students, it is understandable that they may not yet feel confident using English. However, since these students are enrolled in the Department of English, it is hoped that this concern will not prevent them from taking part in future hosting opportunities.

Notably, concerns that the authors had initially anticipated—such as issues regarding honoraria, ie, the money given to the family by the host student, the cost of meals, or political concerns related to the United States—were mentioned far less frequently than expected. Based on the survey results, it is clear that key factors hindering participation were related primarily to room availability and distance from the Kusanagi Campus. These issues should therefore be re-evaluated as part of future planning efforts. One option under consideration is surveying the Creighton students to see if they would be willing to share a room with a Tokoha student.

Among the responses to Question 5 regarding conditions that would make hosting more feasible, the most commonly selected option was, “If shared-room arrangements were permitted, as a private room cannot be provided,” followed by “If there were no restrictions on the distance from the university.” These findings are consistent with those from Question 4. Additionally, 25 respondents selected “If the honorarium were increased.” Given the continuing rise in the cost of living and food prices in Japan, reconsideration of the compensation amount may be warranted.

Under “Other,” responses included: “If my parents approve,” “My parents are unwilling, and my cohabiting grandfather has a negative impression of foreigners,” “If a room becomes available,” and “It would be possible while my father is on overseas assignment.” These responses suggest that gaining the approval of cohabiting family members and ensuring room availability remain significant barriers to participation.

In Question 6, approximately 30% of respondents stated that they would apply if the

conditions outlined in Question 5 were met. In the 2025 academic year, only three families from the Department of English applied, representing merely 0.84% of the total student body (3 out of 359 students). This stark contrast indicates that a reconsideration of room requirements, commuting distance restrictions, and honorarium amounts is essential to substantially increase the likelihood of participation.

The survey results highlight that the primary barriers to participation in the Creighton University homestay program are related to logistical constraints, specifically the requirement for a private room and restrictions on commuting distance. Addressing these issues by allowing shared-room arrangements and extending the acceptable commuting range could significantly expand the pool of potential host families. Additionally, while concerns about language proficiency and discomfort with hosting foreigners exist, these are less prominent and may diminish as students gain more confidence. Unexpectedly, financial concerns such as honoraria and meal costs were less frequently cited but still warrant consideration, especially in light of rising living expenses. Importantly, familial approval remains a critical factor influencing participation. Overall, revising program requirements and support mechanisms based on these findings is essential to increase host family applications and promote the program's growth in the coming years.

5. 語学研修

2024 年度カナダ語学研修報告

外国語学部の英語圏の語学研修は、1年おきにアメリカ（カリフォルニア大学アーバイン校）とカナダ（ビクトリア大学）にて実施されています。2024年度はカナダ語学研修として、2025年2月1日（土）から3月2日（日）までの約1か月間の日程で実施されました。

参加者は、外国語学部英米語学科2年生の男子学生2名でした。二人は、本学の提携校であるカナダ・ビクトリア大学の語学センターに所属し、4週間のホームステイを行いながら、語学研修および多様な体験活動を含むプログラムを通して、カナダの文化や社会について学びました。

研修期間中は、午前中に語学センターで英語学習を行い、午後には自分で予定を立てて地域の歴史や文化に触れることができる施設や地域を訪問したり、学内の施設で運動したり、アイスホッケーの試合を観戦したり、さまざまなアクティビティに参加しました。また、3日間の週末を利用してバンクーバーを訪れ、都市文化や多文化社会の様相を体験する機会も得ました。

本研修（4週間）の費用は、おおよそ81万5千円でした。これに加えて、日本国内の旅費（成田空港までの往復交通費）、現地での個人的な活動費、および土産代などが別途必要となります。なお、参加者が10名以上となる場合には団体航空運賃が適用され、全体の費用を抑えることが可能です。

なお、2025年度は、2026年2月1日から2月22日までの日程で、アメリカ・カリフォルニア州にて語学研修が実施される予定です。英米語学科の学生に加え、グローバルコミュニケーション学科および経営学部の学生も参加し、計8名での研修が計画されています。

6. 実習科目

英米語学科授業『国際交流実習 A』

1. 『国際交流実習』概要：シラバスより

本科目は、地域における英語での国際交流活動を通じて、実践的なコミュニケーション能力と異文化理解を深めることを目的としています。学生は地域社会で英語を使用したボランティア活動や国際交流活動を 39 時間実践し、事前・事後指導(最終報告会)に参加し、活動証明書やレポートを提出することで1単位が認定されます。(担当：宮腰・那須野)

2. 2025 年度実績：1 件

3. 受講者の声：

「英語で話すとは」

英米語学科 2 年 町田 幸希

清水港に入港する外国客船の数はここ数年で急増し、清水区のインバウンド需要は急速に高まった。そんな中 2025 年 3 月に、静岡市がクルーズ船の乗客に清水港周辺の観光案内を提供するボランティアを募集した。外国語学部で英語の習得に力を注いでいる私にとっては、自身の英語を実践の場で試すことが出来る、千載一遇のチャンスだった。とはいえ、豪華客船の乗客に間違った英語を、ひいては失礼にあたる英語を無意識に発してしまったらどうしよう、という不安は常に付きまとっていた。緊張の中迎えた初日は、入港する船の中でもかなり大きな客船で、インフォメーション・オフィスへ来るお客さんの列が絶えなかった。息をつく間もなく次々と質問を受け、自身の英語が流暢かどうかなど考える暇もなく、ひたすら観光案内をした。勤務時間の後半になると頭も喉も疲れてきてスピー

Ⅲ. 6. 実習科目

キング能力が低下したが、それでも何とか情報を届けようという熱意は最後まで維持した。私に対応したお客さんは笑顔で観光案内所を後にし、中には“Your English is good.”や“You were very helpful.”といった優しい言葉をかけてくれる方々もいて、当初抱いていた不安は霧消した。慣れとは不思議なもので、不安だった活動も、回数を経るにつれて楽しみへと変化していった。

4月になると、それまで静岡市が管理をしていた観光案内所は日本旅行が運営することになった。大変ありがたいことに、3月にボランティアとして観光案内をしていた私に今度は有償で勤務をできないかというお誘いが来た。もちろん私はその仕事を引き受け、現在まで月に2、3回、休日に勤務をしている。4月以降より多くのお客さんと接するようになり、新たな苦労も発生した。船によって多少の違いはあれど、基本的にはクルーズ船の乗客はアメリカ、ヨーロッパ、中国、インドの出身者が多い。お客さんのアクセントは出身国によって十人十色で、中には私がどれだけ頑張っても聞き取ろうとしても理解が困難な場合もある。そんな時は、私が聞き取った単語から相手の伝えようとしていることを推測し、確かめてみる。私の推測が合っていることもあれば的外れであるときもあるが、最終的にはいつもお互いに意思疎通をすることが出来る。重要なのは正しい英語ではなく、きれいなアクセントでもなく、伝えようとする意志、聞き取ろうとする努力なのだと学んだ。

観光案内所で対応するなかで最も多いのが、富士山を見るにはどこへ行くべきかという質問である。次いで、富士山へはどうやって行けるかという質問である。富士山は私の家からも眺望することが出来、世界遺産のこの火山は私にとってはごく当たり前の存在であるが、訪日外国人と会話をする中で感じるのは、富士山を一目見たいという人がいかに多いかという現実である。富士山関連の質問以外には、「抹茶を楽しめる場所はどこか」、「着物体験ができる店はないか」といった、即答が困難な質問も受ける。清水区を知悉していると思っていた私は、こうして様々な質問を投げかけられることで自分の地元に関する知識がどれほど乏しかったかを知った。観光案内業務を通して地元清水の理解が深まったことも、この仕事の産物である。

クルーズ船の観光案内業務を通して貴重な経験を積むことが出来た。地元の知識が増え、今までなんとも思っていなかった地元の観光資源の価値に気付いた。

そして、自身の英語を伸長させる目的でこの仕事に応募した私にとっては皮肉であるが、外国人との意思疎通においては英語の質はさして重要ではなく、伝える意思、聞き取る努力が何よりも大切だという気付きをもたらした。



IV グローバルコミュニケーション学科

1. 多言語レシテーション大会

第 12 回多言語レシテーション大会

多言語レシテーション大会は、グローバルコミュニケーション学科学生が、日頃研鑽に努めているスペイン語・中国語・ポルトガル語・韓国語の 4 言語の学修を披露する場としてはじめられたものであったが、近年は県内の高校生の参加も得て、地域の学生・生徒の言語学習のペースメーカーとしての役割も果たしている。12 回目となった本年度は、2015 年 12 月 13 日に静岡草薙キャンパスにて開催され、多くの聴衆の前で熱演が繰り上げられた。

各言語の課題文と入賞者は下記のとおりであるが、いわゆる「弁論大会」と異なり、レシテーションの場合は、学習歴の長さや評価（評価の順位）とが必ずしも比例しないのが興味深い。つまり、学び始めたばかりであっても、課題文となった詩歌を理解し表現しようとの情熱如何で高く評価され得るといふ、ある意味で「開かれた」「ハードルの低い」特色あるイベントである。

◎スペイン語

〈ソロ部門〉

Gustavo Adolfo Bécquer “Cantares Populares”

- 1 位 深澤 杏香さん（グローバルコミュニケーション学科 1 年）
- 2 位 若林 香葉子さん（グローバルコミュニケーション学科 2 年）
- 3 位 高橋 明美さん（静岡県立吉原高等学校 1 年）

〈ペア部門〉

映画 “Palabras para ser libres” をもとにしたオリジナル課題

- 1 位 『Las fresitas』
 - 大木 萌々華さん（グローバルコミュニケーション学科 4 年）
 - 望月 来瞳さん（グローバルコミュニケーション学科 4 年）
- 2 位 『最弱の 2 人』
 - 山城 賢太さん（静岡県立田方農業高等学校 3 年）
 - 尾川 雄記さん（静岡県立田方農業高等学校 3 年）

3 位 (出場ペアなし)

◎中国語

〈ソロ部門〉

王翰《凉州词二首 其一》

1 位 岡本 美月さん (グローバルコミュニケーション学科 1 年)

2 位 佐藤 美紗希さん (グローバルコミュニケーション学科 2 年)

3 位 多田 愛香理さん (静岡県立静岡城北高等学校 2 年)

〈ペア部門〉

胡适《终身大事 — 游戏的喜剧》

(出場ペアなし)

◎ポルトガル語

〈ソロ部門〉

Cecília Meireles “Canção”

1 位 佐野 紘香さん (グローバルコミュニケーション学科 2 年)

2 位 萩野 莉紗さん (グローバルコミュニケーション学科 2 年)

3 位 星野 ユカさん (静岡県立吉原高等学校 1 年)

〈ペア部門〉

César Obeid “Ditados Populares”

1 位 『Pão de melão』

渡邊 望さん (グローバルコミュニケーション学科 2 年)

依田 麻唯さん (グローバルコミュニケーション学科 2 年)

2 位 『Amizade チーム』

大石 ひらりさん (グローバルコミュニケーション学科 1 年)

阿部 柑菜さん (グローバルコミュニケーション学科 1 年)

3 位 『Broto』

内山 愛葵さん (グローバルコミュニケーション学科 1 年)

浅井 心優さん (グローバルコミュニケーション学科 1 年)

IV. 1. 多言語レシテーション大会

◎韓国語

〈ソロ部門〉

이해인 나를 키우는 말

1位 佐藤 羽音さん (静岡県立田方農業高等学校3年)

2位 小玉 日遥乃さん (グローバルコミュニケーション学科3年)

3位 二羽 杏実さん (グローバルコミュニケーション学科2年)

〈ペア部門〉

한용운 님의 침묵

1位 『싸우지만 사이는 좋다』

畠中 里佳さん (グローバルコミュニケーション学科2年)

鈴木 李香さん (グローバルコミュニケーション学科2年)

2位 『김밥』

遠藤 百恵さん (静岡県立吉原高等学校2年)

諸星 玲奈さん (静岡県立吉原高等学校1年)

3位 『여자친구』

田邊 莉々華さん (グローバルコミュニケーション学科1年)

寺井 心優さん (グローバルコミュニケーション学科1年)

2. 社会人基礎力育成

DX が学生たちの時代に及ぼす影響に関する一考察

谷 口 茂 謙

GC 学科 2 年次の専門科目「現代の産業」は、静岡県内の各業界を代表する企業を、前期と後期に 3 社ずつ招き、特別講義を開催している。2024 年度と 25 年度は、ビジネス DX をテーマとして、各企業から貴重なお話を聞くことができた。興味を持ち、積極的に耳を傾けた学生も少なくなかったが、熱心な学生たちも含めて、「自分事」として真剣に受け止める学生が少なかったように感じた。自分たちが就職する頃には、どの企業でも DX が終わっており、働き方改革が実現された環境の中で仕事ができる。多くの学生が、そのような期待を持ったのではないだろうか。すべての企業が「弊社は積極的に DX に取り組んでいる」と説明したので、そのような期待が生まれることは当然だが、そのような環境で、自分たちに何が求められるのかについては、考えることができていないと思われた。そこで、すべての企業が現在進行形で取り組んでいる DX が、これからの時代に及ぼす影響について考察し、学生たちが社会に出るまでに身に付けておく必要がある新たなスキルを提言する。

DX が実現されるまでの過程は、大きく 3 段階に分けられる。これまでに蓄積したアナログデータをデジタルに変換するデジタイゼーション、そのデータを活用して業務のプロセスをデジタル化するデジタライゼーション、その結果として組織やビジネスモデルを変革して優位性を確立するデジタルトランスフォーメーションの 3 つである。招聘したどの企業も、ビジネス DX がすでに完遂したと胸を張ることはなかったものの、多くの企業が、デジタライゼーションの段階にあるとのことであった。第 1 段階のデジタイゼーションについては、後の 2 つに比べれば、時間はさほどかからない。1 年程度と思われる。この段階に長くかかるようでは、優位性を確立できず、大きな遅れを取る恐れが大きい。その一方で、業務のプロセスをデジタル化するには、少なくとも数年がかかるはずである。これまでの慣れたやり方を捨て、新しいやり方を社員一人ひとりが一から覚えなければならない。できるようになってしまえば、以降の業務は従来とは比べものに

IV. 2. 社会人基礎力養成

ならないほど楽になるかもしれないが、そのやり方を覚えるまでに、大きな苦勞が伴うのである。レガシーシステムから脱却できない企業が多い理由でもある。

ビジネス DX を推進しない企業は、これからの時代に生き残ることができない。それは目に見えているので、いずれの企業も精一杯の努力をしている。おそらく、現在の2年生が就職する頃には、多くの企業でデジタルイゼーションが進み、最後のDXの段階に入っていると思われる。学生たちは、恵まれた環境で働けると期待しているようだが、その裏に、時代に合った仕事のやり方を身に付けなければならない苦勞があることには、考えが及んでいないと思われる。学生たちが企業の中核として活躍する時代には、次の新たなDXさえもが完遂されていることが十分に予想される。現時点で、次のDXがどうなるかを考える必要はない。しかし、今のDXが実現した結果、学生たちは、社会でどのような仕事のやり方を求められるのだろうか。その考察は不可避である。

それを考える手がかりは、DXに直接的に関わるICTサービス業界からお招きした企業のお話にあった。24年度は、エヌ・ティ・ティ・システム開発株式会社（現在は株式会社マーブル）にお越しいただいた。そのお話の中で、プログラマーという職業の将来について言及された。この会社では、入社1年目に、プログラマーとしての研修を積み、2～4年目にシステムエンジニアとしての経験を積む。5年目以降はシステムエンジニアのチームリーダーとして活躍し、8年目以降はITのスペシャリストとして専門職の道に進むか、プロジェクト・リーダーとして総合職の道に進むかを選択する。将来どちらの道を選ぶとしても、入社時はプログラミングについて未経験から始められるとのことであった。プログラミングは、コンピュータが理解できる言語で、コンピュータに指示を与えることである。現在すでに、ノーコードでアプリケーションを作成することが可能となっている。しかし、専門性の高いシステムを作るには、プログラミング言語を使って作成しなければならない。つまり、ノーコードで作成できるシステムには限界があり、より高度な要求に応えるシステムを作ることができる専門家の需要は、決してなくなることはない。むしろ、その重要性が高まるのである。

キーパンチャーという職業がある。大量のデータをより速く正確に入力する専門職である。この仕事に、キーボードのブラインドタッチは、必要不可欠なスキルである。パソコンが普及した現代では、自分の生活に必要な情報を処理する程

度であれば、ブラインドタッチで入力することは誰でもできるようになった。だが、大量のデータをより速く正確に入力するには、プロの技が必要になる。誰もがブラインドタッチができる時代でも、レベルの高いスキルを持った専門職としてのキーパンチャーの需要は決してなくなるならない。これと同じことがプログラマーの将来にも言えるのである。

25 年度には、株式会社静岡情報処理センターにお越しいただいた。この会社のお話では、AI について言及された。ノーコードでアプリが作成できるシステムでは、人間の言葉による指示が、AI によって自動でコード化されているとのことであった。だから、プログラミングの知識が無くてもアプリを作ることができる。AI に対してユーザーが出す指示はプロンプトと呼ばれる。ユーザーが求める最適な答えを返すように、プロンプトを開発、改良する職業がプロンプト・エンジニアである。AI を機械だと考えずに、自分の仕事を助けてくれるパートナー、つまり人だと考えると、AI を使いこなす根本的な能力は、コミュニケーション力であることがわかる。

静岡情報処理センターが毎年採用する人材の半数は、文系学部出身者とのことであった。システム開発の仕事には、顧客の話に耳を傾け、課題を十分に理解した上で、その解決策を顧客にわかりやすく説明する力、即ちコミュニケーション力が不可欠である。文系学部出身者がより得意とする領域であり、特に異文化の人とのコミュニケーションを勉強した外国語学部の学生には期待しているというお話を聞くことができた。上述のエヌ・ティ・ティ・システム開発株式会社のお話に出たプログラミング言語は、コンピュータとコミュニケーションをするための言語である。コンピュータを外国人と考えれば、新たな外国語ととらえることができる。講師の方も、外国語を勉強した人は、プログラミング言語の学習にもなじみやすいとおっしゃっていた。ICT の専門家を目指すか否かを問わず、外国語を学んだ経験は、これからの社会で大きな利点になることは間違いない。

その一方で忘れてはならないことがある。それは先ほどのブラインドタッチに当たるスキルである。昔は普通にできる人がプロとして通用した。しかし、PC が普及した現代、ブラインドタッチは、自分の生活に必要な情報を処理する程度なら誰にでもできるスキルになった。これと同様に、プロになるほど上手でなくてもよいが、これからの時代に、自分の仕事を処理する程度なら、誰もができて

IV. 2. 社会人基礎力養成

当たり前になるスキルが出てくるはずである。学生たちは今からそれを身に付ける準備をしなければならない。

私が提言するスキルは、ノーコードでアプリを作ることである。今までは、ソフトウェアの開発企業が作成したソフトを調べ、自分の仕事で使える機能があれば、そのソフトを購入して使うことが一般的であった。より多くの人にってもらえるように、様々な機能を持たせたもので、それだけ高価にもなっている。自分の仕事では使わない機能も含めて購入せざるを得ない時代であった。もちろん、自分の仕事で、高度な情報処理が必要となる場合には、やはり専門家が作成したソフトを購入することになる。しかし、自分の仕事を思い通りに処理する程度のアプリは自分で作る。そんな時代になる可能性は大きいと考えるべきであろう。

現在の多くの企業は、DXを進める流れの只中にある。学生たちは、その流れをさらに推し進める力となることが求められる。外国語学部の学生が大学時代に訓練する能力はコミュニケーション力である。その力が、AIを使いこなすことが求められる時代に大きく役立つことは明らかである。だが、それだけでは時代の波に乗って活躍することは難しい。静岡情報処理センターが取り組む社内DXの一環として、チームで作った新たなシステムについて、その作り方や使い方をお互いに教え合っているというお話があった。これによって、社員同士で協力し合う意識が高まるとともに、「自分たちでDXを進められる」という自信も生まれたとのことである。AIと上手にコミュニケーションをして、自分の仕事に使えるアプリを作ることができれば、これからの時代により有能な人材として活躍できるに違いない。今どき、携帯電話の請求書を郵送でもらうには、余分な料金がかかる。これからは、自分の仕事で使うアプリを自分で作るができなければ、他人のアプリに高額を支払うことになる。当然、そのような予算は会社から認められない時代になる。そんな時代が来ても、AIを使いこなすコミュニケーション力を持って、自分でアプリを作ることができれば、自分の力で生きてゆけることができる。外国語を学ぶ学生たちには、その潜在能力を磨いてもらいたい。私たち教員もその必要性を学生たちに感じさせなければならない。

3. 臨地実習

2025 年度 臨地実習 A 活動報告

増井 実子

2025 年度は 12 名の学生がグローバルコミュニケーション学科専攻科目「臨地実習 A」を受講した。以下、11 月 18 日に実施した「活動報告会」のプレゼンテーション資料をもとに受講者が再構成をした報告を紹介する。



活動終了後、学生スタッフと焼津市職員さんが全員集合

臨地実習 A 活動報告

「焼津市国際交流フェスタ「はあとふる Yaizu」を通じて多文化共生を考える」

24122001	赤堀歩乃佳	24122008	稲垣 心	24122013	遠藤 美優
24122019	大畑 育海	24122024	鍵山花奈乃	24122052	高木 寛矢
24122061	福田 りお	25122001	浅井 心優	25122013	内田 暖乃
25122021	岡本 美月	25122050	土屋 悠佳	25122068	深澤明日香

IV. 3. 臨地実習

1. 授業の目的と概要

「臨地実習 A」は、事前準備やチームでの協働を通してチームワーク力を高めること、さらに県内で行われている国際交流・多文化共生活動に実際に参加することによって、外国籍住民の現状を理解し、静岡県における多文化共生社会づくりに主体的に関わる力を育成することを目的としている。

2025年度は、2年生7名、1年生5名の計12名が履修した。担当増井実子の指導のもと、焼津市協働推進課と連携をしながら、焼津市で毎年開催されている国際交流イベント「はあとふる Yaizu」の企画・運営に携わった。

2. 「はあとふる Yaizu」とは

今年で30周年を迎える焼津市の国際交流イベントであり、焼津市国際友好協会が主催している。日本人を含む多様な国籍・ルーツを持つ市民同士の交流を目的とし、国際色豊かなステージ発表、世界の料理や雑貨の販売、民族衣装体験など、来場者が楽しみながら異文化に触れられる内容が特徴である。

2025年は9月21日に実施され、来場者数は約1,300人にのぼった。

3. 準備期間の学び：講義と実行委員会活動

6月から9月にかけて、授業内では以下の内容について学び、理解を深めた。

- ・ 多文化共生とは何か
- ・ 焼津市が行っている多文化共生・国際交流の取り組み
- ・ 「はあとふる Yaizu」の目的と役割
- ・ 実行委員としての役割と今後のスケジュール

また、焼津市協働推進課職員を招いた対面のゲスト講義や、Zoomを活用した会議を通して、学生が考えたブース企画を発表し、行政の立場からの助言を受けた。さらに8月には焼津市まで出向き、焼津市の中野弘道市長への表敬訪問や会場の下見を行った。

この過程で、予算管理、実現可能性、来場者の安全や満足度など、企画運営に必要な現実的視点を学ぶ機会となった。

4. 体験ブース企画と準備

焼津市からは、以下の条件が提示された。

- ・ 国籍を問わず交流できること
- ・ 室内（焼津文化会館展示室）で実施可能であること
- ・ 参加者が無料で楽しめること
- ・ 1ブースあたり予算1万円

学生は3グループに分かれ、それぞれ異なる体験ブースを企画・準備した。

① 折り紙で「虹」をつくるブース

折り紙のハートを使い、参加者全員で大きな虹を完成させる企画である。虹は多様性と共存の象徴、ハートは調和や安心感を表し、国籍・言語の壁を越えた協働を目指した。やさしい日本語と英語による説明書も学生が作成した。

② 夏祭り体験ブース

ヨーヨーすくい、手裏剣投げといった日本の夏祭り文化を体験してもらうブースである。浴衣を着用した学生が対応し、視覚的にも日本文化を感じられる工夫を行った。

③ 書道とうちわ体験ブース

うちわに筆と墨で文字を書く体験を通して、日本の伝統文化を体感してもらう企画である。完成したうちわは持ち帰ってもらい、イベント後も日本文化を楽しめるようにした。



IV. 3. 臨地実習

5. イベント当日の運営

イベント当日は、朝の準備から終了まで、学生が主体となって運営を行った。実行委員長は開会式で挨拶を行い、副実行委員長は閉会式を担当するなど、学生が前面に立つ形での実践となった。

各ブースには多くの来場者が訪れ、子どもから大人まで幅広い世代が参加した。ブース参加者は、日本、インドネシア、ベトナムなど多国籍にわたり、自然な形で交流が生まれていた。



6. 外国人来場者へのインタビュー活動

学生は来場者へのインタビューも実施し、母国やルーツ、日本の印象について話を聞いた。ブラジル、コロンビア、ジャマイカ、マラウィ、ベトナム、ミャンマー、フィリピン、インドネシア、韓国など、9か国に及ぶ多様な背景が明らかになった。



来場者からは、日本の食文化や自然、安全性への高い評価がある一方で、言語の壁や偏見を感じる場面があるという声も聞かれた。

7. 学生の気づきと学びの変化

インタビューやブース運営を通して、学生からは以下のような学びが報告された。

- ・ 見た目や先入観で判断しないことの大切さ
- ・ 相手を知ろうとする姿勢が交流の第一歩であること
- ・ 言葉が十分に通じなくても、気持ちは伝え合えるという実感
- ・ 異なる国籍や文化を持っていても、人はつながれるという確信

これらの経験は、言語学習への意欲を高めるとともに、多文化共生を「自分ごと」として考えるきっかけとなった。

8. 活動の総括と今後に向けて

本実習を通して、学生は行政との協働やゼロから企画を立ち上げる経験を積み、多文化共生社会を支える実践的な力を身につけた。地域社会の中で外国語を学ぶ意義を体感できた点も大きな成果であった。

9. 受講者レポート

活動終了後に学生が提出したレポートの中から以下の2篇を紹介する。

コミュニケーションを通じた交流の重要性

グローバルコミュニケーション学科 2年 福田 りお

私は、臨地実習 A において日本で多くの人と多文化交流の機会を得ることを目標に参加をしたが、交流以外にも多くの貴重な体験をすることができた。

今回の実習では焼津市役所の職員の方と連携し「日本文化を楽しんでもらう」ことをテーマにブースを企画・実行した。今回は履修者を学年混合で3つのグループに分け活動を行い、私はその中で実行委員長を務め、活動全体にも責任を持つ立場となった。私のグループは折り紙で作成したハートを用いて大きな虹を協働で作成するブースを企画した。制作物のサイズや必要な個数を計算して準備を進めると同時に、なぜ虹やハートを用いたのかといった制作の意図や企画の目的を明確にして根底まで考えたことで、より意図を理解して活動ができたと思う。

実行委員長としては、他グループに過度に干渉をすることはなかったが、学年を越えた交流を意識し、準備段階では他グループの準備に協力する場面もあった。大変な作業の中でも互いにコミュニケーションをとって協力し合いながら活動できたことが、当日の成功につながったと感じている。

イベント当日には企画実行と同時に、外国にルーツのある参加者にインタビューを行った。様々な国にルーツのある方々が自国に誇りと愛情をもち、それと同時に日本の文化や安全性、清潔さを高く評価していることが印象的であった。

IV. 3. 臨地実習

このことから私にとっては当たり前の風景や社会性が他国では当たり前ではないのだと実感した。また、日本に住んでいて困ることとして、見た目や言語による差別的扱いや偏見を挙げる人がおり、日本における多文化理解はいまだに偏った部分があるということを目の当たりにした。

今回の実習を通して、他者とのコミュニケーションの重要性を改めて実感した。立場や関係性の異なる人々との関わりによって新たな関係の構築や、自分にはなかった新たな考えや知識を得ることができると感じた。また、焼津市役所の方からの多くの助言を通じて、自分たちでは気づけなかった部分が多くあることを知り、多角的に物事を考え、事前に備えていく必要性も学んだ。日々の授業ではグループワークなどはあっても自分たちが主体的に行動する場面が多くないため、自分で実際に感じたことを活かしながら考えて行動する経験になった。またイベントでは本物の外国の文化に触れる貴重な経験をするとともに、日本や焼津市を中心とした静岡の魅力や再発見する機会や固定概念による偏見を持つことがよくないことであるということを感じた。自分の考え方にも多くの変化があったと感じている。

このような経験を活かし、今後もコミュニケーションを大切にしながら偏見なく様々なことに責任をもって行動したり、様々な考え方を尊重しながら事象をとらえたりすることで自分の知見を豊かにしていきたい。今回実行委員長を務めたことも、今後の生活や学習など多くの場面で活かせる貴重な経験であった。これからも積極的に様々な活動に参加し、多くの経験を積みながら自分の成長につなげていきたいと思う。

楽しさがつないだ多文化共生のかたち

グローバルコミュニケーション学科1年 岡本 美月

1. はじめに：本実習では、焼津市で行われた多文化共生を目的とした交流イベントに参加した。日本人と外国人が同じ空間で遊びや会話を楽しむことを通して、相互理解を深めることを目的とした取り組みであり、地域における共生のあり方

を実践的に学ぶ機会となった。

2. 役割：私が本実習で担当した役割は、ヨーヨー釣りおよび手裏剣的当てブースの企画・準備と、当日の運営である。準備段階では、室内で行うイベントとしての安全性に配慮しつつ、子どもから高齢者まで幅広い世代が楽しめる内容になるよう工夫を重ねた。特に手裏剣的当てでは、的の高さや投げの距離について何度も試行錯誤を行い、年齢や身長に関係なく参加しやすい設定を検討した。また、段ボール製の的を用いることで、誰でも安心して挑戦できる環境を整えた。さらに、画用紙で作った提灯を天井に飾ることで、室内でありながら夏祭りらしい雰囲気 연출した。外国人参加者にも分かりやすいよう、やさしい日本語を用いた説明掲示を作成し、視覚的にも理解しやすい工夫を行った。当日は浴衣を着用した運営スタッフとして、遊び方の説明や誘導、景品の受け渡しを担当した。相手の反応を見ながら説明方法を変えるなど、状況に応じた対応を心がけたほか、外国人参加者へのインタビューを通して交流を深める役割も担った。このように、企画から運営、参加者への配慮まで幅広く関わったことが、本実習における私の大きな役割であった。

準備期間から当日にかけて、楽しかったことと同時に難しさも多く感じた。特に印象に残っているのは、来場者と言葉が十分に通じない場面である。最初は英語や日本語がうまく噛み合わず戸惑ったが、身ぶり手ぶりや表情を使って説明すると、相手が笑顔で理解してくれた場面があった。そのとき、言語だけに頼らないコミュニケーションの大切さを実感した。一方で、準備では時間調整や装飾の配置に苦勞し、限られた時間と環境の中で工夫する難しさも経験した。しかし、イベント当日に外国人と日本人が自然に会話を交わし、一緒に笑っている様子を見て、これまでの準備が実を結んだと感じ、大きな達成感を得ることができた。

3. 今後を活かしたいこと：この実習経験は、今後の大学生活にも大きく活かせると考えている。特に、多文化共生について「知る側」にとどまるのではなく、自ら学んだことや感じたことを周囲に発信していきたいと思うようになった。今回のイベントでは、言葉や文化の違いにより想定どおりに進まない場面も多く、その都度、相手の反応を見ながら説明の仕方を変えるなど、柔軟に対応する力が求められた。この経験を通して、状況に応じて考え行動する姿勢の重要性を実感した。今後は授業や日常の会話の中でも、多文化共生や地域における国際交流の

IV. 3. 臨地実習

意義について積極的に共有するとともに、この柔軟な対応力を活かし、周囲と協力しながら学びを深めていきたい。また、学内外の国際交流活動にも主体的に参加し、実践を通して理解を広げていきたい。

4. おわりに：本実習を通して、異なる文化を持つ人と関わることの大切さを実感した。また、多文化共生は特別なことではなく、日常の関わりの積み重ねによって成り立つものであると感じた。今回の経験を今後を活かし、多様な人々と理解し合いながら、人と人をつなぐ関わり方を大切にしていきたい。

臨地実習 C（中国コース）実施報告

戸田 裕司

2025年度臨地実習 C は、グローバルコミュニケーション学科学生 3 名および授業担当教員・戸田裕司の計 4 名で、2025 年 3 月 4 日から同年同月 3 月 13 日までの 10 日間、下記の日程で実施された。

臨地実習 C は、新型コロナウイルス感染症による中断を経て、前年度（2024 年度）に再開され、今年度は再開 2 年目の実施となった。参加学生はやや少なかったが、その分だけ実習先である閩南師範大学日本語学科との交流は密接なものとなり、学生たちもより深く現地社会のひとと街とを体験できた。この点については、本誌に掲載されている参加学生のレポートを一読いただければご理解いただけるであろう。

全日程を通じて全力で実習を支えてくれた閩南師範大学日本語学科の学生の皆さんの存在なしには、この有意義な実習はあり得なかった。加えて、今回は例年に比して閩南師範大学外国語学部指導部の関心とサポートが協力であった。この臨地実習のような学生交流が教育面でもポジティブな効果を生むことが、日中双方の共通認識となってきたと感じる。

1	3月4日 (火)	午前		廈門市(廈門蘆山智選假日酒店)泊
		午後	[12:30 集合] 成田空港 15:05→廈門航空 MF816→18:35 廈門空港→20:00 ホテル	
2	3月5日 (水)	午前	08:00 ホテル→専用車→09:30→南師範大学 11:00- 昼食・休憩	3/6 午後の参観・3/7 午前の体験活動は、地元メディア(福建日報[web版])で報道され、閩南師範大学外国語学部の動画サイトでも公開された。 3/7 午後の参観は、地元メディア(漳州新聞網)の動画サイトで報道された。
		午後	14:30-15:00 外国語学院陳書記歓迎挨拶(ほか学院長等8名の幹部教員出席) 15:00-16:45 キャンパス見学 17:30-19:00 歓迎夕食会(李外国語学院院长・陳日本語学科長出席) 19:30-20:30 日本語学科学生による歓迎会	
3	3月6日 (木)	午前	8:00-11:40 <跨文化文化交流(異文化コミュニケーション)> [3年生科目] 参加 * 途中 漳州市人民政府外事办公室何副主任・漳州市人民对外友好協会呉副会长歓迎挨拶	
		午後	14:30- 漳州市旧市街参観(簪花・茶芸体験、南詞鑑賞、非物質遺産展示館参観)	
4	3月7日 (金)	午前	9:30-11:00 木版年画講習・体験(無形文化財継承人・顔朝俊氏)	
		午後	14:30- 林語堂紀念館参観 * 漳州新聞網郭記者同行取材、漳州市人民对外友好協会呉副会长挨拶	
5	3月8日 (土)	午前	9:30-11:30 日本語交流会	
		午後	自由行動	

IV. 3. 臨地実習

6	3月9日 (日)	午前	9:30-11:30 南山書院参観、「水仙彫刻」講習・体験 * 李日本語学科長・陳外国語学部長補佐等同行	漳州市（閩南師範大学国際学术交流センター）泊（7泊）	
		午後	11:30-14:00 南山書院周辺で昼食・散策 14:00-17:00 南山禅寺・南湖公園参観		
7	3月10日 (月)	午前	自由行動 * 戸田 10:20-11:20 海外教育学院 李院長（国際交流部長）と面会		
		午後	15:00-16:00 片仔癯博物館（製薬会社の企業博物館）参観		
8	3月11日 (火)	午前	10:00-11:00 食材買出し		
		午後	15:00-18:30 共同調理、歓送パーティー		
9	3月12日 (水)	午前	10:20 閩南師範大学東門➡専用車 ➡11:30 厦門（ホテル）		厦門市（厦門蘆山智選假日酒店）泊
		午後	15:00-17:30 鼓浪嶼（コロンス島）参観		
10	3月13日 (木)	午前	ホテル 07:00➡7:20 厦門空港 09:20 ➡厦門航空 MF815		
		午後	➡13:45 成田空港➡15:20 現地解散		

臨地実習C(韓国コース)実施報告—共通課題を現地で学ぶ—

崔 慶原

臨地実習C(韓国)は、日韓の共通課題を現地で学ぶことに重点を置いて実施している。今年度は、1年生7名、2年生3名、3年生6名の計16名が参加し、そのうち15名が「とこは未来教育推進事業助成」を受給した。

現地での実習に先立ち、12月から2月にかけて計6回の事前研修を行った。事前研修では、主に現地で扱うテーマである「多文化共生」および「ジェンダー平等」について、協働研究セミナー Basic での発表内容を発展させ、韓国の学生との合同発表に備えた。二つのテーマについて日本の事例を取り上げたプレゼンテーションを準備するとともに、韓国では同じ課題がどのように認識されているのかについて質問を用意するなど、学年を超えた協働が進められた。また、現地で行うグループ別フィールドワークに備え、訪問先についての事前調査も行った。

現地研修は3月5日から13日まで実施された。研修の柱の一つは、国民大学における韓国学生との交流である。GC学科の学生は、「外国人労働者が直面した障害—日本語の習得を中心に（多文化共生）」および「なぜ格差はなくなるのか（ジェンダー平等）」という二つのテーマについて韓国語で発表を行った。これに対し、韓国の学生は日本語で発表を行い、意見交換を行った。社会制度や価値観の違いを踏まえつつも、共通する課題意識が確認された。

また、韓国社会における多文化共生の実態を学ぶため、外国人労働者を雇用する中小企業（DANIEL WOOD）および、外国人労働者と雇用主の双方を支援している富川市外国人住民支援センターを訪問し、関係者との懇談会を行った。制度の整備状況に加え、現場で直面する課題や工夫について直接話を聞く機会となった。

さらに、極東問題研究所および国立外交院での懇談会、DMZ（非武装地帯）の見学を通じて、南北関係や日韓関係をめぐる歴史的・構造的課題について理解を深めた。加えて、事前調査を踏まえたグループ別フィールドワークでは、韓国が自国の歴史や文化をどのように捉え、発信しているのかを、学生自身の視点から検討した。

帰国後の事後研修では、各自が実習内容を振り返り、活動報告をまとめたレポートを作成した。現地での体験や気づきを整理し、言語化する作業を通じて、経験を学びとして整理する機会となった。

韓国における外国人労働者の受け入れと課題

グローバルコミュニケーション学科3年 青木 真子

外国人労働者の受け入れの現状を学ぶため、2025年3月7日に外国人労働者を雇用している企業「DANIEL WOOD」を訪問し、また同年3月11日には富川市外国人住民支援センターの2か所を訪問した。まず訪れたのが「DANIEL WOOD」という会社である。ここでは、社長のお話を通じて、日本と韓国の雇用の仕組みや働き方の違いについて知ることができた。

特に印象的だったのが、韓国では出勤も退勤も時間通りという文化が根付いている点である。例えば、従業員は出勤時間ギリギリに来て、定時になったら時間通りに退勤するというお話を聞いた。日本の場合は、時間に余裕を持って出社したり、残業が当たり前という雰囲気があるが、韓国でそういった風潮はあまりなく、合理的な働き方が一般的となっている。この話を聞いて、私自身、日本の労働環境の厳しさを改めて実感した。また、韓国には日本の「技能実習制度」や「特定技能制度」のような複雑な制度がないということも違いとして挙げられる。さらに、韓国では職場に監視カメラが設置されていたり、内部告発がしやすい環境が整っていることから、ハラスメントがほとんど起きないというお話もあった。日本でも相談窓口などの制度はあるが、ハラスメントが完全になくならない現状を考えると、制度だけでなく、社会全体の意識や文化の違いが大きく影響しているのではないかと考える。

また、外国人労働者の受け入れ制度についても、日本と韓国では大きな違いがあった。日本では「技能実習制度」や「特定技能制度」など複雑な仕組みが採用されているが、韓国では「雇用許可制」という制度が導入されている。この制度は、外国人労働者の雇用を政府が正式に許可するものであり、国内の労働者で対応することができない分野に限って外国人労働者の雇用が認められる仕組みになっている。自国の労働者の雇用を守りつつ、人手が不足している農業や製造などの分野に外国人労働者の受け入れを認めていることが分かる。一方で雇用許可制を導入していない日本では、外国人労働者が“仲間”や“市民”としてではな

く、一時的・補助的な存在として捉えられている傾向がある。その点においても日韓での制度の違いを感じた。

次に外国人住民支援センターでは、韓国で生活する外国人住民の人々がどんな課題に直面しているのか、それに対してどのような支援が行われているのかを学んだ。まず、外国人住民の人々は、ごみの出し方やビザの申請方法など、日常生活の中のルールや行政手続きの違いに戸惑うことが多いそうだ。また、法律に関する知識を持っていないことも多く、そうした困りごとに対応するため、支援センターでは労働相談、生活相談、医療相談、そして心理相談まで幅広く対応しているという点がとても印象的であった。

さらに、支援センターでは文化フェスティバルやスピーチ大会、サマーキャンプといったイベントも行われており、外国人が自国の文化を発信しながら、他国の人々と交流できる場が積極的に設けられている。こうした取り組みは、外国人の方々が地域に溶け込むうえで、非常に重要であると感じた。中でも注目したのが、韓国語教育や通訳支援がとても充実している点である。言葉の壁によって孤立してしまうことを防ごうとする姿勢が、支援センターのあらゆる活動から伝わってきた。

これらのことは、「なぜ外国人の子どもへの教育が不十分なのか」といった問いにもつながってくると考える。言語や文化の違いによって学校で孤立してしまう子どもたちは、制度だけでなく、社会全体の“受け入れる意識”の欠如が影響しているのではないかと感じた。また、支援センターの活動を通して、「なぜ外国人への差別意識がなくなるのか」というテーマについて改めて考えるきっかけにもなった。外国人労働者は、今や社会の一部であり、地域を支える存在である。しかし、まだ一時的な労働力としてしか見られていない現実がある。そうした背景には、無関心や偏見、そして情報不足があるのではないかと考える。今回訪れた外国人住民支援センターでは、単に支援するだけではなく、外国人とともに社会をつくっていく取り組みが積極的に行われており印象に残った。今回の訪問を通して、外国人労働者や住民を取り巻く環境について学ぶと同時に、日本の課題についても改めて考える機会になったと感じる。

V 各言語圏での活動

1. 英語圏

Through My Study Abroad Experience

KOBAYASHI Saki

(Senior, Department of English)

Why do people want to study abroad? Generally speaking, to improve their English skills, to have new experiences, or to advance their career. Of course, you can learn English in Japan, but the environment is essential if you want to be more fluent in speaking a foreign language. That is why I studied abroad in Australia from February to March in 2024. In this article, I write about three things through my study abroad experience.

First, it gave me confidence. I was afraid to make a mistake, but people could understand me even if my grammar was not perfect. I tried to talk to strangers and asked for help when I got lost. Most people were kind enough to support me with a smile. My host family listened patiently and encouraged me to keep talking. I realized that communication is not only about language, but also about how you express yourself.

Second, it gave me knowledge about Japan. People always asked me “What is Shizuoka most famous for?”, and “What is your favorite part of your hometown?” after saying “Hi” to each other. In addition, someone asked me a kind of political question, but I could not answer. I had never thought deeply about politics in my life. By rethinking Japan or Shizuoka, I found a lot of attractive points, and I came to love my country more.

Third, it gave me motivation. There were many people from other countries, so everyone had a different mother tongue. Do you know these words from Nelson Mandela, who is ex-president in South Africa, “If you talk to a man in a language he understands, that goes to his head. If you talk to him in his language, that goes to his heart”? It refers to speaking to someone in their native language that builds a deeper, more heartfelt connection. Since I felt frustrated when I could not understand what my friends wanted to say, I am interested in learning other languages such as Chinese, Korean, and Hindi. I had tons of time to struggle to say what I meant with host family and friends because my

English skills were not good. Therefore, I decided to study English hard and aim to pass the Eiken pre-1 test by graduation. Now I am taking a Korean class this semester.

To sum up, this experience taught me that confidence, identity, and motivation come from trying to communicate or see outside. What I want to say is that nothing is going to happen if you don't act. Wherever you are, you can learn English, and studying abroad means nothing if you do not make any effort. I believe the most important thing is to have your own goals.

カナダビクトリア語学研修 ～異文化に触れて見えた自分の成長～

英米語学科 3 年 西村 優杜

私は 2025 年 2 月から 1 か月間、カナダのビクトリア大学で語学研修に参加した。本稿では、授業やホームステイ、現地での生活を通して感じた第二言語によるコミュニケーションの難しさや、文化・環境の変化への適応について述べる。

授業は月曜日から金曜日まで全て英語で行われた。洋楽の歌詞や日常表現を題材にしたアクティブな内容で、生徒主体のディスカッション形式が中心であった。与えられたトピックについてグループで意見交換を行い、自分の主張を英語で効果的に伝えることが求められたため、何度も苦戦した。しかし、先生やクラスメイトの表現を積極的に吸収し、次に使えるよう自分のものにしていった。個人プレゼンテーションや定期試験、ライティング練習もあり、短時間で英文を書く力や理解度を確認する機会が多く設けられていた。

特に印象に残っているのが、授業の最終課題として行われたディベートである。「学校に制服は必要か」「幼い子どもに携帯電話は必要か」といったテーマについて賛否に分かれ、英語で意見を述べ合った。聞き手に分かりやすく伝えるためのシンプルな表現を工夫すると同時に、反論のための言い回しや証拠の提示など、多様な文法や語彙を実践的に身につけることができた。

次に、プログラム全体とホームステイを通して学んだ生活面でのスキルについて述べる。最も重要だと感じたのは「とにかく意思を伝える姿勢」である。通学

V. 1. 英語圏

には毎日バスを利用していたが、車内のマナーが日本とは大きく異なり驚くことも多かった。初めて訪れたダウントウンでは、歩道にホームレスの人が横たわっている光景に恐怖を覚えた一方で、見知らぬ人同士が自然に会話する様子や、店員と客が冗談を交わす姿など、人々の距離の近さと温かさが印象的であった。

特に忘れられないのは、ストリートミュージシャンに出会ったときのことである。私が日本人だとわかると、坂本九の「上を向いて歩こう」を流暢な日本語で歌ってくれた。音楽を通じた交流は非常に心に残る体験となった。また、バスやバス停だけでなく大学内でも「Thank you.」という言葉が頻繁に飛び交っており、気さくで笑顔の多い雰囲気が私はとても好きだった。

一方で、困難な場面もあった。友人が携帯電話をバスに置き忘れた際、バス会社に助けを求めたが十分に対応してもらえず苦勞した。そのような状況でも、知っている限りの英語表現を使って必死に状況を説明し、何とか意思を伝えたことは良い経験となった。

ホームステイでは、ホストファミリーが毎日温かく迎えてくれた。夕食後には一緒にテレビを見たり、1日の出来事を話したりと、家族の一員のように接してくれた。バンクーバーへの旅行計画を立てる際には、観光地や宿泊先、注意点などを丁寧に教えてくれた。彼らが私を受け入れてくれたことに深く感謝している。

帰国後、1か月という期間は短かったと感じた。しかし現地では、日本人クラスメイトやルームメイトの存在に刺激を受け、「追いつきたい」という焦りもあり、長く感じる瞬間も多かった。日本で英語を学ぶのと最も異なる点は、「英語を使わざるを得ない環境で、実際に英語で生きる感覚を体験できること」である。多様な価値観や生活習慣に触れる中で、異文化との差異だけでなく共通点にも気づき、自国文化への理解も深まった。

留学中の一瞬一瞬の体験は、これからも私の大切な思い出であり糧となる。今回の語学研修で得た経験を生かし、今後も積極的に挑戦していきたい。

2. スペイン語圏

語学研修を通して見えたスペインの暮らし

グローバルコミュニケーション学科3年 後藤 祐輔

今回のスペイン語学研修は、語学力の向上だけでなく、自分自身の考え方や価値観を大きく見直すきっかけとなった経験であった。研修に参加する前の私は、スペイン語を教室で学ぶ勉強として捉えており、文法を正しく使うことや間違えないことを強く意識していた。

実際にスペインに到着した当初は、あいさつや自己紹介といった非常に簡単な会話でさえ聞き取ることができず、自分の言いたいこともすぐには言葉として出てこなかった。相手の話を聞いても、知っている単語が頭の中でつながらず、会話についていけない場面が多かった。また、日本語で考えてからスペイン語に直そうとしてしまい、返答が遅れてしまうこともあった。そのたびに、学校で習ったことが全くと言っていいほど活かすことができず、自分がここまで話せないのかと語学力の未熟さを強く実感した。

しかし、生活の中でホストファミリーと過ごす時間を重ねるうちに、少しずつ変化が生まれた。最初は翻訳アプリに頼らなければ成り立たなかった会話も、日常的なやり取りを繰り返す中で、次第にアプリを使わずに理解できるようになっていった。完璧な表現でなくても、知っている単語を使い、身振り手振りを交えて伝えることで、相手がしっかり受け止めてくれることを知った。この経験を通して、語学は正確さよりも「使うこと」が何よりも重要であり、実際のコミュニケーションの中で身につけていくものだ実感した。

また、語学研修を通して、文化や価値観の違いを肌で感じる場面も多くあった。中でも特に印象に残っているのは、日曜日の街の様子である。日曜日になると、スペインではほとんどの店が休みになり、デパートの中に入っている店舗でさえ閉まっていた。日本では、休日こそ買い物に出かける人が多いため、この光景は非常に新鮮だった。その一方で街に出ると、夫婦やカップル、家族連れが一緒に出かけたり、散歩をしたり、港で日向ぼっこをして過ごしている姿が見られた。

V. 2. スペイン語圏

さらに、バルのテラス席では、地元の人々が飲み物を片手に会話を楽しみながら、ゆったりとした時間を過ごしており、休日の過ごし方そのものにスペインらしさを感じた。

このような光景から、スペインでは効率や利便性よりも、人とのつながりや家族と過ごす時間を大切にしている価値観が社会全体に根付いていると感じた。日本では、忙しさの中で時間に追われる生活が当たり前になっているが、スペインでの生活を通して、時間の使い方や休日の意味について改めて考えさせられた。

帰国後、この語学研修を振り返ると、語学に対する姿勢が大きく変わったことを実感している。以前は間違えることを恐れて発言を控えてしまうことが多かったが、今では多少間違ってもまずは話してみようと思えるようになった。また、スペイン語を学ぶことが目的ではなく、スペイン語を通して人と関わることが本当の意味だと感じるようになった。

今回のスペイン語学研修で得た経験は、語学学習だけでなく、異文化理解や自分自身の成長にもつながるものだった。この経験を今後の学習や生活に生かし、積極的に新しい価値観や人との出会いに向き合っていきたい。

スペインでの学び

グローバルコミュニケーション学科3年 小柳 幸輝

私がスペインに到着してまず驚いたのは、人々の時間の流れが日本とは全く異なることでした。日本では、時間は「守るべきもの」であり、効率的にタスクをこなすための指標です。しかしスペインでは、時間は人生を楽しむための器として捉えられていたと思います。

象徴的だったのは、長時間の昼食の時間です。彼らにとって食事は単なる栄養補給ではなく、家族や友人と対話し、絆を深めるための神聖な儀式でした。最初は「もっと早く済ませれば他のことができるのに」と焦りを感じていた私ですが、次第に、急いで次の予定に向かうことよりも、目の前の相手と笑い合う時間の方が、人生における「投資価値」が高いことに気づきました。

また、有名な Mañana という言葉の裏にある精神も学びました。これは単なる先延ばしではなく、「変えられない未来を憂うより、今の心の平穏を大切にする」という知恵です。この考え方に触れたことで、私は「何かに追われる時間」から解放され、自分で時間を「コントロールし、味わう」感覚を身につけることができました。

もう一つの大きな学びは、スペインの人々が持つ圧倒的な「人間愛」です。スペインでは、バス停で隣り合った見知らぬ人同士が世間話を始めたり、迷っている私を見かけると誰かが必ず声をかけてくれたりします。特に印象深かったのは、現地の家庭に招かれた際、彼らが私を「留学生」という一過性の客としてではなく、最初から「家族の一員」として接してくれたことです。彼らの温かさは、相手を評価したり選別したりするのではなく、「今ここにいる存在を丸ごと受け入れる」という深い自己肯定感と他者への信頼に基づいているように感じました。この精神は心細い私をととても救ってくれる要因ともなりました。物理的な距離の近さは、心の距離の近さでもありました。相手の感情に共感し、自分の感情も素直に出す。こうした嘘のない人間関係の中に身を置くことで、私は「自分を良く見せよう」という肩の力が抜け、ありのままの自分で他者と向き合う勇気をもらいました。

スペイン留学は、私に「豊かな人生とは、効率的な人生のことではない」という真理を教えてくれました。大切なのは、時間を止めてでも守りたい人間関係を築くこと。そして、他者に対して心を開くということだと感じました。

この学びは、日本に帰国してからも私の支えとなっています。どれほど忙しい日々の中でも、スペインで学んだ「心の余裕」と「人への温かい眼差し」を忘れず、周囲の人と共に今を慈しみながら歩んでいきたいと考えています。

言葉の壁を越えて学んだこと

—スペイン・アリカンテ語学研修を通して—

グローバルコミュニケーション学科3年 永井 彩仁佳

私は昨年、スペイン・アリカンテで行われた語学研修に参加し、約一か月間現地で生活した。この研修は、語学力の向上を目的としたものであったが、結果としてそれ以上に多くの学びや気づきを得る経験となった。海外で生活すること自体が初めてであり、スペイン語の能力も決して高いとは言えない状態での参加だったため、研修前は期待と同時に大きな不安を抱えていた。

実際に現地での生活が始まると、自分の語学力の低さを痛感する場面が数多くあった。語学学校の授業はすべてスペイン語で行われ、先生の説明が理解できず、周囲の学生についていけないと感じることもあった。また、ホストファミリーとの会話では、簡単な日常会話であっても聞き取れないことが多く、自分の言いたいことをうまく伝えられないもどかしさを何度も感じた。買い物や外食といった日常生活の中でも、言葉が通じないことへの不安から、行動すること自体をためらってしまう場面もあった。

しかし、そのような状況の中で、私は次第に「言葉が完璧でなくても、伝えようとする姿勢があればコミュニケーションは成り立つ」ということに気づくようになった。分からないからと黙り込むのではなく、身振り手振りや表情を使ったり、知っている単語を組み合わせたりをしながら、自分なりに工夫して相手に伝えようとした。その結果、少しずつ相手の反応が変わり、会話が成り立つようになっていった。この経験を通して、コミュニケーションとは単に言語能力の問題ではなく、相手と関わろうとする姿勢そのものが重要であると実感した。また、アリカンテでの生活を通して、異文化に触れることの大切さも学んだ。スペインの人々はとても明るく、初対面であっても積極的に話しかけてくれる人が多かった。自分の拙いスペイン語にも耳を傾け、理解しようとしてくれる姿勢が印象的だった。そのような経験を重ねる中で、自分自身も間違いを恐れずに話すことができるよ

うになり、以前よりも積極的に人と関わるようになったと感じている。さらに、この語学研修は自分の価値観を見直すきっかけにもなった。日本では、正確さや失敗しないことが重視される場面が多いが、スペインでは「まずやってみる」「伝えようとする事」が大切にされているように感じた。その違いに触れたことで、完璧を求めすぎて行動できなくなる自分の姿勢を見直すようになり、挑戦することの大切さを学ぶことができた。

この研修を通して得た学びは、語学力の向上だけにとどまらない。未知の環境に身を置き、自分で考え行動する力や、相手を理解しようとする姿勢の重要性を実感することができた。スペイン・アリカンテでの生活は、不安や困難も多かったが、それ以上に新しい刺激に満ちた貴重な経験であった。この経験を今後の大学生活や将来の進路に活かし、多様な価値観を尊重しながら人と関わってきたいと考えている。

スペイン留学での経験

グローバルコミュニケーション学科 3 年 中村 祐大

私は以前から海外に行くことに強い興味を持っていた。学校でスペイン語を学ぶ中で、言語だけでなく、スペインの暮らしや人々の人柄にも関心を持つようになり、実際に現地で生活してみたいと考えるようになった。また、異文化との交流を通して、自分自身の経験を増やし、視野を広げたいという思いから、今回のスペイン留学に参加した。留学前は、現地の人との交流ができることを楽しみにしていた一方で、初めての海外であったため、スペイン語がどこまで通じるのか、生活の違いに適應できるのかという不安もあった。

今回の留学は一か月間で、アリカンテ大学に通った。平日は月曜日から金曜日まで、午前9時から12時までスペイン語の授業を受けた。クラスにはさまざまな国から来た学生が在籍しており、授業中や日常生活では英語やスペイン語を使い分けながら学習を行った。スペイン語をスペイン語で学ぶ授業形式は非常に難しく、最初は理解できないことも多かったが、周囲の学生と助け合いながら、必

V. 2. スペイン語圏

死に授業についていくよう努力した。

留学中に特に印象に残っているのは、現地での普段の生活と人々との関わりである。私はホームステイをし、友人と同じ部屋でホストマザーと一緒に生活した。滞在当初は、ホストマザーの言っていることがほとんど分からず、英語も通じなかったため、翻訳機を使いながら何とか意思疎通を図っていた。しかし、日々の生活を共にする中で、少しずつ会話の内容が理解できるようになり、自分の成長を実感することができた。

また、現地では毎日のように外出し、さまざまな場所を訪れた。最初はレストランでの注文方法も分からず戸惑ったが、片言でもスペイン語で話そうとすると、店員の方々がとても親切に対応してくれた。食事中にも声をかけてくれるなど、スペイン人の温かさや優しさを強く感じた。街全体の雰囲気も明るく、日本にはあまり見られないラフさがあり、時間を気にしすぎず、毎日をゆっくり楽しむ生活スタイルに魅力を感じた。休日にはバルセロナやマドリードにも足を運び、電車やバスのチケットを自分で購入するなど、慣れないことに苦戦しながらも、現地の人に助けられながら行動することができた。これらの都市では、日本との文化の違いをより強く実感した。

スペインでの生活を通して、私の価値観は大きく変化した。日本では当たり前だと思っていたことが、決して当たり前ではないと気づかされたからである。例えば、トイレの清潔さ、食事の時間、コンビニの存在、日曜日に多くの店が閉まっていることなど、日常の些細な違いに驚くことが多かった。この留学を通して、言語能力だけでなく、物事を多角的に捉える視点を身につけることができたと感じている。

今回のスペイン留学は、私にとって語学力の向上以上に、自分の価値観や考え方を見直す貴重な機会となった。異文化の中で生活することで、日本を客観的に見ることができ、視野が広がったと感じている。今後は、この経験を活かし、語学学習を継続するとともに、異なる文化や価値観を持つ人々と積極的に関わっていきたい。

語学研修を通じた自己成長

グローバルコミュニケーション学科 3 年 西澤 獅道

アリカント大学への語学研修を通して、私は語学力の向上だけでなく、人との関わり方や物事に対する考え方の面で大きく自己成長することができたと感じている。

特に印象に残っているのは、ホストファミリーとの生活、大学で行われた交流アクティビティ、そしてグラナダへの旅行での経験である。ホストファミリーとの生活は、私にとって最も日常的でありながら学びの多い時間であった。語学研修当初は、日本とは異なる生活スタイルや食生活などに慣れず少し苦勞をした。また、自分がこれまで学んできたスペイン語が正しく伝わるか不安で自分から話すことができず、会話に消極的になってしまうこともあった。しかし、ホストファミリーは私のつたないスペイン語にも根気強く耳を傾け、時には身振り手振りを交えながら会話を続けてくれたり、共に生活をしていた留学生の助けを借りながら生活していた。また、私のホストファミリーの旦那さんはフランス人であり、新たな言語を学ぶ難しさなどを理解してくれていた。私はその姿勢に支えられ、次第に「間違いを恐れずに話すことが大切だ」と考えるようになった。時には自分のスペイン語を褒めてくれ、とてもうれしかったのを覚えている。食事の時間には、スペインの家庭料理を囲みながら文化や習慣、日本との違いについて話す機会が多くあり、異文化を身近に感じることができた。この経験を通して、相手を理解しようとする姿勢や、多様な価値観を受け入れる柔軟さが身についたと感じている。

大学で行われた交流会では、現地で日本語を学んでいるスペイン人の方と交流する機会があった。最初は初対面であり会話があまり弾まなかったが、自分からスペイン人の方の名前を漢字で作る提案をするなど、積極的に話しかけることで少しずつ会話が弾み、充実した交流会となった。自分の趣味や大学生活、両国での違いについて話す中で、国が違って共感できる部分や驚きが多いことに気づき、人とつながる楽しさを実感した。この経験は、以前よりも自分から行動を起

こす自信につながったと感じている。また、大学のアクティビティの一つであるグラナダ旅行も強く印象に残っている。旅行ではアルハンブラ宮殿を訪れ、イスラム文化とキリスト教文化が混ざり合ったスペインの歴史を実際に体感することができた。

この語学研修を通して、私は語学力以上に、挑戦する姿勢や人と関わる力を身につけることができたと考えている。この経験は、今後の大学生活や将来、社会人としても大きな支えになると思う。

異文化経験とコミュニケーション

グローバルコミュニケーション学科3年 宮崎 亮瑛

私はスペインに一月間ホームステイを行い、異文化の中で生活をする経験を通して、自身の価値観やコミュニケーションの取り方を見直す機会を得た。渡航前は異文化理解は知識として学ぶものだと考えており、授業で扱う文化や国民性を理解していれば現地では問題は生じないと思った。しかし実際には知識としての理解と生活の中で感じる理解には違いがあることを実感した。

渡航前は、スペイン語の運用能力に対する不安が大きかった。そのため、間違いを避ける意識が強く発言を控えることが多々あった。しかし、ホストファミリーと日常会話を重ねる中で、正確さより意思を伝えようとすることの重要性に気付いた。文法や単語のミスがあっても、意思を伝えようとする姿勢が関係構築につながることを学び、主体的に発話することが身についた。間違いを恐れず話しかけることにより、信頼関係の構築につながったと感じた。また、生活リズムや価値観の差は異文化の理解を深めるための重要な要素だった。

特に私が戸惑ってしまった経験は主に2つある。1つ目は、食事のスタイルが日本とかなり異なったことだ。朝食がフランスパン2枚といった、量が少なかった。また昼食と夕食の時間が遅く、授業中や家で課題に取り組む際に、空腹で集中力が続かないということがあった。2つ目は、コミュニケーションのスタイルの違いである。会話の際に身振り手振りが多く、積極的に話しかけてくるように

感じた。日本ではある程度の距離が保たれるが、隣人にあった際には相手から話しかけてくれることがあり、他にも街中で「あなたは日本人？日本語勉強しているところだよ！」と話しかけられることがあった。そのため、スペイン人は思った以上にフレンドリーということがわかった。頭では文化の違いを理解していても身体的にはすぐに変化に対応することができなかった。さらに、異文化環境において、自分から行動し意思決定を行う主体性が必要であることを実感した。交通機関の利用や買い物など、周囲に頼ることができない状況で判断を迫られる場面が多く、問題解決能力と適応力が養われた。

ホームステイを通して、私は異文化の理解は知識の習得だけでなく、違和感や感じた戸惑いを含めてお互いに向き合う姿勢が重要だということを学んだ。今後はこの経験を活かし、スペイン語を学ぶ際に言語だけでなく、実体験と結び付けながらスペインの文化や社会についても学んでいきたいと思った。

アリカンテ語学研修で得たもの

グローバルコミュニケーション学科3年 吉添 結衣

スペイン・アリカンテでの一ヶ月間の語学研修を終え、私は当初想定していた以上に多くの学びと気づきを得ることができたと感じている。研修前に掲げていた目標は、日常会話レベルのスペイン語を身につけること、そして観光客としてではなく「言語を学ぶ者」として現地の生活を体験することであった。しかし、実際に研修を終えた今、語学力の向上そのもの以上に、異文化の中で人と関わりながら生活した経験や、自分自身の価値観の変化が最も強く印象に残っている。

まず、私がこの研修を通して得た大きな成果の一つは、アリカンテという街そのものと深く関わることができた点である。温暖な気候や美しい海岸線といった表面的な魅力だけでなく、人々の穏やかで親しみやすい気質が、私の滞在を支えてくれた。スペイン語が十分に話せない私に対しても、多くの人が言葉を選び、身振り手振りを交えながら根気強く接してくれた。一方で、アジア人であることを理由に冷たい態度を取られる場面に直面することもあり、異文化社会が必ずし

V. 2. スペイン語圏

も理想的な側面だけで成り立っているわけではないことも実感した。しかし、それ以上に、レストランやバーの店員と英語や簡単なスペイン語を交えて会話を重ね、再訪した際には挨拶やハグを交わすような関係性を築けた経験は、日本では得難いものであった。こうした交流を通して、私は言語を「正確に話すべき学習対象」ではなく、「不完全でも人とつながるための道具」として捉えられるようになったのである。

次に、語学力以上に価値があったと感じているのが、海外で一ヶ月間生活したという経験そのものである。日本では、大学の授業やアルバイトに追われ、常に時間や役割に縛られた生活を送っていた。しかし、研修期間中はそれらから一度距離を置き、異なる文化の中で「生活者」として過ごす時間を持つことができた。食事の時間帯や生活リズム、人々の物事に対する考え方の違いに戸惑う場面も多かったが、その中で特に印象的だったのが公共交通機関の文化の違いである。ホストマザーとバス停でバスを待ち、到着と同時に手を挙げて合図を送ったにもかかわらず、バスが止まらず通過してしまった出来事は、日本の「時間通り・正確であること」がいかに特異な価値観であるかを実感させた。この経験を通して、私は日本社会の真面目さや効率性を再認識すると同時に、スペインのような「多少の不完全さを許容する文化」が、日本人の生きづらさを和らげる可能性もあるのではないかと考えるようになった。

この語学研修を通して私が得たものは、スペイン語の知識だけではなく、異なる価値観を受け入れ、自ら一步踏み出して人と関わる勇気である。言葉が完璧でなくても伝えようとする姿勢があれば、人との距離は縮まるということ、私は実体験として学んだ。この経験を今後の語学学習に活かすとともに、海外に挑戦することへの不安を抱える後輩たちにも伝えていきたい。アリカンテでの一ヶ月間は、私にとって単なる留学経験ではなく、今後の人生における価値観の基盤を形作る重要な時間となった。

スペイン語学研修を通して得られたもの

グローバルコミュニケーション学科3年 依田 彩花

私は2025年1月31日から3月2日まで、スペインのアリカンテ大学で語学研修に参加した。初めての海外渡航であり、初めて飛行機に乗り、初めて口にする食べ物や目にする景色など、すべてが新鮮な体験だった。出発前は不安もあったが、それ以上に期待が大きく、緊張よりもわくわくした気持ちだった。

このスペイン語学研修を通して、得られたものは二つある。一つ目は、スペイン人の物事に対するおおらかな考え方である。授業内の会話練習では、文法や発音に誤りがあっても、間違いを指摘する前に「伝えようとしたこと」そのものを評価し、肯定的に受け止めてくれる場面が多く見られた。完璧さや正解を求め、間違いを恐れて発言をためらいがちな日本の学習環境とは異なり、まずは話してみることに、失敗を恐れずに挑戦することの重要性を強く実感した。この経験から、失敗しながら少しずつ修正し、前に進んでいく姿勢こそが大事だと学んだ。

二つ目は、日本人の三人の友人との出会いである。異国の地での生活は楽しい反面、不安や戸惑いも多く、その中で三人の存在は私にとって大きな支えとなった。研修期間中は日常生活を共にし、現地での体験や学習に関する悩みだけでなく、将来の夢やについても語り合った。学習面だけでなく精神面でも互いに支え合える関係を築くことができたと感じている。さらに、研修終了後に日本へ帰国してからも交流は続いており、一緒に旅行へ出かけたり、定期的に会って近況を報告し合ったりするなど、今も親しい関係が続いている。語学研修という一時的な経験にとどまらず、今後の人生においても大切にしていきたい人間関係を築く機会になった。三人には「出会ってくれて本当にありがとう」と伝えたい。

たった一か月という短い期間だったが、この研修は私の価値観や将来の考え方に大きな影響を与えた。将来はスペインに移住し、言語だけでなく文化や人々の暮らしをより深く知っていきたくて考えている。この語学研修で得た経験と出会いを糧に、これからも挑戦を続けていきたい。

常葉大学 2024年度春期 (2025年2月)

スペイン語学研修



研修先はバレンシア州立のアリカンテ大学（バレンシア州）です。調スパニッシュコミュニケーションズの日本人スタッフが日本出発から同行し、最初の1週間のスペイン滞在をサポートします。大学でのスペイン語の授業のほか、日本語を学ぶスペイン人との交流会などの文化アクティビティ、またエクスカージョンを実施します。

アリカンテ大学 スペイン語コース（スペイン・バレンシア州）

	概要
研修期間	2025年1月31日（金）～3月2日（日）／31日間
研修先	バレンシア州 アリカンテ アリカンテ大学スペイン語コース
宿泊方法	ホームステイ（個室／3食付き）
定員／締切り	35名／11月7日（木）



地中海沿いにあるアリカンテは冬でも比較的溫暖な気候です。広大なキャンパスがあるアリカンテ大学はスペインにおいて近代的な大学として知られています。

外国人学生と一緒にスペイン語コース（4週間）を受講します。

<p>外国人学生と一緒に受講する大学の授業 *** アリカンテ大学言語教育センターが開講するレベル別のクラスで、外国人学生と1日3時間のスペイン語コースを受講します。</p>	 <p>ホームステイ *** ホームステイを体験することで、スペインに対する理解を深めることができ、またスペイン語に早く慣れることができます。*2/1は学生寮（二人部屋）に滞在します。</p>	<p>日本人スタッフ同行 *** 日本出発からアリカンテ到着まで日本人スタッフが同行します。到着から1週間、スペインでの生活をサポートしますので、海外が初めての方でも安心です。</p>	 <p>文化アクティビティ *** 「スペイン料理教室」「日本語を学ぶスペイン人学生との交流会」等、アリカンテ大学言語教育センターが様々な文化アクティビティを実施します（一部有料）。</p>	<p>バレンシア州アリカンテ *** 地中海沿いに面した「アリカンテ」はバレンシア州第2の都市です。2月の平均最高気温は17度、最低は8度と溫暖な気候です。</p> 
-------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



詳細は説明会でご案内します：10月1日（火）16:45～18:15（5限目） 場所：A305教室
春休みに個人でスペイン、またはメキシコ留学を検討されている方も説明会の後（または後日、メール・お電話で）別途相談を承りますので、説明会にご参加ください。



- * 対象は大学でスペイン語授業を履修している、または履修していた大学生です（複数の大学の学生が参加する語学研修です）。
- * 行程、研修費用等の詳細は募集説明会の際にご案内します。
- * 研修費用のお支払い先は旅行会社である調スエーエートラベルになります。

- 旅行企画・実施 株式会社エスティーエートラベル（観光庁長官登録旅行業937号）
〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷2-7-2 幡ヶ谷ニューセンタービル6階 T E L ; 03-4361-2706
総合旅行業事務取扱管理者 廣田 浩二 担当 尾崎 雅代

- 企画協力（研修内容の問合せ） 株式会社スパニッシュコミュニケーションズ SpanishCommunications
〒140-0015 東京都品川区西大井2-14-2, 7F T E L ; 03-5709-9251 ✉ info@spacom.jp

2025 年度 スペイン・ラテンアメリカ特別研究 サブレポート抄録

2025 年度の「スペイン・ラテンアメリカ特別研究」では、6 人の受講者がサブレポートの執筆に取り組んだ。以下、抄録とキーワードを紹介する。

担当：増井 実子

なぜフラメンコは世界中の人々を魅了するのか — 一人の移動や現代音楽から紐解く —

グローバルコミュニケーション学科 4 年 大木 萌々華

本稿では、フラメンコについて人の移動や現代音楽の視点から整理した。そして、なぜフラメンコが世界中の人々を魅了するのかについて考察した。アンダルシア音楽にスペインを訪れた多様な民族が各々の文化を融合させたことで、フラメンコが形成された。現代においてもジャズやロックの風味を加えたフラメンコが誕生している。時代や地域ごとに多様なジャンルが混ざることによって、多様性あふれるフラメンコに発展した。また、なぜ日本のフラメンコ人口が世界でも有数の規模にまで拡大したのかについても考察した。本稿は、フラメンコのイメージに「多様性」が加わり、多文化共生社会について考えるきっかけとなることを目指している。

キーワード：フラメンコ、ミの魔法、フラメンコフュージョン、多様性、
多文化共生社会

スペイン警察の分権化とカタルーニャ自治州警察と国家警察との関係 —2017年カタルーニャ独立住民投票から読み解く—

グローバルコミュニケーション学科4年 木村 菜々美

本稿は、スペインにおける警察制度に着目し、国家警察（Policía Nacional）とカタルーニャ自治州警察（Mossos d'Esquadra）の関係性を、2017年のカタルーニャ独立住民投票を中心事例として分析したものである。国家警察と自治州警察の権限の違いと特色について明らかにし、Mossos d'Esquadraの歴史的発展と地域的・文化的アイデンティティを検討した。Mossosが自治の象徴として果たしてきた役割を示した上で、2017年に起きた独立住民投票において見られた警察組織同士の対立と、Mossos内部に生じた葛藤を分析し、分権体制下における警察の問題を浮き彫りにした。また、住民投票後の変化を踏まえて、両警察の関係改善の動向と今後の課題を検討した。本研究は、警察という治安機関が政治的・文化的対立の中で果たす役割を検討することで、分権国家における治安機構の可能性と限界を示すことを目的とする。

キーワード：Mossos d'Esquadra、Policía Nacional、独立住民投票

サンティアゴ巡礼における宗教的聖遺物と歴史を明確にする科学の対立

グローバルコミュニケーション学科4年 久保山 愛菜

本稿では、サンティアゴ巡礼の聖遺物に焦点を当て、聖遺物の役割や信仰の背景について整理した。様々な宗教的聖遺物を事例に挙げて、宗教の信仰心と歴史を明確にする科学の対立について考察した。聖遺物を管理する地域によって、聖遺物の役割が異なり、宗教と科学の間に対立や共存、融合の関係が成り立つことを示した。その背景として、国家と宗教の関係から聖遺物に対する法律の制度的

対応についても言及する。本稿は、信仰と科学の対立を超えた相補的な理解の可能性を検討するものである。

キーワード：宗教的聖遺物、聖ヤコブ、サンティアゴ巡礼、伝承、神

スペイン、ゲイマールのピラミッド論争から見る考古学の難しさ

グローバルコミュニケーション学科4年 清水 梨里

本稿は、カナリア諸島テネリフェ島ゲイマールにある階段状石積み構造物をめぐるピラミッド論争を取り上げ、考古学における実証性の難しさと、学術的見解と社会のズレについて考察する。ゲイマールの構造物は、トール・ハイエルダールによってピラミッドである可能性が指摘されたが、現在では農業用石垣説が有力とされている。しかし、ゲイマール民族学公園・植物園では、ピラミッド説を前面に出した展示が行われている。本稿では、この状況をロマン性や観光資源としての価値を含めて考察し、学術と社会が求めるものは必ずしも一致しないことを明らかにする。

キーワード：スペイン、ゲイマール、ピラミッド、考古学

スペイン王室一統合の象徴か、多様なアイデンティティの対立点かー

グローバルコミュニケーション学科4年 中村 真実

建築家アントニ・ガウディや画家サルバドール・ダリに代表される豊かな芸術、FCバルセロナに象徴されるサッカーやバスケットボールなどの国際的に評価されるスポーツ、さらに経済や商業の中心地としての機能、などカタルーニャ特にバルセロナは、多様な分野において魅力を有している。その結果、世界的な観光

V. 2. スペイン語圏

地として人気を誇り、スペインを象徴する都市として国際社会において存在感を示してきた。しかし一方で、カタルーニャは、歴史的・言語的・文化的に多様な地域で構成されている国家スペインにおいて、独自の地域アイデンティティを背景に、スペインからの独立を志向する政治的・社会的な運動を展開してきた。

スペインでは、21世紀に入って以降、自治の拡大や独立をめぐる議論が国内外の注目を集め、国家の在り方そのものが問い直される状況となっている。王室という制度が多様性を包摂する役割を果たすのか、排除や対立を生み出してしまうのか。このような問題意識のもと、多様なアイデンティティを内包する国家において、国家の象徴とされる国王の意味とは何か、スペイン王室と地域アイデンティティ、特にカタルーニャに焦点を置き、検討することを本研究の目的とする。

キーワード：国王、地域アイデンティティ、仲介者、カタルーニャ

スペインの観光被害とその後の対策 — 今日本が学ぶべき観光客への向き合い方 —

グローバルコミュニケーション学科4年 望月 来瞳

日本やスペインのような観光大国には、日々大勢の外国人観光客が訪れる。特に、日本の京都、スペインのバルセロナといった有名な都市では、観光客が集中している。国の経済は成長を続けている一方で、現地では地元住民の怒りの声広がっている。マナーの悪い観光客に対し地元住民が抱く「観光恐怖症」、短期で賃貸住宅を貸し出す「Airbnb」、住宅の価格高騰により立ち退きを余儀なくされる「ジェントリフィケーション」などが、その具体例である。以上の問題を抱えながら、スペインはどのような観光対策を掲示したのだろうか。バルセロナ市などの取り組みを参考に、日本が見習うべき姿勢を探っていく。

キーワード：オーバーツーリズム、観光恐怖症、ジェントリフィケーション、Airbnb、ゾーニング

3. ポルトガル語圏

日本語とポルトガル語の親密性

—日本からポルトガルにもたらされた単語—

グローバルコミュニケーション学科3年 植田 晴名

1. はじめに

日本語とポルトガル語は、言語系統や文字の種類、文法構造などの点において、かけ離れた言語であると考える人も多くいるだろうが、ポルトガル語研修で実際にリスボンに滞在したことにより、いくつかの点で類似点を見つけた。日本とポルトガルは古くから交流があり 16 世紀から 17 世紀初頭には南蛮貿易が行われ、様々な西洋文化が日本に持ち込まれた。以前から日本語にポルトガル語が大きな影響を与えたことは知識としてはあった。だが、ポルトガル語の中に日本語由来の言葉があることを語学学校の先生から教わり、衝撃を受けた。文化交流は一方的ではなく、互いに影響を与え合うのは当然である。しかし、私は日本語由来のポルトガル語があるなど、つゆにも考えていなかった。とても興味のあるテーマであると感じたため、今回は日本語とポルトガル語の類似点について述べていく。

2. 日本とポルトガルの交流

日本とポルトガルの関係が始まったのは、1543 年 8 月 25 日 (旧暦)、種子島にポルトガル商人の乗った中国船が漂着したことがきっかけとされている。日本はそれまで、中国や朝鮮などのアジア諸国との交流はあったが、西洋との交流は、ポルトガルが初めてであった。リスボンのベレン地区にある「発見のモニュメント」付近には、世界地図があり、ポルトガルがその国をいつ「発見」したのかということが描かれている。しかし、そこにはポルトガル人が種子島に漂着した 1543 年ではなく、ポルトガル船が豊後に漂着したとされる

図1「発見のモニュメント」近くの世界地図に描かれた日本



V. 3. ポルトガル語圏

1541年と記載されている。日本とポルトガルの間にある歴史認識の差異が見て取れた。日本の歴史認識の観点から見ると、日本とポルトガルが交流を持つようになったきっかけは、ポルトガル人の乗った明船が種子島に漂着し、種子島島主種子島時尙は、ポルトガル商人が所有していた見慣れぬ火器に興味を示し、金2,000両で2挺を譲り受けたという出来事が交流の始まりとされている。これを機に、ポルトガルとの南蛮貿易が始まり、この交易は日本にはない西洋文化や文物をもたらした。南蛮貿易とは、日本とポルトガルの直接的な交易ではなく、ポルトガルはマカオを拠点として、中国から生糸などを買い、それを日本に持ち込み、日本の銀と交換する間接的な交易(中継貿易)のことを言う。その交流の一環として、日本にキリスト教の宣教師たちが来日し、九州地方を中心として布教活動を行った。キリスト教の布教活動が進むと、セミナリオやコレジオと呼ばれる教育機関も創設され、異文化交流がより進んだ。例として、カップ {capa: 上着}、タバコ {tabaco}、オンブ {ombro: 腕}などが挙げられる。日本語の中に、ポルトガル語由来の言葉が多数あり、外来語というのは基本カタカナで表記されるものが多いが、ポルトガル語由来の言葉はひらがなや漢字で表記されるものも多く、日本の生活に古くからなじんでいたことが分かる。

3. ポルトガル語の中にある日本語

日本語にポルトガル語由来のものが多くあることは前述したが、ポルトガル語の中にも日本語由来の単語があることを知っているだろうか。私はリスボンの語学学校の先生に教えてもらうまで知らなかったが、ポルトガルでは、よく知られているらしい。

・Biombo{ 屏風 }

日本で生まれた屏風が、ポルトガルに持ち込まれ、少し形や発音は変化しているが、ほとんど同じままの言葉で使われている。華やかな装飾が施されているものが多く、用途も日本と同じく、仕切りとして使われていた。宮殿や博物館に訪れると、かなりの確率で屏風が使用されており、古くからこの日本の文化がポルトガルで広まっていたことがわかる。アジュダ宮殿 {Palácio da Ajuda} では、様々な種類のBiombo{ 屏風 }が見られた。日本画のようにも見える絵が描かれた

Biombo もあった。グルベンキアン美術館でも Biombo が展示されていた。サイズが大きく豪華であり、特別な機会に使用されたのではないだろうか。リスボンにある、国立古美術館には「南蛮屏風」が展示されており、当時の日本とポルトガルの交流を知れる、貴重な資料である。初めて南蛮屏風を目にしたが、キリスト教が日本に広まっている様子や、様々な動物が輸入されている様子も描かれていた。

図2 アジュダ宮殿の Biombo



図3 グルベンキアン美術館の Biombo



• Catana

日本刀を意味する刀という言葉が、ポルトガルに伝わり、現在でも使われている。そのままの日本刀という意味ではなく、斧や鉋などの刃物という意味で使用される。この単語を実際にポルトガルで聞く機会はなかったが、刀が武器としてポルトガルに輸入されたのか、はたまた美術品として輸入されたのかが気になった。

4. ポルトガル語と日本語に見られる類似点

ある授業で、語学学校の先生からこんな面白い話を聞いた。「ポルトガル語と日本語は、文字の種類も文法も異なっていて、学習するのが大変だと思う。だけど、ポルトガルと日本は古くから交流のある国で、少しだけ言語面でも似ている

V. 3. ポルトガル語圏

部分があると思う。例えば、“obrigado”と『ありがとう』って響きが似ていると感じない？ポルトガル人は、日本語の『ありがとう』という言葉は、ポルトガル語の“obrigado”からきていると思っている。」この話を聞いて、私は興味を持った。確かに音が似ているし、古くから交流のある国なのだから、影響されていてもおかしくないと感じた。日本に帰ってから調べてみると、実際にそのような説もたてられていた。しかし、日本語の「ありがとう」は「有り難し」という言葉が語源であり、「あるのが難しい」「珍しい」という意味から、「ありがとう」という言葉ができた。ポルトガル語の“obrigado”は動詞の“obrigar”（義務付ける）の過去分詞が語源である。そのため、相手に感謝を感じ、それを返すべき義務があるという意味から、現在の「ありがとう」という意味で使われるようになったと言われている。語源から考えると、日本語とポルトガル語に直接的な関連性があるかと言われると、信ぴょう性に欠けるが、ポルトガル人の大半が、この説を信じているというのは、面白いと感じた。

5. おわりに

ポルトガルに1ヶ月間語学研修で滞在したことで、日本とポルトガルは遠く離れた国であるが、深いつながりがあり、文化面で多様な交流がされてきたことを実感した。日本語の中にはたくさんのポルトガル語由来のものがあり、それをポルトガルの人に教えると、興味を示してくれた。ポルトガル語を学んでいる日本人として、この交流をこれからも繋げていきたいと感じた。

参考文献

黒田日出男（2021）『図説 日本史便覧』帝国書院編集部。

『意外と知らないポルトガル語の「obrigado」の本当の意味』（2025年3月30日閲覧）<https://www.porgoru.com/2751.html>

『歴史的な関係（2013年 日本・ポルトガル交流470周年）』（2025年4月5日閲覧）https://www.pt.emb-japan.go.jp/itpr_ja/00_000774.html

全日本ポルトガル語弁論大会への挑戦

グローバルコミュニケーション学科 3 年 植田 晴名

私は全日本ポルトガル語弁論大会に出場し、ポルトガルと日本の文化交流について弁論を行った。弁論のタイトルは、屏風から見る文化交流『Intercâmbio cultural através do biombo』である。このテーマは、2025 年 2 月に語学研修でポルトガルのリスボンを訪れた際の体験から選んだ。語学学校のアクティビティの一環で私は学校の先生に連れられ、リスボンにあるグルベンキアン美術館を訪れた。そこには、日本から伝わった屏風が展示されており、先生から「これは日本語の『屏風』が、そのままの発音や意味を保持してポルトガル語になった」と教えられた。これまで、ポルトガル語が日本語に取り入れられた例は数多く知っていたが、日本語がポルトガル語になった例は知らなかったため、非常に興味深く感じた。この小さな驚きが、日本とポルトガルの文化交流についてもっと知りたいという思いにつながった。

帰国後、私はルイス・フロイス著『日本史』を読み、日本とポルトガルの文化交流の起源を調べ始めた。そこには、ポルトガル人と日本人の大名が同じ食卓を囲む様子や、互いの国の物品を見せ合う場面が描かれていた。これらの記述から、ポルトガルの文化や物がどのように日本に広まり、日本人に受け入れられていったのかを具体的に想像することができ、とても面白かった。この調査を通して、

図 1 弁論の様子



自分の疑問を出発点に、行動し、調べ、理解をする過程が大切だと感じた。

弁論大会のための原稿は、単に歴史的事実を述べるのではなく、自分がどのような体験をし、どのような感情を抱き、その疑問を解決するために何をしたのかという過程を明確に伝えることを意識した。日本語ですら弁論をした経験がない私にとって、ポルトガル語で多くの人の

前に立つことは大きな挑戦であり、本番前は経験したことのないような緊張を感じた。しかし、何度もイメージトレーニングを重ね、自分なりに準備をして発表に臨んだ。その結果、「京都新聞賞」を受賞することができ、本当にうれしかった。また、大会に出場して、同じ学生のレベルの高さに大きな刺激を受けた。私と同じように大学からポルトガル語を学び始めたはずなのに、発音が美しく、ジェスチャーも自然で、表現力に優れた発表ばかりだった。この経験を通して、もっとポルトガル語を学び、異文化理解を深めていきたいという意欲が強くなった。今回の弁論大会は、語学力だけでなく、自分の興味を深め、行動につなげる大切さを学んだ貴重な経験であった。

図2 表彰の様子



全日本ポルトガル語弁論大会に参加して

グローバルコミュニケーション学科3年 永井 晴花

「Boa viagem」この言葉から私の発表は始まった。ポルトガル語弁論大会までの一ヶ月半、私が一番口にした言葉だったに違いない。もちろん緊張はしていたが、あの時に壇上から見た景色は今でも鮮明に覚えている。

先生からの勧めもあり、ポルトガル語弁論大会に出場することを決意した。話す内容も一から自分で考える必要があり、すぐに原稿文の制作に取り掛かった。ポルトガル語を学んできた中で、印象に残っていることを話したいと思い、一ヶ月間の留学で経験した、挨拶について話すことにした。先生方の力添えがあり、何とか一週間程度で原稿を完成させた。しかし、ポルトガル語を暗記して人前で話した経験もなければ、弁論大会に出場した経験もなかった。

一段落ごと暗記をし、毎週、発音練習をする時間を作っていた。単語ひとつずつを区切って話すのではなく、つなげて、滑らかに、ネイティブの人々にも伝わるように話すことに重点を置いた。とにかく、相手が聞き取りやすいポル

トガル語を話すことに努めた。



全ての文章をほとんど暗記し終えた頃、大会まで残り二週間となっていた。私たちは友達や家族と会話をする時、言葉にリアクションや話すスピードが加わることで、話者の想いを理解することが出来る。弁論大会に話し相手は存在しないが、表情、声の抑揚、ジェスチャーが、私の想いを伝える手助けをしてくれると感じていた。そこで、授業中に少し時間をもらい、クラスメイトの前で話す練習をした。私は普段リアクションが大きいため、意識して大きな身振り、笑顔を作り出す

必要があり、このことが練習の中で一番苦勞したことだった。

11月15日、京都外国語大学で本番を迎えた。受付でプログラムが手渡され、そこで初めて発表の順番を知った。まさかの一番手。開会式が執り行われ、私の発表する時間はすぐに来た。練習した通り、いつも通りに「Boa viagem」から始めた。5分間はあっという間に終わった。この日のために注いだ一ヶ月半の全てを出し切った。発表し終えた後の拍手は、今までで、一番嬉しいものだった。

それからは、他大学の出場者の弁論を聞き、ポルトガル語を勉強している仲間が全国にいること、ポルトガル語を勉強していることをみんなが誇りに思っていることが伝わってきた。

大会が終わった後、聴衆として来ていた日本の大学院に通うブラジル人の方が話しかけてくださった。自分たちの挨拶を誇りに思ったと言ってくれたこと、私の話すポルトガル語がネイティブの人にも伝わっていたことを大変嬉しく思った。

ポルトガル語を日本で使う機会は少ない。ポルトガル語話者と交流する機会は限定的で、自分の力を試す機会は少ない。それ以上に、人前で披露する機会はめったにない。そんな状況下でポルトガル語弁論大会に参加できたことはとても貴重な経験だった。この経験がポルトガル語の学びを深める上で大きな糧となるのは間違いないだろう。



4. 中国語圏

中国研修における学生交流と相互理解の経験

－ 2025年3月〈臨地実習C〉で感じたこと－

グローバルコミュニケーション学科4年 米津 小智

本研修では、中国の学生との交流を通じて、言語や文化の壁を越えた人間関係の構築を経験した。特に、現地の学生たちの温かい人柄や積極的な交流姿勢が印象的であった。彼らは日本語で積極的にコミュニケーションを取ろうと努力し、私たちに対して細やかな気遣いを見せてくれた。本レポートでは、研修期間中に感じた中国の学生の親しみやすさや、おもてなしの精神について述べる。

現地の学生たちは非常に親しみやすく、私たちを温かく迎えてくれた。交流の際には、日本語を積極的に使おうとする努力する姿勢を見せてくれて、相互理解への強い関心が感じられた。

例えば、私がネイルが好きだという話をした際、ある学生が大学周辺のネイルサロンを予約してくれた。事前に日本語のネイルに関する単語や表現を学んできてくれたことに驚いた。彼女は日本語でネイルの専門用語を使いながら話しかけてくれ、ネイリストさんと私の間に入り翻訳をしてくれた。また、日本語を話せない学生であっても、英語やスマートフォンの翻訳機能を駆使しながら、なんとか意思疎通を図ろうとする姿勢が印象的だった。

交流先の日本語学科の学生でなくても「日本人なの？ WeChat つながろうよ」と積極的に声をかけてくれる学生もいた。加えて、中国の学生たちは、相手を思いやる行動を自然に行っていた。例えば、街を歩いている際に「このケーキおいしそう」と何気なく言ったところ、後からホールケーキを買ってきてくれた学生がいた。その気遣いに感動するとともに、彼らのもてなしの文化が生活の中に根付いていることを実感した。

研修5日目ぐらになると「さちそろそろ日本のご飯が食べたくなってきたでしょ！」と私のために日本料理店を探して連れて行ってしてくれた。私は口には出さ

なかったものの、日本料理がすごく恋しくなっていたのでその気持ちを察してくれて本当にうれしかった。中国料理は辛いものか、脂っぽいものが多かったので、日本ラーメン屋さんで日本の出汁の味に感動した。

さらに、猫カフェでは、高校生のグループがスマートフォンに「日本人ですか？ ようこそ！」とメッセージを表示して話しかけてくれた。言葉が十分に通じない中でも、コミュニケーションを取ろうとする姿勢が見られた。文化交流の一環として、カラオケを楽しむ機会があった。中国の学生たちは、それぞれ日本語の楽曲を一曲ずつ準備しており、私のために披露してくれた。この姿勢には驚かされるとともに、日本文化への関心の高さを再認識した。私がテレサ・テンの楽曲を歌うと、学生たちは大いに盛り上がり、音楽を通じた文化の共有ができたと感じた。また、中国のカラオケは日本のものと比較して、より派手でエネルギー感ある雰囲気があり、文化の違いを実感する貴重な機会となった。

ただ中国の交通事情を目の当たりにし、日本との違いに驚かされた。日本では交通ルールが厳格に守られ、歩行者優先の意識が根付いているが、中国ではより自由な運転が行われていた。中国には交通ルールがないのではないかと思ってしまふほどだった。

一日中クラクションの音が鳴り響き、交通の流れは常に混沌としていた。特に驚いたのは、タクシーでさえ信号無視をしたり、クラクションを連発したりしていたことだ。また、原付バイクが歩道を走行する光景も頻繁に見られ、歩行者は原付を避けながら歩かなければならなかった。後方からスピードを出した原付が迫り、クラクションを鳴らしながら通行を促してくることもあった。このような状況は、日本の交通マナーに慣れた私にとっては非常に異質に感じられたが、中国の人々にとっては当たり前のことのように、みな特に驚いている様子もなかった。

研修の終盤には、別れの時が近づくとつれて強い寂しさを感じるようになった。親しくなった学生が「寂しい」と言って涙を流す姿を見て、私自身も胸が締め付けられる思いがし、短い期間であっても深い関係性を築くことができていたのだと実感した。

V. 4. 中国語圏

本研修を通じて、中国の学生の温かさや相手を思いやる姿勢に触れ、異文化交流とは単に言語や文化の違いを知ることではなく、相手を理解しようとする態度や、歩み寄ろうとする行動の積み重ねによって成り立つものであると学んだ。さらに、言葉が十分に通じなくとも、工夫や気遣いによって心を通わせることができるという経験は、今後、異なる価値観や背景を持つ人々と関わる上での大きな指針となると考えられる。

本研修で得た学びを一過性の体験で終わらせるのではなく、今後の学習や将来の国際的な交流の場において生かし、相手を尊重しながら積極的に関わっていきたい。

VI 退職者

長年にわたって御指導くださり、
ありがとうございました。

VI. 退職者



良知 恵美子 RACHI Emiko

教授

所属：外国語学部 英米語学科

学位：修士(教育学)

学歴

1986年 静岡大学大学院 教育学研究科 英語教育英語学専修 修了

主な経歴

1990年～1996年 常葉学園短期大学 英文科専任講師
1996年～2004年 常葉学園短期大学 英語英文科准教授
2004年～2011年 常葉大学 外国語学部 英米語学科准教授
2011年～現在に至る 常葉大学 外国語学部 英米語学科教授

専門領域(分野)

言語習得

研究テーマ

■ 英語多読による言語学習、読書コミュニティの形成

主要な研究業績・社会活動実績

- Reading Community を育てる取り組み ―公立図書館における英語多読支援をとおして― 図書館多読への招待シンポジウム, 2024年
- 多文化共生ファシリテーターを育成するための地域貢献活動と教育的効果とは何か(共著), 2024年
- Lifelong Learning Communities through Extensive Reading at a Local Library and Online (共著). 6th Extensive Reading World Congress, 2023年
- 『英語多読ガイド』(共著), 2022年
- 図書館多読のすすめ方 『専門図書館』296号 専門図書館協議会発行, 2019年
- 日本人大学生の英語多読における阻害要因：読書教育と脳科学の視点から(共著), 2018年
- 社会活動 入門英語多読講座 静岡市立北部図書館 2016年～現在に至る



天野 剛至 AMANO Tsuyoshi

准教授

所属：外国語学部 英米語学科

学位：修士(学術)

学歴

1996年～2001年 同志社大学大学院アメリカ研究科博士課程満期退学

主な経歴

2014年～2017年 北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科 専任講師
2017年～2018年 静岡県立大学 言語コミュニケーション研究センター 特任講師
2018年～2019年 鈴鹿大学 国際人間科学部 国際学科 准教授
2019年～2022年 鈴鹿大学 国際地域学部 国際地域学科 准教授
2022年～2023年 鈴鹿大学 国際地域学部 国際地域学科 教授
2023年～現在に至る 常葉大学 外国語学部 英米語学科 准教授

専門領域(分野)

アメリカ研究、外国語教育

研究テーマ

■ アメリカ思春期文学・映画作品の分析

主要な研究業績・社会活動実績

- 「秋深し五七五交わす加奈陀かな — 戦前カナダにおける日系人俳句コミュニティの社会的考察」第六回 国際協力機構(JICA)海外移住「論文」および「エッセイ・評論」最優秀賞(論文部門), 2025年10月.
- 「ステイーブストン博物館 — 日系水産業移民の歴史をたどる：和歌山県出身者の定着と差別排斥、そして抵抗」『北米の小さな博物館 4: 「知」の世界遺産』, 彩流社, 2025年, pp. 250-257.
- “Haiku Network among Japanese Immigrants in Canada during Internment: A Case Study of the Lemon Creek and Greenwood Internment Camps.” *The Journal of American and Canadian Studies*, no. 42, Mar. 2025, pp. 3-45.
- 「リミナル・ペルソナ — トランスナショナル児童文学におけるメタファーとしての〈穴〉に関する一考察」鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要(人文科学・社会科学編), no. 6, 2023, pp. 1-20.

VI. 退職者



市川 真矢 ICHIKAWA Shinya

准教授

所属：外国語学部・グローバルコミュニケーション学科

学位：修士(文学)

学歴

1989年 東北大学大学院 文学研究科博士前期課程(英語学英文学言語学専攻)修了

主な経歴

1989年～2003年	常葉学園短期大学 英文科 講師
2003年～2007年	常葉学園短期大学 英語英文科 助教授
2007年～2014年	常葉学園短期大学 英語英文科 准教授
2014年～2019年	常葉大学短期大学部 英語英文科 准教授
2019年～現在に至る	常葉大学 外国語学部 准教授

専門領域(分野)

英語学、外国語教育

研究テーマ

■ 英語統語論および英語形態論

主要な研究業績・社会活動実績

- 「常葉学園短期大学英語英文科学生の英語学習・英語能力に関する実態調査(1)」(共著)『常葉学園短期大学紀要』第27号 1996年
- 「常葉学園短期大学英語英文科学生の英語学習・英語能力に関する実態調査(2)」(共著)『常葉学園短期大学紀要』第28号 1997年
- 『世界に伝える日本のいま』(共著)成美堂 1998年
- 「常葉学園短期大学における習熟度別 Reading 指導の成果 - TOEIC Reading Section との相関に注目して」(共著)『中部地区英語教育学会紀要』第28号 1998年
- 菊川町教育委員会 - 常葉短大公開講座講師 1998-1999年
- 焼津市 IT 講習会講師 2001年
- 「英語における転換についての一考察 - 過去30年の「動詞化された名詞」から -」『常葉大学短期大学部紀要』第45号 2014年
- 「『英語でライフデザイン』～使える英語とキャリア教育で促す人格形成～」(共著)『常葉大学短期大学部紀要』第45号 2014年
- 『源氏物語のアーサー・ウェイリー訳を読むために』(共著)株式会社社籙原印刷所出版部 2015年

VII 外国語学部言語文化研究会

Ⅶ. 外国語学部言語文化研究会

1. 常葉大学外国語学部言語文化研究会講演会

講 師：小泉 凡（島根県立大学短期大学部 名誉教授、小泉八雲記念館 館長
焼津小泉八雲記念館 名誉館長）

演 題：「現代に生きる小泉八雲とセツ、そして怪談」

司 会：那須野 絢子（外国語学部英米語学科 講師）

会 場：常葉大学草薙キャンパス A201

日 時：2025 年 11 月 28 日（金）16:45 ～ 18:15

2. 『とこはことのは』 39 号

『とこはことのは』 39 号は、2026 年 3 月 10 日に発行の運びとなりました。

編集に携わった 2025 年度の委員は、小口一郎（英米語学科・委員長）、戸田裕司（グローバルコミュニケーション学科）、那須野絢子（英米語学科）の 3 名です。これまで長年にわたり、グローバルコミュニケーション学科の若松大祐先生が編集委員長の職責を担ってくださっていました。しかし先生が他の重要な委員職につかれたことから、今年度は小口が新委員長となり、編集経験の深い戸田、那須野両委員とともにこの外国語学部の機関誌を担当することになりました。これまでの編集委員会によって培われたさまざまな知見や経験を受け継ぎ・生かしながら、外国語学部の 1 年間の教育、研究、社会的活動の記録の場として、そして教員と学生のフォーラムとして、『とこはことのは』をさらに充実させ、発展させるべく尽力していく所存です。何かと至らぬ点も多いかとは存じますが、読者の皆様には今後ともご支援、御協力方、宜しく申し上げます。また、これまで学部構成員のさまざまな声を集め、充実した誌面を築いてくださった若松先生には、あらためてここに御礼を申し上げたいと思います。

39 号では、新たに学生諸君による意欲あふれる「エッセイ」を掲載することになった他、各言語圏の活動のセクションでもこれまでと同様、多くの学生諸君に寄稿していただきました。また本格的な英文記事を掲載できたことも有意義であり、他の投稿・寄稿記事とあわせ、伝統ある本学部の教育および研究的達成の片鱗を示すものとなりました。また、本年度を区切りに新しい門出を迎えられる

方もいらっしゃいます。本号にも、年度末にて本学部を離れる 3 名の先生方のご経歴・ご業績を掲載し、教育・研究・運営などで多大なる貢献をしてくださったことに感謝の念を表したいと存じます。

今号は、このように印刷冊子の形でお届けすることができました。しかし世の流れもあり、当誌も近い将来電子化され、オンラインでのアクセスが基本となる予定です。編集委員会としては、そうした変化を前向きに受け入れながら、今後とも誌面・内容の充実に努めていきたい所存です。

末筆となりますが、前委員長の若松先生に加え、学部長の増井実子先生からは、編集の各段階で懇切なアドバイスをいただきました。やや心許ないところもあったと思われる現委員長から、この場をお借りして心より御礼を述べさせていただきます。

2026 年 2 月 28 日

『とこはことのは』編集委員長

小口 一郎

とこはことのは

第 39 号

2026 年 3 月 10 日

発 行：常葉大学 外国語学部 言語文化研究会

代 表：増井実子

編集委員：小口一郎（委員長）、戸田裕司、那須野絢子

連絡先：〒 422-8581 静岡市駿河区弥生町 6 番 1 号

常葉大学外国語学部『とこはことのは』編集委員会

TEL (054) 297-6100[代表], FAX (054) 297-6101[代表]

<https://www.tokoha-u.ac.jp/language/publication/>

ISSN: 2435-8851

印刷製本 株式会社 篠原印刷所

〒 422-8033 静岡市駿河区登呂 6 丁目 7 - 5

TEL (054) 286-5141

